
幼馴染は魔王陛下

八滝 鈴鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染は魔王陛下

【Nコード】

N0082E

【作者名】

八滝 鈴鹿

【あらすじ】

倉里真桜。淡泊でクール、ちっちゃくて最強、副会長にして“魔王陛下”。そんな幼馴染を持つ幸薄ボーイ東雲義裕を中心に、愉快的な仲間たちが織り成す痛快学園コメディー、ここに開幕です。

まるで関係のないプロローグ

「――これは、とある少女の過去の情景。その断片」

鈍色の空。舞い落ちるは白。

窓の外に見える景色は銀世界。

季節は――冬。

少女は一人、ベッドの上で外界を眺めていた。

風邪。それが少女が外に出れない現在の理由。

しかし、たとえそれが治っても彼女が外に出ることはないだろう。

彼女の体は外界に出ることを可能とする程の強さを持っていないのだから。

こうやって、窓から覗くことしかできないのだから。

「何見てるの？」

唐突に、声が掛かる。

少女は視線をずらし、声の主を視界に収める。

少女と同じくらいの年頃の少年。いまや数少ない少女の話し相手である兄だ。

「何だと思う？」

「世界」

「……そうだね」

兄の答えは突飛な答えだったが、あながち間違っているという訳ではない。

少女は見ることもない景色すら見ようとしていた。

「それはともかく、ただいま」

「うん。おかえりなさい、お兄ちゃん。今日は学校どうだった？」

少女は訊く。自分がいることができない、本来なら日常となるはずの場所の出来事を。

兄は彼女より一つ年上なので得られる話は彼女の居場所の話ではないが、それでも。

「ん。今日はね——」

兄も自分の話が少女の本当に求めるものではないと分かっているが、話す。

自分がしてあげられることが、それだけしかないと分かっているから。

他愛無い、どこにでもあるだろう、日常の、日常でしかない話を、ただ語る。

――不意に、

「いってきまーす！」

そんな声が聞こえてきた。

窓の外を覗けば、一人の少年が雪の降り積もる道路を走っていく様が見えた。

「義裕よしひろだね」

兄が彼の名前を言葉にする。

隣家に住む、少女と同じ年の少年だ。少女も小学校に上がる前までは、毎日顔を合わせて彼と遊んだ。

あれから三年経った今は、遊ぶどころか顔を合わせることすらない。

「元気そうだね」

彼との付き合いがなくなった少女にはもう、それくらいしか言うことがない。

……いや、もう一つ言える事があった。

「もし、わたしが、わたしの体が弱くなかったら……また、みんなで遊べるかな？」

呟いた声が世界に溶けた。

「ん。そうだね」

傍らの兄はその世界を肯定した。

『もしも〜だったら』——全ての人が一生に一度は思うであろう、その言葉。

それは可能性を論じる言葉。

自らの望み通りにならなかった出来事を叶えるため。あるいは自らの知的好奇心を満たすために、人は“IF”を求め、思考の中でそれを完成させる。

完成した“IF”はそのままでは机上の空論、名も無き空想、どこまでも空乏、いつまでも空虚。

しかし言葉に出した瞬間、それは世界に溶け、一つの可能性^{ノゾミ}を固定する。

固定された可能性^{ノゾミ}は世界の中で成長し、やがては世界を飲み込む結果となる。

夢見た可能性に、どこまでもどこまでも忠実な結果。

言うなれば異世界、別世界、平行世界、パラレルワールド。

誰の願いだって叶っている。

だけど皆気付かないだけ。

だってそれはもう一人の自分が叶えているから。

叶っていても、願った自分は気付かない。気付けない。

「それでは覗いてみましょうか。少女が望んだ、可能性の結果を――」

まるで関係のないプロローグ（後書き）

初っ端から“微ファンタジー”。

サブタイトル通り本編を楽しむには“まるで関係のない”お話。

いつかこの一連の話を続けたり、終わらせたりするときに使われるかもしれない。

けど、やっぱり普段は使われない設定なので読み流してください。

第1話：幼馴染論と朝の挨拶

——唐突ですが、“幼馴染”と聞いてどんなものを思い浮かべますか？

こんにちわ。いや、むしろ、おはようございます、か？ 東雲しのめ義裕よしひろです。本日は夢の中で誰かに話しかけている次第であります。

『誰かって誰だ？』って？ そりゃ知りませんよ、強いて言えばその疑問を俺に伝えてくれたテレパスな誰かです。日本語が分かる方が希望。

日本国民よ、我が声を聞けえいっ！

……さて、東雲式夢の中アンケート。イエス、上で言ったヤツです。『“幼馴染”と聞いたらどんなものを思い浮かべますか？』ってヤツ。どうでしょう？

我が友人a（仮）曰く、幼馴染とは大別して四種類だそうです。

タイプA“世話焼きタイプ”。

友人aのコメント

『言うなれば王道幼馴染だな。』

甲斐甲斐しく朝も早くに起こしにきてくれたり、昼には弁当を作ってきてくれたりとまあ、世話女房な感じが堪らないな！。

こういうキャラは大抵の場合オプシオンとして、お袋さんレベルの料理スキル所持してたりするんだぞっ。

……あ？ 何？ 男の幼馴染？ 何言ってんだお前、幼馴染って言ったら女の子に決まってんだろおおおおっ！！！！』

タイプB“世話焼かれタイプ”。

友人αのコメント

『文字通り、さっき言ったのと逆のタイプだな。』

“妹みたいな幼馴染”系は大体こっちに入ると考えていいだろう。もっとも“ダメなお姉ちゃん”系や“しっかり者の妹”系みたいな例外もあるから一概に言えるわけじゃないが。

このタイプはあれだな、『こいつには俺が付いておいてやらないと』みたいなことを感じるわけよ。『俺に、任せとけえ！』って言いたくなるな。

……あ？ 何？ 男の幼馴染？ 何言ってんだお前、幼馴染って言ったら女の子に（以下略）』

タイプC“親友タイプ”。

友人αのコメント

『まあゲームやっててリアリティを求めるなら一番のタイプだな。』

前の二つは現実にいるわけないと言われりゃ、さすがに完全に説き伏せる自身はない。が、これは別だ！ この気兼ねせずに付き合っている感じがいいねえ。

大概、恋人になるエンドの他に友情エンドがあるんだが、これはこのタイプならではの感じだな。美しいぞ、男女の友情バンザイ！

……あ？ 何？ 男の幼馴染？ 何言ってんだお前、幼馴染って言ったら（以下略）』

タイプD “ガキ大将タイプ”。

友人αのコメント

『時代はツンデレである！ という訳でツンデレタイプだ。

え？ そう言っちゃ実も蓋もないって？ だってこれ以上に何がある？

気心知れ渡った間柄、だからこそその遠慮のない罵倒、罵倒、罵倒

！ ああ、いいねえ。

……え？ 気持ち悪い？ 何だとテメェ！ 謝れ！ 全国のツンデレ好きに謝りやがれえええええっ！！！！』

お前が謝れっ！

コホン。テレパスな誰かはどうでしょう？

もし友人αのような考えを持っている人がいるなら、ぜひ電波を飛ばしてください。受信します。いないだろうけど。ぴぴー、ぴっぴー。

え……？ 俺がどう思ってるかって？ そうだなー、幼馴染を一言で表すならば——“魔王陛下”。

どう言うことかって？ 俺の幼馴染（女・実在）がそれなんだよ。

友人αのタイプ別にのつとれば、“ツンデレからデレを抜いて、世話焼き属性を付けた、妹みたいなナリの、親友タイプ”。

いや、むしろ“ツンデレからデレを抜く”じゃなく、“クーデレからデレを抜く”感じか。『そりゃただのクールだ』とか言わんといて。

全然タイプ別になってないという意見は受け付けません。あいつはそんな枠に収まるようなキャラじゃないんだ。うん。

——ジリリリリリリリリリリリ！

どうやら、別れのお時間です。目覚まし時計が鳴っとなります。
それではテレパスな誰か、アンケートご協力ありがとう。……え
？ 協力してない？ それは言わない約束でしょ。

それでは、また会う日まで！。シーユーアゲイン！

——ジリリリリリリリリリリリリ！

目覚まし時計がうるさく音を立てている。

まあ、うるさくするのが目覚まし時計の仕事だ。彼はよくやって
くれてる、うん。

ほぼ無意識で左手を伸ばし、スイッチを切る。

目覚まし君は俺が起きたと思い沈黙するが、そんなわけはない。
人はいつ、いかなる場合であっても、『あと五分……』と言うの
をやめられないのだ。

かく言う俺も例に漏れず『あと五分……』と言って睡眠に入る。
いや、実際には口に出さないけど。

ああ、惰眠とはすばらしい。今が何月何日何曜日、何時何分なの
かも気にならないや。

この安息の時間を乱す者がいるならば、何人たりともかかってこ
い！

「睡眠中のあなたに警告するわ。腹筋に力を入れなさい」

睡眠体制に入った俺の耳に飛び込んでくるソプラノボイス。

あれ、この部屋には俺一人しかない筈。何だ？　もしや幽霊――

「――せいっ！」

「かばああああああ!!?」

腹部に衝撃！　腹部に衝撃です艦長！　浸水しています、このま

までは沈みます！

ああっ、海の底に意識が沈む。ブラックアウト……。

「起きないなら――もう一発行くわよ」

「起きておりますっ、サー！」

ベッドの上に、文字通り飛び起きる。

ブラックアウトしません。あんなモノもう一発くらったらホントに沈むわ……海底どころか地獄の底にな！

「誰が男だ^{サー}」

「ぐほおあああああ！」

右ストレエエエエト！　まともに入ったあああ！　ダウン！
カウント始めます！　3、2、1……。

「また寝たのかしら？ 仕方ないわね……」

「起きておりますっ、ママ！」

ガバツ、つと不死鳥の如く甦る俺。

そう何度も（強制的に）眠ってたまるか。俺はまだ死ねない！

「ちっ……おはよう、義裕」

「『ちっ』って言った！ 今絶対『ちっ』って言ったよ、この人！」

「言っていないわ」

「いや、絶対言ったって「私が言っていないと言ったら言っていないよ」……はい、言ってます」

怖いです。恐いです。眼光がおっかないです。

もし視線に物理的な力があつたとしたら、この視線は原子力発電所の壁ですら貫通できる……ような気がする。

そんな恐怖の眼力（左右共に2.0）の持ち主である彼女は幽霊……ではもちろんなく、むしろ幽霊だったらどれだけよいか、夢の中でも話題になった我が幼馴染（生きてる）である。

「それじゃ改めて。——おはよう、義裕」

くらさとし
倉里 真桜。

我が東雲家の隣人であり、同じ学校に通う同級生にして、幼稚園の頃からの付き合いである幼馴染。

学校では成績優秀な生徒会副会長。まあ、デキル人ってやつだ。背中辺りまである、少し茶味があった髪を結ぶことなく下ろしている。

欠点は性格と……身長？ たしか139センチだったか。俺が知る限り、学校でコイツより小さい人間は一人しかいない。同年代ではおそらく最小。

今着ている学校指定のブレザーもきつと最小サイズだろう。カルシウム足りないぞ、カルシウム！

身長とスタイル（主に胸囲）を除けば容姿も悪くない、ってかい方だろう。

ところで、制服着てるってことは今日は平日だったか。盲点だったぜ。あやうく『あと五分……』無間地獄でループするところだった。まあ、起こしてくれたという事実だけ見れば感謝してもいい、むしろ感謝すべきなのだろうが……。

「マイ幼馴染、真桜。あなた、ワタシが寝てる時、ナニしましたか？」

睡眠中、腹部に走った衝撃を忘れない。忘れないどころか現在進行形で痛みを訴えておるわ！

「はっ！」

「ぬがあっ！ い、いきなり何すんじゃあ！」

さっきまでと違って俺に非はない……ハズ！

ってか痛え！ 予備動作なしで思いつきスネ蹴りましたよ、この人！ 立ち往生の弁慶さんだって泣いちゃうよ、牛若丸！

「挨拶されたのに返さないのが悪い」

「え、今『おはよう』って返さなかったから！？ つーか挨拶しないのはただけ罪深いことなんじゃ！」

「1945年8月9日に長崎で起きた出来事ぐらい罪深い」

原爆クラス！？ 広島リトルボーイの小さな少年じゃなく、あえて長崎の太ファットちゃんをチョイスしてくるのが嫌味じゃないかと思うのは、はたして俺の勘ぐりすぎですかね！？

「おはよう、義裕」

俺の邪推など露知らず、真桜はまったく悪びれずに同じ言葉を投げかけてくる。

……ここは選択肢を間違えてはいけない。なんと言っても、これはテイク2……いやテイク3だ。

三度目の正直。仏の顔も三度まで。三時のおやつは文○堂。ここ間違えたら、即エンド。当然バッドエンド、それもデッドエンドだ。

落ち着け、俺！ こういう時こそ冷静に！ そう、あれだ、KO OLになれ義裕！

「そのネタはもう古いわ」

心の中にツツコミ入れないで！ 俺のプライバシーは一体どこに！？

「プライバシー云々言いたいなら、まず小声で思考を喋る癖をなく

しなさい」

え、声に出てた？ うわー、俺、凄いイタイ人だ。
誰か哀れな俺に状況打開の知識をくれー！

「ちなみにKoolはブラウン&ウィリアムソン・タバコ社の、世界初のメンソール入りタバコのことよ」

そんな無駄知識はいらないいいい！

「……………」

無言の圧力を感じる。視線が重い。

しかし言わなくては！ 言わなくてはいかんぞ、一等海士！
わかりました、艦長！ 『ジャンボ！ ハバリ！』ですね！
待て！ それはダメだ、危険だ！ 意味は当たっているがスワヒリ語は明らかに地雷……いや機雷だ！ 面舵一杯、日本語で全速前進！

「お、おはよう」

言えた！ 言えましたよ、艦長！

って、言えて当たり前だよ！ 幼稚園児でも普通に言えるわ！
この一言の挨拶のために一体何分掛けてんだよ俺！

だが、それだけの時間を掛けた価値はあったようだ。マイ幼馴染は珍しく微笑スマイルんでいるぞ。何て美しい微笑みなんだ。

「あと5分で準備を終わらせないと、朝食はないと思いなさい」

……なんて美しい冷笑なんだ。
スマイル

「それと、寝ているあなたにしたことは『踵落とし』」

下手したら中身が出てたよ、それは。

な、テレパスな誰か。我が幼馴染はこういうヤツだ。

だが、こんなものは序の口。

“魔王陛下”はダテじゃない！ って言ってコロニー落としを阻止するくらいとんでもないヤツなんだ。

分かりやすい逸話をいくつか紹介しよう。あれは一昨年の夏のことだった……。

——ガチャ。

「五分経ったわよ」

「……………」

まだ、制服に着替えただけだス。

……朝食抜き、デスカ。

「遅刻してもいいなら食べても構わないわよ？ もっとも、これ以上遅刻したら進級も危ういけど」

「心を読むな！　そして抜くよ！　ダブるのは勘弁だよ！」

第1話：幼馴染論と朝の挨拶（後書き）

一人称で書くのは初めてなのでうまくできてるか不安です。

この物語は相当長く続く予定ですが、お付き合いしてくれると嬉しいです。

第2話：母と魔王と登校風景

「おはよう母さん」

朝食食べたら遅刻を宣告された俺は、真桜と共に一階のリビングへ。

そこには当たり前のようにマイマザーがいた……仕事は？

ちなみに我が東雲家は築30年、3LDKの一戸建て。

現代建築ではなかなか見られない、ギシギシいう階段が付いたステキな住宅だ。

そして母さんは働きウーマンである。つまり平日の、月曜日の朝っぱらからリビングでTV——朝の連続テレビ小説を見てるのはおかしい訳で。

「お。ヒロくん、やっと起きたねー。真桜ちゃん、どうもありがとうねー」

「いえ、いつものことですから。お気になさらず」

真桜がなにやら偉そうなことを言う。

いつも世話になった覚えはない。せいぜい1週間に4日くらいだ。

あ、ヒロくんというのは俺のことだ。義裕の祐から転じてヒロくん。

ヨシくんじゃないのは父さんの名前にも義の字が入るからだ。

「そんな謙遜しちゃってー。いいわねー、いっそウチの子にならな

い？」

「私は今の家が好きなので、お断りさせていただきます」

「そっかー、残念。ヒロくんのお嫁さんになってくれてもいいのよ？」

「全身全霊をもって断る」

丁寧語かなぐり捨てたよ。そんなに嫌か、俺の嫁。

「そうよねー。人生をドブに捨てるような物だもんねー」

「あんたはそんなに息子が嫌いなのか、マイマザアアアア！」

少しはフォローしてくれよ、そこは！

「そうね。確かに今のは言いすぎです、紗百合さゆりさん」

おおっ！？ まさかまさかの真桜さんがフォローを？ これは嬉しい――

「ドブではなく、ヘドロの浮いた汚らしい海です」

「おい」

「それもそうねー」

「あんたら、そこまで俺が嫌いか！」

フォローどころか追い討ちだよ。俺が何をしたというのだ？

「「寝坊」」

「ハモんなああああ！」

そして心を読むな！

もうある種イジメだよ。DVだよ。ドラマティック・ヴァイオレンスだよ。

「ま、それはともかくー」

流された！

「ヒロくんも真桜ちゃんも遅刻しちゃうよー？ もう次回予告だもの」

「え？」

言われてTVを見てみれば。おおっ、確かに次回予告。明日は見所満載だなー……じゃなくて！

「もう、8時半!？」

「何をいまさら言ってるのかしら」

「ポケポケ息子でホントごめんねー」

なんか色々バカにされている気がするが、この際無視！

「何故だ！ 目覚ましが鳴ってから、まだそこまでの時は経っていないハズなのに……！」

お、俺の体内時計が狂ったというのか？ それとも、世界か？
この世界が狂ったのか！？

「そうね。目覚ましは鳴ってから、まだ30分も経ってないわ」

ほっ、よかった。どちらも正常なようだ……って、あれ？

「く、狂っていたのは目覚まし時計か！」

「いえ、あなたの頭よ」

うわ、ひでえ。

「ヒロくん、休日のときのまま8時に鳴るようにセットしてたんでしょー？」

「おまけに起きてから、まともに時計を見てないようね」

「オウ、ノー！ アイ・デイドウ・イット・アゲイン！」

「……………」

「……………」

うわ、空気が重くなった。二人とも無言だよ。

「… Go to hell」

「ごめんなさい」

真桜、怖いよ。ボソつと言わないでよ。

「……ともかく、行くわよ」

「了解です」

素直に従っておく、俺は死ぬつもりはない。

「いってらっしゃーい」

母さんの暢気な声が後ろから響いた。

……だから仕事はどうしたの？

俺たちが通う、私立宮水沢学園みやみさわは東雲家から徒歩30分、ステルスで3秒くらいの場所にある。

中学から大学までのエスカレーター式で、敷地自体もかなり広い。ちなみに俺と真桜は高等部の2年6組だ。

朝のホームルーム開始のチャイムまでに着席しなければ遅刻。チャイムが鳴るのは8時40分である。

「今、30分だから……」

つまり、あと10分で教室まで行かなければならない訳だ。
……あは、あはははははは。

「誰か、俺にステルス戦闘機を与えてくれえええええ！」

「馬鹿なこと言っていないで行くわよ。やろうと思えば3分で行けるわ」

「いや、それは無理」

ま、3分は無理だとしても、死に物狂いで走ればなんとか間に合うかもしれない。

全力マラソン開始である。パパラパッパッパ。

走る。走る。ひたすら、走る。走って。走って。走ります。

「ぜえ、ぜえ……」

死ぬう。死ねるう。誰か助けてえ……。

「黙って走りなさい。チーターに追われるトムソンガゼルのように」

そんな動物な奇想天外の話題はいらない……。。

ぬう、真桜はこのハイペースの中、まるで息を乱してません。
俺の体力がないワケじゃないよ？ 体育は得意分野だよ。

さらに言えば、荷物の問題でもない。

俺、学生鞆（ほぼ空っぽ）だけ。真桜は、学生鞆（中身ギッシリ）、1億円とか入れるようなジェラルミンケース（中身ドッサリ）、竹刀袋（中身ズッシリ）。

……俺の体力がないワケじゃないよ？ ホントだよ？

「校門、見えたわよ」

何い！？ おお、校門だ！

時刻を確認する余裕などないが、敷地内に滑り込めればなんとか……！

「滑り込むのは無理そうだけどね」

見れば、ガラガラと音を立てて校門が閉まっていく。な、なんで！？

「風紀委員ね。陽介以外が活動しているのは久々に見るわね……感心感心」

めったに活動しないような風紀委員！ 何故この非常時に限って活動する！？

「まさか——嫌がらせかああああ！？」

「わざわざ嫌がらせするような価値が、義裕にあると思ってるの？」

それはそれで酷い！

「まあ、そんなこと言ってる間に閉まったんだけど」

「ノオオオオオオオオッ！」

なんてこったい、間に合わなかった？

この正門以外からでも敷地内には入れるけど、非常に遠回り。教室までたどり着けません。

そんな校門寸前で失速する俺に、

「空を自由に飛びたいかしら？」

「は……？」

真桜さん、いきなり何を？ タケ○プターでも出してくれますか

？ それともヘリト○ボ？

ガシッ、っと俺の襟首を引っつかむ真桜。背が低いから大変そうです。

って、何する気！？

「舌噛みたくなかったら、口閉じてなさい」

「うおおおおおおっ!？」

投げた!? 投げられました! 信じられません……俺、飛んできます!

そつらをじゅーに、とびたいなー。

「――ぐふっ!」

空を自由落下して墜落しました、東雲 義裕です。痛いです。

一応、校門の高さは2メートルはあるはずんだけど……越えちゃったよ、オイ。

くっ、俺を投げ飛ばした張本人は!?

「――っと! 何ボサツとしてるの、早く行くなきゃチャイム鳴るわよ」

「……………」

フツーに校門飛び越えてきました。

いや、2メートルはどこへ? 139センチのこの子が飛び越えたと?

校門を閉じた風紀委員の人も啞然としてるよ。

「くっ……魔法なんてあるわけない! どこかにトリックがあるはずだ!」

「いきなり何を言い出すのよ……」

だっておかしいでしょ!

この謎を解かなくては、俺は、先に進むことなどできない……!

「義裕、私は誰？」

考え込んで動かない俺に、唐突な質問を浴びせてくる真桜。
質問の意図は分からないが、一応真面目に答えておく。

「倉里 真桜」

そう、倉里 真桜。俺の幼馴染。

不良を叩き潰したり、暴走族を壊滅させたり、野犬の群れに突っ込んで行って勝利したり、喧嘩両成敗と言って銀行強盗と警官隊を両方とも全滅させたりするような少女。

付いたあだ名は“魔王陛下”。

……………。

「納得した？」

「納得」

そうだよ。トリックも魔法もない、単純な力技。
今まで起きたことを振り返れば、たった2メートルの校門を飛び越えることなんてワケはない！

いや、本来納得しちやいけないんだろうけどさ。
納得しちゃうと何か色々ダメな気がするけどさ。

「さっさと行くわよ」

「あいあいさー」

でも納得しなきゃやってられないんだな、これが。

第2話：母と魔王と登校風景（後書き）

第2話をお送りしました！。

魔王陛下の身体能力はバケモノ級。常人では例にあった通り、相手にすらなりません。

まあ、彼女と対等に渡り合えるバケモノも何人かはいりますが…。

次話からは“愉快な仲間たち”の紹介話になります。

第3話：毒舌お嬢とゴミ人間

机の上に突っ伏す。

遅刻はしなかったが、朝のホームルームが終わっただけなのに既に体力ゲージは最低ライン。

例えるなら“しびれごな”をかけられた後、“みねうち”を喰らいまくったような感じだ。分からない人がいたら、ごめんな。

「義裕。いい加減、蘇りなさい」

前の席から真桜が話しかけてくるけど、無理です。世界樹の葉が必要なのです。不死鳥の尾でも可。

そんな感じでしたら早く死んでいると、

「あらあら、こんな所にゴミがありますわ」

唐突に、そんな声が降ってきた。

「あら。おはよう、一姫^{いちひめ}。今日は遅かったのね」

「ごきげんよう、真桜。ええ、少し野暮用がありまして……。ところで、このゴミは何ですか？」

「まあ色々あって、資源ごみ……いえ、産業廃棄物と化したのよ」

ゴミ扱いされているが、今の俺には怒鳴る気力もない。

ふははははは、リアクションを期待してる奴らにはキツだろう。

「ま、蘇生の呪文は用意してるけど」

「あら、どんな言葉ですの？」

ザオ○ルか？　ザ○リクか？　それともリバ○ブ？　またはリ○ム？　レ○ズ？

何にしても、この俺を蘇らせるには並大抵の呪文では――

「――お前の財布は預かった」

「まてえええええい！」

財布だと！　俺の、全財産を、お前は、奪ったと言うかつ！

バッ、つと首を上げ、視線を動かす。すると真桜の手の中に俺の
がま口財布が！

「かえせええええええつ！」

俺の全財産、4452円をおおおお！

怨嗟の声を上げながら伸ばす手が今、がま口に届き――

「いきなり女性に襲い掛かるとは何事ですか、この不埒者！」

「ぶっ!？」

顔を思いつきり何かで叩かれた。

「女性は慈しむものです。襲い掛かるなど言語道断ですわ」

真桜じゃない。攻撃してきたのは、その傍らのもう一人の小さいの。

その右手には扇子が握られていた。凶器はあれか！

「襲い掛かってねえ！ 盗人から財布を取り戻そうとただただ！」

「財布はちゃんと戻ってきますわ。ですけど、貴方の手で穢されたものは――二度と戻ってきませんの」

「俺はどんだけの汚染物質なんじゃあ！」

酷い。酷すぎるよ、俺の扱い……。

顔をうつむかせてダウンモード。効果音をつけるなら『ずーん』。

カラー漫画なら背景は青と黒で、辺りには人魂が飛んでいるだろう。

「落ち込まないでよ。ほら、財布返すから」

「おおっ、真桜……ありがとう。返ってくるんだね、4452円」

落ち込む俺を見かねたのか、真桜が嬉しいことを言ってくれる。真桜が優しいなんてウソみたいだよ。

喜び勇んではま口を受け取り――

「……中身がないっ!」

うん、やっぱり。真桜が優しいとか、ウソでした。

「俺の二千円札1枚と千円札1枚と五百円玉1枚と百円玉5枚と五十円玉1枚と十円玉22枚と五円玉2枚と、一円玉12枚は何処じやあああああっ!」

「細かいわね」

「まるで貧乏人ですわよ?」

俺は貧乏人だよ! 悪いか、ボケェ!

「でも今言った金額合計すると4292円になるんだけど」

「素で間違えましたわね」

俺は算数苦手だよ! 悪いか、バカァ! 俺の大バカァ!

すったもんだの末、中身を返してもらいました。

ヤッター! ……いや、本来当たり前なんだけどさ。

「さて——ゴミ人間ヨシヒロ、ごきげんよう」

「何でそんな毒満載なの!？」

どこぞの妖○人間みたいなフリーズはないでしょ！
てか、ゴミ人間ってけっこう傷つくよ。

「一姫が毒舌なのはいつものことでしょ？」

「ええまったく、その通りですわ」

「……………」

先程から毒満載で馬鹿丁寧な喋り方をする女子、名を夜帳よとばり 一姫いちひめ と言う。

真桜の親友とも言える貴重な人物で、けっこうなレベルの金持ち、つまりリッチ、あるいはブルジョワ、またの名をセレブ。

切り揃えられたセミロングの黒髪が美しい和風お嬢様だ。

まあ、さすがは真桜の親友というか、欠点は真桜と同じく性格と身長（141センチ）である。

逆を言えば、それくらいしか欠点という欠点がない。基本的に品行方正、才色兼備と言える（いや“色”は微妙か。美少女ではあるが）ので教職員だけでなく、他の生徒からの受けも良い。

むしろ欠点を逆に利用して、親しみやすさを出している感がある。

まあ、いぢめられる方からしてみるとイヤなだけなんだが……。

「……慣れって怖いね」

幼い頃から真桜にいぢめられ続けた俺は、そんじょそこらの精神攻撃は効かないのだ。

とは言っても、一姫の毒は『そんじよそこら』レベルを軽く超えるけど。

「何か言ったかしら？」

「いや、何も」

真桜の問い掛けを適当にはぐらかす。

馬鹿正直に答えたりしたら多分、目の前の二人が同時攻撃してくる。

そんなことになったら考えるまでもなく、普通に死ぬる。

「と、ところで野暮用って何だったんだ？」

追求されても困るので、強引に話を変える。

話を振られた一姫は嫌そうな顔をして、しかし何故だか口元は笑いながら、

「乙女の会話を盗み聞きとは、とんだ変態ですよ」

「なあ！？」

何故そうなる！ 盗み聞き、って俺の真ん前で会話してたでしょ、お前ら！ 周りの人みんな聞いとるわ！

「俺いたから！ フツーにここにいたから！」

「何をおっしゃっていますの？ わたくしが真桜と話しているとき、貴方は影も形もありませんでしたわ。……似たような形のゴミは落ちてましたが」

くっ、そう来たか……。あくまでゴミはゴミ、ゴミ人間はゴミ人間と分類する訳か！

っーか、そろそろ人間として認めてほしい。

しかし、これと言いつ出した一姫を論破するのは不可能だ。ぶっちゃけ俺の頭脳じゃ一姫の頭脳に叶わない。そう、それは例えるならチンパンジーと物理学者が早押しクイズをやるような物だ。

非常に不安だが、ここはマイ幼馴染・真桜にヘルプを求めよう。真桜ならば、俺がゴミであり、ゴミ人間であり、さらに人間であることを必ずや証明してくれるだろう。

……何故だろう、我ながらとつても不毛なことをしてる気がする。

まあいい。そうと決まればさっそく真桜にアイコンタクト。

へ・る・ぷ・み・い！

「……………」

真桜は理解したのか、コクリと頷いてくれた。さすがは幼馴染。よっし、これで人間になれる。

「一姫」

「なんですの？」

「この義裕はさっきのゴミなの。つまり——義裕はゴミだったのよ」

「それちよつと違あああう！」

真桜さん真桜さん、証明の仕方が間違ってる……ってか、証明するものが間違ってるよ！

ゴミと思ってた物が義裕という人間であったことを証明してくれればいいのに、何で義裕という人間がゴミであることを宣言してくれますか！

「なるほど……ゴミ人間だと思ってましたがゴミでしたか。それならば、わたくしたちの会話を聞いていても不思議ではありませんわね」

「お願い！　納得しないで！」

何か普通に納得しちゃってるよ一姫さん。反論してよ一姫さん。

「あんたは一体どうしたいのよ……」

真桜が呆れ顔で訊いてくる。

くっ、そもそもお前がアイコンタクトを正確に受け取ってくれればこんなことには……！

俺は、おれは――

「人間になりたいんだああああああっ！！！！」

「見苦しいからもう一度死んできなさい」

次の瞬間、頭頂部に衝撃。次いで視界がブラックアウト。痛みを感じるまでもなく、そして意識がフェードアウト。

意識が途切れる寸前、「あらあら、無様ですわね」という声が聞こえたような気がした。南無三！

第3話：毒舌お嬢とゴミ人間（後書き）

そんな訳で毒舌お嬢様、一姫登場の巻。

義裕は周りからイジめられたりイジられますが、別に嫌われている訳ではありません。

むしろある種の好意を持たれているからこそイジめられたりする訳です。

……かと言って義裕が誰かに恋愛フラグを立てられるかと言えば×。

この物語は学園コメディであって学園ラブコメではないからです（笑

ラブコメシチュエーションなのにどこまでもコメディ……。さしず

め“ラブのないラブコメ”ですね。

主人公にとっては生殺し状態でしょうが。

第4話：学食にて後輩と戦う

目が覚めて時計を見たら、長針は大して変わっていないが短針が異様に進んでいた。

ここから一つの真実が導かれる——すなわち！

「もう昼休みかよっ！」

残っている記憶はホームルームが終わってから一限目が始まるまでの休み時間まで。

最後に残された記憶から推測するに、この惨劇を生み出した真犯人は——

「——お前だあ、倉里 真桜！」

ビシィッ！ と指を突きつけ、悪の魔王を糾弾する……って、あれ？

「何故いない！？」

真桜さんいません。すっげえムダなパワーを使っちゃいました。ううう、つかエネルギーが足りない。気絶……もとい、寝ていただけなのに何故腹は減るのだろう？

三大欲求、恐るべし！

って俺、朝食べてないじゃん！ 腹が減んの当たり前じゃん！

——ドガゴシャツ!!!!

『……………』

『所詮は義裕ね。インドガビアルの方がまだ強かったわ』

——妄想終了——

たとえ妄想の中でも、俺が真桜に勝つ事はないようだ。

真桜がインドガビアル（ワニ）と戦って勝てるかは不明……いや、確実に勝つな、ヤツは。

「さっさとメシ喰いに行こ……」

く、くきゅるる……（腹の音）

一人寂しく学食に向かう俺に、答えてくれたのは腹の音だけだった。

宮水沢学園学生食堂——そこは数多の激戦を生き抜いた歴戦の戦

士達が集う憩いの場である。

そう。歴戦の戦士達が集ってしまうのである。故に学生食堂は――

「ついには戦場になってしまったのだった……」

そして俺は、戦うことすらできなかった哀☆戦士。

……ぶっちゃけ、食券が買えませんでした。

戦場なんだよ！ 開戦の狼煙が上がる頃、俺は遙かなるドリームワールドにいたんだよ！

「どうするよオレ！」

ライフカードがあればいいんだが、あいにくそんな便利アイテムは持ち合わせていない。

ところで『あいにく』って漢字にすると『生憎』ってなって『地球上の生物が全て憎い！』って言うてる気分になるよね。

「いやー、それはないですよ」

「あ、やっぱ？ 俺もそうじゃないかと思った」

「あはははは、自分でもそう思ってたらお仕舞いですって」

「だよなー。あははははっ」

って。

「誰っ!？」

「どもっ、学食の精霊です」

「が、学食の精霊！？——とでも言うと思ったか、ゴラァ！」

俺はそんな子供騙しに引かかるようなバカではない。見覚えがあるぞ、キサマの正体は——

「えー……っ……」

正体は……

「どうやら人の名前を忘れるようなバカですね」

「うるせえっ！ バカって言った方がバカなんだよ！ バーカ！」

「……………」

「『お前は小学生かよ』って目を向けんなあああああっ！」

思い出せ、俺！ 目の前の女子を舐めるように見ろ！

腰ほどまであるロングの黒髪。頭には藍色のリボン。身長は150後半。制服のタイの色から考えて1年生。顔立ちは○。スリーサイズは上からな——

「ながっ！？」

手刀がキレイに喉仏に叩き込まれ！ み、見事……！

「失礼。何やらイヤらしい目付きだったので」

「ぐううう……」

ダメだ……反論できん。事実だし。

「で、思い出せたですか？」

「フッ、あまり俺を舐めるなよ」

さっきの一撃。あれは確かに見事な殺人技だったが、それ故に、他の何よりも雄弁にお前の名を語っている！

「お前の名前はズヴァリ！ 『春野^{はるの} 渚^{なぎさ}』 だああああ！」

「違いますよ」

「……………ガーン！」

「なんで反応遅いんですか」

いや、絶対あつてると思ったんだけどなー？ じゃあ、コイツは誰？ そして春野 渚は誰？

————『クックククッ、人の名前を勝手に使うとは……。さすがは魔王陛下の下僕……。命知らずデス』

……なんだ、今の電波は。

「どうしたですか？ 顔青いですよ」

「いや、空腹で……で結局誰だっけ、学食の精霊」

コイツの名前が出てこない。俺はいつの間に健忘症に！？

「気絶回数が多いから、記憶が不安定なのですね」

……いかに普段から殴られまくっているかが分かるな。

「わたしは生徒会会計副長、高瀬^{たかせ} 風月^{ふうつき}です。思い出せますか？」

おおー！ 思い出しましたよ！ 我らが生徒会の後輩じゃん！
……素直に覚えてなかったとは言えんな。なんつーか、先輩の威厳ゼロだし。ここは——誤魔化す！

「ハハハ、ナニ言ってるんだ。覚えていたにキマってるじゃないか」

「まったく。週に何度も顔を合わせているですけどねー？」

「ダカラ、覚えているヨ？」

カタコトなのは昔からサ。ドコも怪しいトコないアルネ。

「ここに買ったはいいけど使わなかった食券が」

「忘れててスマン！ 二度と忘れないからそれをくれ、むしろ寄越せ！」

食事！ 食事！ 俺の腹も限界だってばよ！

「明らかに人にモノを頼む態度ではないですが、ま、いいです。あげますよ」

「Y A H H O O O O O H！ 風月様サイコー！ 風月様バンザーイ！」

「ロハじゃないですよ？ 払うもんは払ってもらうです」

ハッハッハッ、そんな物は大事の前の小事。俺の4452円……
もとい4292円は惜しみなく投入されるぜ！

「いくらだ？」

「1点で計1050円になります」

「高え！」

ここ学食だよ？ 1点で4ケタになるって何の食券さ？

「メニューはなんなんだ？」

「『限定3食！ 超豪華絢爛金箔入り冷し中華』です」

冷し中華！？ 今、冬だよ！ 1月だよ！？ 季節感まるで無視だよ！

さらに言うが『超豪華絢爛』って何だ！ 『超豪華』あるいは『豪華絢爛』だろ！ 合わせんな！

「そんなもん誰が頼むんじゃあつ！ ……ってここにいたか」

高瀬 風月い！ この物好きさんめ！ 説教しちやる！

「いいか！ 冬場に冷し中華を頼むような人間は、秋に花見しようと酒瓶抱えてうろついているダメ人間みたいなもんだ！ だいたいね、冷し中華って言うのは」

「それ、真桜先輩も食べてたですよ？」

「実は中国で作られたんじゃなく、日本で開発されたものなんだな。詰まるところ、日本人の和心あふれるスペシャルフードな訳だ。皆もたくさん食べるんだぞ？」

「みんなって、わたし一人しかいないですけど」

いいんだよ！ 空気読め、空気を！

で、結局高い金を払って黄金に輝く冷し中華を食べた訳だが、一言だけ言おう！

耳の穴かっぱじって聞きやがれ学食関係者ッ！

「夏にやれ、夏にいいいい——っ!!!!」

第4話：学食にて後輩と戦う（後書き）

いままで明記してなかったけど、物語中は1月なんです。季節感まるで無視です、この作品。

しかし、一日一話投稿は中々しんどい……。大学も始まるし、早くも失速するかも。

第5話：放課になりて生徒会

「それじゃ、生徒会活動を始めるわ」

放課後。一般生徒が青春の汗を流し切磋琢磨してる中、生徒会役員は室内にこもって会議です。

まったく、とんだ引きこもり共め。

——ガン！

あつれえ？ 何の音かな？

探してみるまでもなく、机においた俺の右手の薬指と小指の間にシャーペンが突き立っております。ハイ。

「義裕、死後は慎みなさい」

我らが生徒会副会長、真桜がそんな御言葉をおっしゃいました。
え、ええーと『私語』だよな？ なんか『死後』って聞こえたよ
うな気がするけど『私語』だよな？

てか、俺なにも言っていないよ？

「小声でブツブツ言ってたわよ——『引きこもり共め』って」

「なっ!？」

なんと言ったことだ……。

つかワザワザ言わないで！ 周りの生徒会メンバーの視線が怖

いから！

「さて、話を戻すわよ」

本筋に戻ってくれた。……よかったような、完全に安心できないような。

今ここ、生徒会室にいる生徒は6人。

「サッカー部からゴールの老朽化による買い換えが申請されているわ」

いわずと知られた武闘派副会長にして魔王陛下。倉里 真桜。

「またですか？ ほんの数週間にも申請されませんでした？」

書記長にして舌戦なら最凶な毒舌お嬢様。夜帳 一姫。

「予算内なら問題ないはずです。高瀬さん、どうなってる？」

一年の副会長にしてメガネが似合うクールガイ。宮水沢 みやみさわ 紳。しん

「ん、んー……大丈夫です。ギリギリのギリギリですけど」

名前忘れてマジゴメンな会計副長の後輩。高瀬 風月。

「……却下した方がいい。球技大会後にボール補充申請を出してくる」

見た目はクールビューティ、中身はトリガーハッピーな元・副会

長。間宮^{まみや} 蜜柑先輩^{みかん}。

「義裕は何もないのかしら？」

「あると思うてか」

そしてこの俺、この場において穀潰しの副会長補佐にして、魔王陛下の押さえ役……という名の生贄。東雲 義裕。

この時間は以上6名の提供でお送りします。

「って、会長は？」

生徒会において唯一俺を労わってくれる女神はいずこ？

「病欠よ」

真桜が簡潔に答えてくれた。

ああ、そうだね。俺は午前中気絶してたから、誰が来て誰が休んでるか知らないんだよね。

「ついでに鏡華先輩はゲートボール部に行ってるわ」

……元・副会長は手伝ってくれているのに、元・会長は遊びに行

ってるのか。

「つーか今1月だよ？ センター試験まであとちょっと、『最後の追い込みだぜ！』って時期だね？ いくら進路は決定済みとはいえ、それでいいのか元・生徒会長……！」

「まあ、あの人はいても煩いだけではありませんの？」

確かにあの人がいれば、まとまる物もまとまらなくなるだろうけど……。

だからといってワザワザ口に出すのはどうかと思うぜい、一姫さんよ。

「それはともかく、今日はもう議題はないですか？」

かといって『ともかく』で片付けるのもどうかと思うんだ、後輩風月。

それに、もう議題とかないでしょ。一日に話し合う議題なんてたいた数ないよ。

「球技大会について体育委員会から問い合わせがきています」

あるのかよ！

「なに？ あれは先週、体育委員会に主催を任せて終わったでしょ？」

真桜が剣呑な瞳を発言者である紳に向ける。

八つ当たりはいけないでっせ。後輩が萎縮しちまうよ？

「予算が少ない、だそうです」

すげえ……。真桜の眼光に全く怯んでないよ、紳。さすが同じ副会長。

「……………」

……と思ったけど、いっぱいいっぱいみたいだ。メガネを押し上げる動作が震えてる。

まあ、それはともかく。

体育委員会が金欠ねえ……。どこの組織も金がないのは同じなんだなあ。

「自分で言いに来いと伝えなさい。以上、他に議題ある人いるかしら？」

三顧の礼じゃないんだから……。それに、そう言われて直接文句に来る奴なんて――

「言いに来てやったぜええ！」

「ホントに来やがった！ それに早いよ！」

名前を忘れたけどスゲーぜ体育委員長！ まさかいきなりやってくるとは……！

「お前ら生徒会にモノモース！」

なんか発音変だぞ、体育委員長。

——バトルスタート——

プレイヤーⅡまおうへいか…HP9999 MP9999

たいいくいいんちよが あらわれた

たいいくいいんちよ…HP700 MP5

たいいくいいんちよの こうげき

「予算いくらなんでも少なえだろ、オイ！ 500円って、小学校の遠足か！」

「うるさいわね……。耳元で怒鳴らないでくれる？」

まおうへいかに 0のダメージ

まおうへいかの こうげき

「じゃあ、体育委員会の残りの予算の2倍でどう？」

「に、2倍だと……？」

「2倍でダメなら10倍でもいいわよ」

「な……何考えてやがる」

たいいくいいんちよは　こんらんした
たいいくいいんちよは　こんらんしている
まおうへいかの　こうげき

「さあ、どうする？　500円？　残り予算の2倍？　それとも10倍？」

「うっ……じゅ、10倍！」

「風月。体育委員会の残り予算はいくら？」

「30円です」

「じゃあ球技大会の予算は300円で。頑張りなさい、体育委員会」

「なああああああああああ！？」

たいいくいいんちよに　500のダメージ
たいいくいいんちよの　こうげき

「ま、待て！　残り予算少なすぎねえ！？　もっとあるだろ！　なあ！？」

「ある？」

「ないです」

「なんでじゃああああああつ！」

しかし こうげきは はずれてしまった
まおうへいかの こうげき

「風月。説明してくれる？」

「んーと……ああ、これですね。プール清掃費。前年度と比べると異常に膨れ上がってるです」

「因果応報。プール清掃をサボった、あなた達の責任よ」

「ぬおおおおおおおっ!!!」

たいいくいいんちよに 700のダメージ
たいいくいいんちよを たおした

——バトルエンド——

ああ憐れなり、体育委員長。まるで普段の俺を見ているようだ。
……てか真桜のステータス、鬼だろ。HPもMPもカンストかよ。
この分じゃ攻撃力も防御力も限界値なんだろう。

「じゃ、300円で頑張って」

うわ、追い討ち。

「予算オーバーは自腹を切ってね」

……もうやめたげて！ 彼のライフはゼロだから！

「ずっと私のターン」

「いや、ホントに止めてやって！」

ネタ的にもアレだから！

そんな時、一姫が口を開いた。

「あら？ 義裕は体育委員会の肩を持つ気ですか？」

「待て一姫え！ そういうことを迂闊に口にするなっ！」

あせる俺。何故ならば、その言葉はこの場において核地雷級。

「裏切るのかしら……義裕？」

「はっ——！」

真横から感じる禍々しい気配……。こっ、これは……！

「知ってるかしら、義裕？ 生徒会、血の掟第7条——」

「ご、誤解なり真桜スケ……」

必死で答弁。俺はまた死にたくないっ！

と、その後ろから肩をポンと叩かれた。誰？

「オレ達、仲間だよな！」

「体育委員長おおおおおおつ——！」

右手は力強く俺の右肩に乗せられ、左手はガッツポーズ。そしてその左手が一瞬だけ天地を逆転、親指を地面に突きつける。

腹いせか!？ 予算が300円になった腹いせなのか!？ だとしたらこんなことは間違ってる!

「――裏切り者には、最高の死を」

魔王陛下は裏切りを許さないのだ！ 迂闊にそう取られるような言動をしちゃダメだぞ？

「死んで、たまるかあああああつ!!!」

体育委員長を真桜に向かって突き飛ばし、即座に生徒会室から脱出！

後ろは振り向かない。生き延びるためには何があっても振り向いてはいけない。

[illegible]

くつ……体育委員長……！

キミのことは嫌いではないが、キミがいけないのだよ。今の状況も含めて。

体育委員長の断末魔の叫びをBGMに超速ダッシュ！俺はヤツ

のようには死なない！

「逃げ切れるとも思ってるのかしら、私から」

無理かもしれない。誰がシュミレートしても俺は逃げ切れないと予測するだろう。だが――！

「俺はっ、逃げ切ってやる！」

振り向かずにただひたすら逃げろ！　それが勝利の鍵だ！

「走れ、俺！　逃げろ、俺！　負けるな、俺！　生きろ、俺！」

「処刑準備完了まで10秒あるわ。それまでに遠くまで逃げれるといいわね、義裕」

……やっぱ死ぬかもしれない。

第5話：放課になりて生徒会（後書き）

果たして義裕は逃げ切れるのか！？ 次回へ続く！

今回は生徒会の話ですね。新登場の紳と蜜柑の詳しい話や、名前だけ出てきた人たちの話はまた後々。

義裕の生徒会内のポジションは“生徒会副会長補佐”。主な仕事は『副会長に率先して殴られる』という、本人も自覚している通り“生贄”の役割。

何故そんな役職に就くことになったのかは、またいつか語られることもあるでしょう。

それが果たしていつになるかは分かりませんが……。

第6話：助けて、お兄さん！

シマウマかトムソングゼル。

言うなれば俺はそのどちらかである。対して真桜は、

チーターかライオン。

俺が動物奇○天外を見て手に入れた知識では、必ずしもシマウマたちがライオンたちに捕まる訳ではない……むしろ、逃げ切れる展開の方が多かった気がするが、

——ピンポン パンポン

『あー東雲さん、魔王陛下から伝達です。準備完了、今から行動を開始する。だそうです』

——ピンポン パンポン

ご苦労さま、放送委員。でも、ありがたいから。

あの番組だとシマウマが逃げ切る展開の方が多かった気がするが、あいにく俺の肉体スペックはシマウマ以下、ガゼル以下。そして真桜の肉体スペックはチーター以上、ライオン以上だ。

はい、絶望的です。

「しかし——負けんぞっ！」

ただいま廊下を爆走中。宮水沢学園高等部の西棟、ホームルームなどを行う通常教室が集まる棟だ。

放課後の通常教室に残る生徒はほとんどいない。大抵は部活の為にグラウンド、あるいは各部活の部室が集まる東棟に移動している。残っている生徒は相当の暇人、もしくは居残り授業組くらいか。

ちなみに生徒会室があるのは南棟。保健室や職員室なんかも南棟だ。

西棟最奥の階段を一気に下ればそこは昇降口。校外にさえ出られれば真桜も止まってくれるだろう。

真桜は学校内の出来事と学校外の出来事を分けて考えている。

校内で怒らせても校外では何も言わないし、逆に校外で怒らせても校内では普通だ。

それでいて校内の出来事を校外で謝ってもちゃんと聞いてくれる。逆もしかり。

まあ、怒らせた理由が全面的に俺の所為なら意味はないが、今回は一姫が余計な言葉を掛けたのが原因だ。ちゃんと説明すれば許してくれない訳はない、はず。

と言う訳でこの鬼ごっこは、俺が校外に出れば俺の勝ち。できなければ俺の負け（＝死）ということになる。

そんなことを考えながら廊下を中程まで進んだ時――

「はい、追い付いた」

「――ッ!？」

な、なんだと!?! いつの間に……足音一つしなかったぞ! それなのに、真横に!?!

「潰れなさい」

「ぬおあっ!」

ブンッ、とまるでバットでも振り回したかのような風切り音とともに、真桜の回し蹴りが顔面に繰り出される。とっさに前転回避! 避けきったぜ……!

「よく避けたわね。それだけは褒めてあげるわ」

「お褒めに預かり光荣です……」

が、現状は大ピンチ。動きが止まっている上、俺は今座っている。対して真桜は、

「でも、この程度なら……ここまでする必要はなかったかしら」

真桜の格好から察するに、本気の50%だ。

肩に背負った暗紫色の竹刀袋。履いているのは上履きではなく、金属色が物々しい安全靴。ブレザーの上に羽織った漆黒のロングコートがマントのように揺れている。

安全靴とロングコートは朝持ったジェラルミンケースの中身。さらに言えばロングコートは防弾防刃、さらに内部には金属板が入っているという特別仕様。

そんな超重量装備を纏って、足音一つ立てずに全速力の俺に軽々追い付く……。うわ、勝ち目ねえ。

本気の80%なら竹刀袋の中身を取り出してくるのだが、さすがにそこまではしないようだ。……シャレじゃないよ？

「それじゃあ懺悔は済んだかしら？」

「済んでないから見逃して！」

お願い！

「私が見逃すとても？」

「思ってな、うiiiiiii！」

高速の蹴り上げを頭を反らして回避。てか速！安全靴履いてるのに速！

「パ、パンツ見えんぞ！」

「短パン穿いてるから問題ない」

蹴られても役得なしかよっ！

「フッ——！」

「にゃにゅわっ!？」

そのまま連携で放たれた踵落としを横に転がって避ける。が——

「ぐぼっ!？」

廊下の壁に頭をぶつけて自爆。イテーよ、おい！

「どうやら年貢の納め時のようね」

うわーん、お百姓さんを苛めるなあ！

真桜の蹴りが俺の頭蓋骨を粉碎する為、放たれる。

ブンッ、という風切り音。魔王キックが無慈悲にも俺の頭蓋を破壊する――

「なにやってるの、二人とも？」

――寸前で止まった。

「う……」

「おうっ！」

こ、これは、最後の最後で大逆転？ 奇跡の助っ人参上ですか！？

「蒼兄い、たーすーけーてー！」

恥も外聞もなく泣き付きますよ、ええっ！

目の前にいる男子生徒、その名を倉里くらざと蒼樹あおき。

苗字から分かる通り真桜の兄であり、魔王陛下が唯一頭が上がない人物だ。

身長は俺よりも高く、多分174センチくらい。性格は温厚で、ルックスはかなりいい。が、勉強も運動も正に“平均”で特に突出している物もないので、モテモテという訳ではない。なぜか狭い範囲において異様にモテるが……。

俺達より1つ年上だが、高等部進学の前に1年間海外に行っていたので学年は一緒だ。俺は蒼兄という昔からの呼び方を変えてないが。

俺に泣き付かれて蒼兄は困惑顔になる。

「真桜？　また義裕をイジめたの？」

「ち、違っ……イジめてなんかない！」

蒼兄の声は柔らかい疑問の声だったが、真桜はとんでもなく慌てた顔で弁解している。ホント普段と違うな……。

真桜は蒼兄と話すときだけキャラが違う。

普段は冷静沈着クールな魔王陛下だが、蒼兄に対しては態度も喋り方も幼い子供みたいになる。

ぶっちゃけブラコンだが、それを言ったら俺も似たようなものなので言わない。

蒼兄は真桜の否定の声を聞き、思案顔で今度は俺を見てくる。

「じゃあ義裕。義裕はイジめられた？」

……ここで仮に『はい』と言ったら、あとで真桜の攻撃が容赦な

く入るだろう。そしてその時、蒼兄はいないので助けはない。

逆に『いいえ』と言ったあと、蒼兄に先程の状況を説明すれば真桜を説得してくれるかもしれない。そうすりゃ円満解決だ。

「いや、イジめられたんじゃないくて、ちょっと誤解があつて……」

「誤解？」

かくかくしかじかと状況を説明。そもそもの原因は一姫であると力説する。

蒼兄は、うーんと唸ったあと、真桜に向かって話し掛ける。

「真桜、今の聞いた？」

「う、うん」

「義裕はね、裏切ってなんかないんだって。ずーっと真桜の味方だつて」

蒼兄、なんか脚色してない？ つーか脚色しすぎじゃない？

「だから仲直りしよう。はい、握手」

そう言つて、俺と真桜の右手を繋がせて無理矢理握手させる。

仲直りの握手つて子供じゃないんだから……。

「これで仲直りだね」

だが、そう言つて笑顔を向けられると何も言えない。真桜も同じ

らしく、曖昧な笑みを返していた。

話が一段落して、真桜が話し掛ける。

「あの、お兄ちゃん。私たち今から帰るけど……一緒に帰る？」

「ん？ んー……」

む、蒼兄が悩んでいる。俺としては一緒に帰ってほしいのだが……。

「自分はちよつと用事があるから、遠慮するよ」

あらら、残念。

俺としては真桜と二人だけで帰るという、ある意味危険な行為は避けたいのだが、ワガママ言って迷惑を掛ける訳にもいかない。

荷物はご丁寧なことに真桜が生徒会室から持って来てくれていたので、すぐに下校できる。

……あの超重量装備に加え鞆まで抱えていたという事実には肝がさるに冷える。具体的に言えば15度くらい冷える。

あ、ついでに補足すると蒼兄は自分のことを『自分』と呼ぶ。ややこしいなあ。

「それじゃ二人とも、ケンカしないで帰るんだよ？」

「うん」

「じゃ、蒼兄も気をつけてー」

蒼兄が去って行くのを見送る。

ううむ、さすが蒼兄。歩き方もキレイだ。言うなればビューティフル。

「行くわよ」

廊下の先に蒼兄が消えると、真桜のキャラが元に戻る。

蒼兄がいなくなったからといって再処刑とは言わないようだ。よかったよかった。

ズンズン廊下を歩いていく真桜を、俺は無言で追いかけた。



——生徒会室。

「体育委員長、保健室に運んできましたよ」

「ご苦労」

「お疲れ様」

「ご苦労様です」

宮水沢 紳が生徒会室に戻ると三者三様の劳いの言葉が返ってきた。

紳はこの場の4人の中では最も役職が上の副会長だが、残りは全員女子であり体育委員長のような大柄の男を運ぶには不適當だった。よって唯一の男手である紳が氣絶した体育委員長の運搬を任されたのである。

もつともこの場に義裕がいれば、体育委員長の運搬は彼に一任されただろう。副会長補佐は別称『便利屋』である。（そして通称は『生贄』）

「……倉里先輩と東雲先輩は戻ってませんか」

紳が室内を見回しても両者の姿はない。

「後者に関しては『戻って来れない』のかもしれないわね」

その原因を作った一姫がしれつと言う。その顔は薄い微笑を浮かべていた。

「生きてるですかねー？」

「死んではない……だからといって『生きている』というのは早計」

何気なく放たれた風月の疑問に、蜜柑が微妙な返答をする。

「なるほど……植物状態を果たして『生きている』と言えるかどうか、そういう話ですわね」

「わたし、『生きている』に一票です」

「私も」

『女三人寄れば姦しい』と言うが実際にそうなのだな、と傍で聞いている紳は思う。

正直、唯一の男子である紳は肩身が狭い。

そんな時――

「こんにちは」

ガラガラとドアを開く音と共に、声。

「あ、蒼樹先輩！？ こんにちは！」

その声、その姿に紳は驚愕するも即座に挨拶を返す。

生徒会室に現れたのは役員ではない、かつての役員ですらない、部外者。だけどそれは対外的な話。

ここにいる生徒会メンバー全員、少なからず彼とは関係がある。

倉里 蒼樹。

現・副会長である倉里 真桜の兄であり、紳の尊敬する先輩であり、一姫の大切な幼馴染であり、風月の憧れのお兄さんであり、蜜柑の最高の仕事仲間。

元々は何らかの形で生徒会のポストに入るはずだったのに辞退した人。

唐突な蒼樹の登場に三人娘も口を閉じる。

「え、えーと今日はどうしたんですか？」

蒼樹は普段生徒会室に来ることはない。たとえ彼の妹である真桜が再三出頭を要請しても。

その彼がワザワザ生徒会室に顔を出しているのだ。何かあったには違いなかった。

「ん。大した事じゃないけどね」

そうは言うが、蒼樹がここにいる時点で既に大事である。

「姫ちゃん」

「は、はい!？」

呼ばれたのは夜帳 一姫。

蒼樹は幼い頃の愛称で一姫を呼ぶ。後にも先にも、一姫をそう呼ぶのは蒼樹だけだ。

返事をする一姫の声が裏返った。

「今そこで真桜と義裕に会ってきたんだけど」

「え、ええ……」

そこで蒼樹は少しムツとした顔をして、

「仲間を傷つけるようなことは言っちゃダメだよ」

「え、ええっと……」

「ん。姬ちゃんは毒舌だって言われるけど、ちゃんと相手を選んで話す内容を変えてるのは知ってるよ。問題は、その言葉を周りの人が聞いても大丈夫かってこと」

言葉は精神的な力。悪口は暴力。

言葉に向けられた当人は傷付かなくても、その言葉を聞いてしまった周りの人間に影響を与えることもある。

例えるならそう、本人達にとってはじゃれ合いにしか過ぎない頭を叩く動作が遠目には酷い暴力に見える、そのようなこと。

「真桜は裏切りとか誰かがいなくなるとか、そういうのを嫌うから……。気を付けてあげて」

「あ……はい！ 真桜はわたくしにとっても親友ですから、当然ですわ！」

「ん。やっぱり姬ちゃんはいいい子だね」

一姫が力強く答えると、蒼樹はそう笑った。

「さて、それじゃ自分は帰るよ」

話は済ませたので蒼樹が生徒会室から出ようとするのと、

「蒼先輩！ ちょ、ちよっと待ってです！」

「ん？」

声を上げたのは今まで黙っていた風月。

「え、えとー、そのお……お、お暇ならお茶でもどうでしょう？
わたしたち、今からお茶会しますが」

生徒会室の備品である電気ポットを抱えて言う。

「んー……」

蒼樹はたっぷり3秒ぐらい溜めてから言った。

「喜んで」

その言葉に風月は微笑み、他の生徒会メンバーはグツジョブ風月、
と心の中でガツポーズを決めるのだった。

第6話：助けて、お兄さん！（後書き）

第六話、なんとか投稿。

そんなわけで魔王陛下のお兄さん登場の巻。

蒼樹は典型的ラブコメ主人公の素質を備えている凄い人。彼を主人公にすればこの物語のジャンルが全く違ったものになってしまいます。

明日から大学が本格的に始まります。うう、あと一話くらい連続で投稿したい……。

第7話：歌姫から焼き芋買う

夕暮れ小道を真桜と下校。

朝はハイペースで駆け抜けたが、帰りは通常歩行。徒歩30分の旅である。

「♪」

真桜はどうやら上機嫌。お世辞なしにはウマイと言えない鼻歌歌っちゃってるよ。

後ろをトボトボ付いていく俺にはその表情は見えないけど、それなりにいい顔をしてるのだろう。間違っても俺を殺りに来るような怖い顔ではないはずだ。

「♪」

いやあ、平和だねえ。

この平和がいつまでも続けばいい。そう願わずにはいられません。

平和はこんなに尊いモノなのに、人はどうして過ちを繰り返すのか？ それは人がこの上なく――

『いいいいいいしやああああつきいもっ！ やつきいもおおおお
おおお！』

焼き芋好きだからだ！

「って違うわ！」

変なコト言わせんな！ このビューティフルヴォイス！

住宅街のど真ん中に止まっている焼き芋の屋台。

拡声器を使ってこちらに呼びかけてくる……否、怒鳴りかけてくる少女（頭に美がつく）

声は綺麗なのになんて迷惑な……。ハッ、まさかこれは俺に対する洗脳攻撃か！？

「くっ——来るなら来い、毒電波ッ！」

『焼きたてええ！ ほっかほかああああ！ おいしいいい！ やあつきいもだよおおおおおおお！』

無視かよ！ 反応しろよ！

てかスピーカー越しならそんなに大声出さんでもいいだろ。

騒音公害だぞ、引越しおばさんだぞ！ そーれ、ひーこっし！
ひーこっし！

『買わんかねえ？ 買わないのかねえ！ 真桜っちにヨシヒロおおお
おおおっ！』

「名指しすんなああ！」

「3つ下さい」

「真桜もフツーに受け答えしないで！」

大声で名前呼ばれてんだから少しは動揺しようよ。

『まいどありいいい、真桜っち!』

「名前を呼ぶならマイク切りなさい、九八^{このは}」

俺の願いが少しは届いたか、マイクに関してツツコミを入れながら真桜が焼き芋売りの名前を呼ぶ。

久遠^{くおん} 九八^{このは}。それがこの焼き芋売りの名前。

宮水沢学園高等部2年1組所属にして生徒会会計長……つまり、風月の上司だ。

“十七時の歌姫”の異名を持つほどのキレイな声なのだが、焼き芋の売り文句を述べていると途端に平民レベルな雰囲気。

歌姫呼ばわりはダテじゃなく、見た目は黒髪のポニーテールが映える凛とした美少女。

口を開けばマシンガントークだが、ある種のカリスマで学園のアイドル的存在と化している。

しかし、人間的にどうかという問題もある。それがマネージャンキー(命名、俺)。まあ、要するに『お金大好き!』な人だ。

九八曰く、『特に買いたい物がある訳じゃないけど、とりあえずお金が欲しくなるのさ』ということらしい。やっかいな……。

なので生徒会会計課の長であるにも関わらず活動をサボタージュし、こうしてバイトやら何やらをやりまくっている。まあ、みんな分かってるから気にしてないけど。

『おっけえっ! 了解了解りようかいなのさ!』

マイク切ってねえ……。

「おいおいっ、3つでヨロですかぁ？」

「ヨロよ」

日本語崩壊フィールドが辺りに展開されているようだ。何語しゃべってんだよ、お前ら！

きっとそのうち、俺の言葉もこいつらに侵食されるんだゼツ！

「オツケー！ 焼き芋3つ、出発シンコー！ 計681円になるのさっ！」

「待て待て待て！ 何だその半端な金額は！？」

どういう価格設定だ。

「小学校の算数もできないのかい、ヨシヒロ。1つ2227円だから決まってるのさ！」

「そうじゃねえ！ 何でそんな半端なんだよっ！？」

「あー、最近の原油高でさー」

イモ関係あんの！？

「せっかく軒並み価格上がってるんだし、ここは焼き芋もビミョーに上げよっかなーって」

「不当に上げんなアッ！」

詐欺だろ！ それサギだろっ！？

「……鷺^{サギ}は実はコウノトリの仲間なのよ」

そんなムダ知識はいらねえっ！

「ともかく、お会計いいかしら」

「はいはいっ、681円ちょうど！ お預かりいたします！」

そこは普通『お預かりいたします』だよね。

「焼き芋3つ、ドゾー！」

「ドモー」

「だから何語やねん！」

「んー……ドラヴィダ語……？」

何語だよ。適当に言うなよ……。

「ところで真桜、なんで3つなんだ？」

真桜の家、倉里家の住人は現在真桜と蒼兄しかいない。

真桜の父さんは単身赴任でニューヨークに行っている。母さんは日本にいるらしいけど、お仕事を頑張ってるそうなの。

そんな訳で3つという数字は妙なのだ。1つは真桜、もう1つは蒼兄。じゃあ残り1つは？

「決まってるでしょ。私、お兄ちゃん、それと――」

真桜が焼き芋の入った袋を俺に向ける。

えっ、俺にくれるの？ あの実桜が？ 毒でも入ってるんじゃない？

「紗百合さん」

「俺はっ!？」

毒入りと疑った俺が言えることじゃないが、母さんに渡すのに俺にはないのかっ!？ ないのかっ、真桜おっ!

「あははは、泣くな泣くな! むしろ啼くのさ!」

「お前は慰めたいのか、それとも煽りたいのか、どっちだ!」

この歌姫は計り知れん。

「まっ、ほらほら焼き芋でもドゾ」

そう言っ九八が焼き芋を差し出してくる。

むう……問題発言があったとはいえ、こうやってすぐにお詫びの品を差し出してくるとは、なんという優しさ。

「278円でーすっ！」

「金取んのかよっ！ てか値段上がってる！？」

さっき227円だったよな！？

「なに言ってるんさヨシヒロ、物価というものは刻々と移り変わっていくのさ」

「そういう問題か！？」

「そういう問題さ！」

「そういう問題よ」

真桜まで同意しないでくれ。俺が間違ってるみたいじゃないか……。

「この場において少数派のヨシヒロが間違いなのさ。民主主義的考
えで」

「そ、そんな馬鹿な……」

「あなたが馬鹿なのは今に始まったことじゃないわ」

そんなことはない。俺は馬鹿じゃない。ちょっと抜けてるお茶目
さんなだけよ？

「キモ……」

「ヨシヒロ、キモイのさ」

「うっせえ！ 黙れやあ！」

「つか思考を読むな！」

「値札ないのか？ どっかに貼ってあるだろ、普通」

正規の値段を探すべく、九八の焼き芋屋台を調べてみる。
おっ、俺らから見て真反対に札発見。なにになに……

「焼き芋1つ、時価」

「そだよー、時価なのさ」

「……………」

「こんな、こんなっ……」

「こんな使い古されたネタをつ！」

「喜んでくれてあたしも嬉しいのさ」

「喜んでねえええええ！」

「まあまあ、その大声に免じて1つ298円で売ってしんぜよー」

「高くなってるよ！」

結局、287円で焼き芋を買った。うまいなあ、焼き芋。

帰宅後、真桜からもらった焼き芋をほおぼる母さんに、九八とのやり取りを話すと、

「ヒロくんはダメだねー」

「何故にっ!？」

「物価は刻々と移り変わる。コレ常識よー?」

あんたも敵か、マイマザアアアア!

第7話：歌姫から焼き芋買う（後書き）

なんとか第7話を投稿。一日一話ペースは限界のようです……。

勤労アイドル、九八登場の巻。

“九八”と書いて“コノハ”です。自分で書いててスゲー名前です。生徒会をサボるダメな子ですが、キャラとしては使いやすいので結構出番があるかもしれません。

ついでに、今回でやっと一日が終わりました。長いなあ……。そのうちに一話で一日が過ぎていくようにして、現実の季節に追いつきたいです。

……それでも追いつけそうにないのが恐いですが。

第8話：遅刻厳禁風紀委員長

東雲 義裕です。朝です。遅刻寸前です。

「速い速い速い速い！」

「ダブリたいなら速度を落とすけど？」

「全速前進！」

「命令するな、死にたいか」

「そのままお願いする次第であります、真桜様！」

ダブリはイヤよ。こやつらを先輩呼ばわりするのは精神的にキツイ。ハードなのだよ。

現在の状況を説明しよう。

真桜、猛スピードで走っています。俺、真桜に引っ張られて宙を飛んでいます。

ええ、飛んでるんです。鯉のぼりの如く風にはためく俺の体。

真桜はいつもの学生鞆、ジェラルミンケース、竹刀袋の三種の神器を持っているのに軽々走る。さすが魔王陛下。とんでもスペースク。小さな体に無限のパワー！

「まあ、校門が閉まるのにギリギリで間に合うでしょうね」

「頼もしいお言葉です!」

ギリギリだろうとなんだろうと間に合えばいい。遅刻さえなければダブリンはない。

あれ、でも……

「なあ、校門閉まっても突破できるんじゃないのか?」

昨日のように俺を投げれば解決じゃね?

「無理よ、今日は陽介が当番だもの。撃墜されたいならそれでもいいけど?」

「断固拒否!」

陽介とは風紀委員会の中でも異常にテンションと能力が高い風紀委員長だ。

最強である魔王陛下をして強敵と言わしめる、とんでも戦闘力を誇っている。

もっとも本人の性格はだいぶブツ飛んでるので、風紀を守れているかというと微妙だ。

「校門、視認したわ」

「おいさ!」

ガクガク揺られながら腕時計を確認。現在時刻は8時37分。お、間に合った間に合っ――

「ん？ ……義裕、口閉じてなさい」

「はたわあぁっ!？」

投げられた!？ 投げられたようです！ 景色がクルクル回転するよ。

ガラガラと凄い勢いで閉まっていく校門をすり抜けて、一気に学園の敷地内へ。

「ぐふっ！」

慣性に従って地面を転がって、摩擦熱で顔が燃える！ 熱い！ あついよー！

転がって転がって校舎の壁にぶつかって停止。熱いし痛い……。

これは文句言ってもいいよな。いいよな！

「真桜っ、何すんじゃわあああああぁっ!？」

顔を上げた途端、視界を緑色の何かがふさぐ。

とっさに首を横に傾けると、それは俺の頭があった部分を通して校舎に突き立った。

ええ、突き刺さってます。

へタしたら死んでるぞ、これは！

俺を貫かんとした物体、それは――

「た、竹槍だと――!？」

緑が眩しい竹からそのまま作り出したと見られる、竹槍。
鋭い断面が刃となり、コンクリの壁でも易々貫く。……って、い
くらなんでも鋭すぎだろ！

「ちっ、躲したか」

竹槍をガン見する俺の耳に、忌々しげな低い声が届く。

「躲さなきゃ死どるわっ！ この腐れ風紀委員長が！」

校門前に立つ人影。それは件の風紀委員長、ひなもり雛森 ようすけ陽介。
右手に握ったもう一本の竹槍を構えて、堂々と仁王立ち。
身長190センチを超える長身だから、否応にも威圧感がある。

「悪いが義裕殿、校門は今さっき閉まる所だったのだ。非常識な手
段で飛び込んで来られては他の生徒に示しがつかん」

「示しをつける為なら殺人はいいのかっ！」

「そんな訳はなからう」

何を言っているんだ、という視線を向けてくる陽介。くっ、ムカ
ツク奴め。

「って、さっき『ちっ』って言ったのは何だったんだよ！」

「何を言う。そんなことは断じて言っておらん！」

言ってたんだよ、お前は！

「ふん、男ならば拳で語るがいい！」

「なら竹槍を捨てろよ……」

拳で語るとか言って武器持ってちゃ台無しだろ。

「愚問っ！ 竹槍はもはや俺の体の一部……切り離すことなどできぬ！」

「さっき投げたのは何だったんだよ！」

「マジ○ガーというロボがいてだな……」

「いいよっ！ 真面目に変な理論を展開しないでいいっ！」

何でこんなのが風紀委員長なんだ……。もっと他にいないのか。

「俺は風紀委員長、雛森 陽介！ いざ尋常に勝負！」

「いきなり話を戻すなっ！」

などと言ってる間に陽介は地面を蹴り、こっちに向かって竹槍を突き出してくる。尋常じゃない！

「貫け、俺の武○鍊金！」

「竹槍がかっ!？」

明らかに鍊金じゃねえ！

その強烈な一撃を流れるように回避……するなど俺にできるわけがない。

無様に地面を転がって避ける。ゴロゴロ、ゴロゴロ。

武器持つて相手の攻撃を避けるには地面を転がるに限る。攻撃当たらないもの。

「突きいいいいっ！」

「ぐはあっ！」

くそっ、やられた！ コイツ『突き』って言いながら蹴り入れてきやがった！

さっきまでとは違い、俺の意思には関係なく転がっていく。ゴロゴロ、ゴロゴロ。

「往生せいやああああああああっ！」

陽介が投擲体勢に入る。

おい、体の一部で切り離せないんじゃないのか！

「ロケットオー——バンブウウスピアアアアアッ！」

「技名あるのかよっ！？」

しかもダサイ。とんでもなくダサイ。

だが、威力は折り紙付き。校舎の壁を貫くぞ——って死ぬわっ！今の体勢じゃ回避もろくにできねえええええっ！

投げ放たれた竹槍ロケットバンブースピアが唸りを上げる。

それは寸分違わす俺の頭に迫り――

「いい加減にしなさい」

いつの間にか俺の前にいた真桜に掴まれて止まった。

いや、ホントいつの間に？ おまけに竹槍を横からじゃなく、真正面から掴んでるんだけど。

「くっ……魔王陛下。貴様、男と男の果し合いを邪魔するかっ！」

いつから果し合いになったんだ。一方的な殺しだっただろ。

「そういうのは時間があるときにやりなさい。チャイム鳴るわよ」

――キーンコーンカーンコーン

「し、しまったあああああ……!!」

俺と陽介の言葉がかぶる。

ヤバイヤバイヤバイヤバイ――ダブリンが見えてくるうううう！

「義裕殿、この勝負預けたっ！」

それだけ言って陽介は消えた。いや、単に高速で校舎内に入っただけだが。

「さて、さっさと行くわよ」

「無理じゃあ！ 俺には無理じゃあ！」

真桜や陽介みたいな超人能力は持ってません！

「2年6組の教室は……あれね。義裕、『信じる者は――』」

「――救われる』うううううう！？」

またかよ！ 飛んでるよ、俺！ 俺達の教室まで一直線に飛んでいくぜ！

窓は開いてる。ガラスは痛いからな、これで無傷で教室まで……

「ぬがああああっ！」

行けるかと思ったけど、教室内は机が並んでるんだよね。そこに高速で突っ込んでいく。あとは……分かるよな？

「痛い、痛いなあ……」

「ええ……そうでしょうね」

あれ？ 地に伏した俺の耳に、なにやら怒りを伴った声が聞こえるぞ？

「痛いでしょうね……。でも、わたくしはもっと、もっと痛かったですの」

「あー……一姫さん。落ち着いてくれませぬか？」

顔を上げると毒舌お嬢、一姫の満面の笑顔。しかし何故だかこめかみが引きつっておられます。

あれ？ 俺大ピンチ？

「天に代わって誅罰ですの」

うわー、まるでセーラー服の美少女戦士みたいなセリフだあ。

でも一姫、そのセリフと椅子を振り上げる動作はとても不釣合いな気がする「天誅！」

——目が覚めると俺は何故か廊下でバケツを持っていた。

第8話：遅刻厳禁風紀委員長（後書き）

大学が忙しいです。たぶん、うまくやれても週二回のペースが限界になる予感です。

そんな訳で第8話。第2話にも名前だけ出てきた暴走風紀委員長、陽介がメイン。

色々ぶっ飛んでますが、根はいい奴です。

なにより、魔王陛下と正面からやり合えるという超人的戦闘能力を誇っています。真桜がキレたりしたら義裕の助けになってくれる…かも。

次は新キャラ出さないで、昼時のお話になる予定。

第9話：戦え、第98別働隊！

ここは学園である。

「「「コーノーハーちゃああん！」」「」」

『イエーイ！ みんなっ、元気イ？』

「「「ウオオオオオオオオオオオ——！！！！」」「」」

ここは学園……だったよな？

始まりは偶然だった。

バケツを持って廊下に立つという、今ではドラ○もんでしか見かけない所業を経験し、空腹にあえぐ俺の前を歌姫、久遠 九八が偶然通りかかったのだ。

「おやおやつ？ ヨシヒロ、死にそうだねっ？」

「腹が減って死にそうなんだ、パトラッシュ……」

「とんでもなく意地汚いネロだね、キミは」

真桜に引っ張られて登校しなければならぬほど、今日は時間的余裕がなかったのだ。

朝食を取れたかどうかなど、推して知るべし！

「そんなキミにこれを進呈するのさ！」

「く、食い物か！？」

手に取った感触は、布地の感触。

「布……つまりクロス。クロスは十字架。なるほど、天国からの迎えが……」

「来ないよっ！ キミが行くのは地獄なのさ！」

地味に酷いね、九八さん。

それはともかく。これ、購買のエプロン……？

クリーム色のエプロンは購買で働く者の証。これを着れば即座にハラペコ生徒の救世主に変身だ。

「ま、よく言われるけど『働かざる者喰うべからず』さ」

「つまり購買で働けと？」

あの、餓鬼共が蠢き叫びを上げる地獄で？

「あはは、安心するのさ。キミが働くのは第98別働隊だから」

……なんだ、その胡散臭いのは。

——そして冒頭に戻る。

「おい九八、これ何だ？」

『今日はとってもビッグなゲストが来てるのさ』

うわ、思いっきりシカトされた。

現在の状況を説明しよう。

位置は学園の中央広場。

そのど真ん中に派手なステージを建てて、マイクを握るのは九八。惣菜パンが大量に入った台車を引っ張り、ステージ袖で見守る俺。そしてステージを取り囲む、むさい男衆……。

『ささっ、みんなで呼んでみるさっ！　せーのっ！』

「「「「ヨシヒロオオオオオオオッ！　ゴラァ！！！」」」」

「なんでそんなケンカ腰なんだ！？」

さすがアイドル、と九八を褒めるべきか。こいつら九八の親衛隊

なんだろうな……。

一応ステージに出て九八の横に並ぶ。

事前の打ち合わせ通り台車を引っ張ってステージに上がるけど、意味あるのかコレ？ どう考えてもアイドルのコンサート会場に惣菜パンは必要ないだろ。

「「「「「テメェ！ コノハちゃんから離れろやあつ！！！！」」」」」

『「こらー、みんな。せっかく来てくれたゲストにそんなこと言っちゃダメさ！」』

「「「「「ゴメンねー、コノハちゃん」」」」」

変わり身早っ！

しかし口ではゴメンと言っておきながら、俺に向けられる視線は非常に剣呑。デインジャー。

「なあ、これ購買の仕事か？」

『みんなっ、それじゃあ今日も行くのさっ！』

また無視かよ。今回無視されるの多くね？ ……いや、そうでもないか。

完全に俺を無視して、九八は高らかに声を上げる。

『――商品ナンバー001、ローリング焼きそばパン！ 初期価格

は300円から。スタート!』

なっ! こ、これはまさか……

「350円!」 「380円!」 「400円だ!」 「なんの! 430円!」 「500!」 「……!」 「……!」

『さあ、770円! 770円なのさ! もういない? よし、山本くん落札オメデトー!』

オークション!?

こっちに向かって手招きしたので、台車を引いて九八の方に近づく。

九八はズボツと惣菜パンの山に手を突っ込み、目的の品を迷うことなく取り出す。

『山本くん、パース!』

ローリング焼きそばパンが勢いよく群集に投げ込まれる。それを受け取った男子生徒（山本くん）が6枚の硬貨を投げ返す。凄まじい速度でステージに飛来して――

「ぐあっ! 山本っ、てめっ、何をする!」

俺の額に硬貨が着弾。普通に痛いぞ! あっ、コラ! 逃げんな山本!

『そんじゃ、次の商品に行ってみるさ!』

「「「「オオオオオオオッ!!!!」」」」

「だから無視すんなテメーらっ!」

しばらくして俺は意を決して九八に話しかけた。さすがに何度も何度も無視されるのはキツイが、4度目の正直ってことで。

「なあ、これオークションか？」

「ん？ そうなのさ。吊り上がった値段があたしの取り分になるのさっ」

そりゃスゲー商売だ。アイドルとしての知名度やらなんやらをフルに使ってやがる。ぼったくりなような気もするが。

「スゲーなアイドル」

「んにゃ、これに参加するのはあたしのファンだけじゃないのさ」

「そりゃウソだろ……」

「ホントさ。そろそろ証拠が見えるさ」

意味深なことを言いながら、九八が再びマイクを握る。

『ささっ、商品ナンバー032、キイチゴパフェロール！ 初期価格は450円から。スタート！』

「460円！」 「480円！」 「510円！」 「ええいつ、580円！」 「……！」 「……！」

『さあ、970円！ 970円だよ！ もういない？ それじゃ——』

「1200円よ」

どっかで聞いたような声が。

ステージを取り囲んでいたざわめきが静まる。
群衆の最外辺にある、ちまっこい人影。それは——

「ま、真桜っ！？」

いつもと変わらぬ雰囲気纏って、魔王陛下がそこにいた。

『おおっとおっ！？ 1200円！ 1200円が出たのさ！ これ以上は出す猛者は——』

「1300円だ！」

真桜とは正反対の位置で、竹槍を構えて周囲を威圧するヤツが言う。

「よ、陽介まで……」

こいつらはいつの間に九八のファンに？

「ご覧の通りさ。このオークションにはレアモノのパンが多数エントリーされてる。つまり、美味珍味を求める者はおのずとここに集うのさ」

九八が司会を一瞬やめて、小声で俺に告げてくれた。

ああ、そうなのね。真桜や陽介が九八のファンっていうのは違和感バリバリだもんね。

それにしてもレアモノのパン、ねえ……。まあ、たしかにキイチゴパフェロールなんて普段見ないけど。

つか、真桜も陽介も何でそんな変なパンを買い求めるんだ……。

そんなことを考えていたら、群集を二分する形で立っていた真桜と陽介が互いにけん制を始めていた。

「魔王陛下……悪いがあのパンは俺が頂く！」

「あら、日本男児の鑑であるはずの陽介が甘いものとは地に堕ちた

わね。素直に私に寄越せ」

命令だ!?

「ふん。俺が食べるのではない。榛^{はるな}那様が甘味をご所望なのだ!」

「じゃあアンパンでも買えば?」

もつともだ。

それにしても、榛那来てるのか。今日は廊下に立ってるだけだったから、誰が来て誰が休んでるか知らないんだよな。

……あれ? 何故だかデジャブが。

「お渡しするからには最上級のモノを! コレ、常識!」

コイツに常識を語られたくない。竹槍振り回すダメ風紀委員長のくせに。

「なら私から奪ってみなさい。九八、1500円」

『あいさー! さて、いないかな? 1500円だよ?』

「ええいつ、1800円!」

陽介がすかさず言い値を吊り上げる。

「2000円」

「2400円だ!」

「2700円」

「3000円!」

どんどんヒートアップしていく両者。

元値が450円だから現状で売れても……6〜7倍はあるな。と
んでもねえ価格だ。

「3700円」「4700円!」「5200円」「まだまだ、60
00円!」「9000円」

おいおい……。

「負けるかあああっ! 10000円ッ!!!」

『つ、ついにキタ————! 夢の5ケタ! 真桜っち、まだ行
く!?!』

「行くわけないでしょ」

うわっ、一刀両断。スッパリ断った。

「じゃあ陽介。言ったからにはちゃんと買うのよ?」

「ぬ……」

それだけ言って真桜は背を向けて去っていく。

『ほいほいつ、ヨースケ! 払うもん払うさ!』

「ぬぬ……」

陽介、冷や汗かいてます。

まあ、惣菜パン1つに10000円出すなんて言っちゃったもん
な。そりゃイヤな汗もかく。

『あれ？ 買わないのさ？ あんなに意地張ったのに？ 情けない
のさ……それでも日本男児？』

「……会計だ。九八殿」

的確に陽介を攻撃する言葉を使い、金を出させる九八。

陽介は念願のパンを受け取ったけど、あまり嬉しそうじゃない。
もしかしたら真桜はこうする為に陽介と張り合っていたのかもしれない。
怖いぞ、魔王陛下。

「やっと終わった……」

空腹のまま働きづめだった俺はもはや限界。ぶっ倒れる。

「ヨシヒロー、給料なのさ。いらない？」

「全力で受け取る！」

労働に見合った対価を受け取るのは当然ナリ！

「頑張ってくれたから給料は10000円さ」

「なんとっ!？」

そ、そんなもらえんの？

スゲー、10000円だよ10000円！ テン・サウザンド・
イエーン！ Y a h o o o o o o h !

「はいさ」

そうやって手渡されたのは、惣菜パン。

「本日最高値を記録したキイチゴパフェロールさ」

「……………」

いや、うん。食べ物もらえたのは嬉しいよ。嬉しいけどさ。
でもそれ以上に空しい……。

「この気持ちはなんーだろー……」

思わず中学の時に歌った合唱曲を口ずさむ。

「ヨシヒロ、歌ヘタだね」

「うるせえっ！ 10000円の現物支給って、そりゃねえだろ！」

現金が、リアルマニイが欲しいのだよ！

「現金くれえええええ！」

「全ての現金はあたしのモノさ」

この強欲王め！
うわああああん！

涙ながらに食べたキイチゴパフェロールは涙の味がした。

「無様ね」

「ワザワザ言いに戻ってくんなあ！」

これだから魔王陛下は――！

第9話：戦え、第98別働隊！（後書き）

大学は高校より宿題が多いです……（挨拶）。

第9話をお送りします。

メインは九八と書いてコノハさん。彼女の学園内のお仕事。

アイドルだけあって集客力はかなりのもの。レアモノ売りという話題性もあり、1日にしてとんでもない金額が動くとか。

まあ、その代わり月に1回しか開催されないのですが。

次は2月初旬のイベントへの布石の話を。

なるべく早くお送りできるよう頑張ります。

第10話..地獄の特訓・蹴球編

5時限目は体育だ。ジャージを着たならグラウンドにレッツゴー！
昼飯はアレだったのでテンションダウンしたが、体育は得意分野
！
どんどんテンション上がるぜえええええええつ！

今日の体育はサッカー！ チームワークが勝利のカギを握るぞ。

「行くぞっ、クラスメイツ！俺達の心を一つにするんだ！」

我ながらクサイ台詞だが、みんなの心を合わせれば、それ即ち最強……！

さあ、皆の衆、遠慮なく俺に心を合わせたまえ！

「そういえば義裕……お前コノハちゃんと仲良く喋ってたよな……」

おや？ クラスメイトAが何やら言い出しましたよ？

「何？　おい義裕、詳しく話を聞かせてもらおうか」

「お前程度が歌姫と話せると思うてんのか……？」

「憎い……」

「ああ、憎いな……」

サッカーはチームワークが勝利のカギを握る……。俺以外のチームワークは完璧だ。……俺に対する嫉妬と殺意で。

それにしてもアレだね。俺は生徒会とかで会う機会が多いから特に何か思ったりしないけど、九八の人気っぷりは凄いな。

うん、凄いぞ九八。さすがは“十七時の歌姫”。

だが俺が危険な目に遭う確率をぐぐーっと上げるのはどうかなと思うんだ。命の危険をヒシヒシ感じるぜ。

などと、存在しない相手に愚痴っていると、

「ほら早くしなさい、男子。体育の時間は有限よ」

「……何故ここにいる、真桜」

はい、俺の目の前に何故かいるジャージ姿の真桜。体育は男女別だから、コイツがここにいるのは明らかにおかしいのだが……。

男共のいぶかしむ視線を受けつつ、真桜が口を開く。

「球技大会。2年のクラス対抗競技がサッカーになったわ」

あの可哀想な体育委員長が決めたんだろう。

たしかアイツは野球部。とんでもない職権乱用をして野球をするかと思えば、意外なほど普通の競技を選んできたな。

まあ、野球なんて時間が掛かりすぎて不可能だろうけど。

「で、それを言いに来ただけなのか？」

言いながらも、それはないだろうと思う。

通達するだけなら真桜が直々にやってくることはない。いつもなら適当にその辺にいる人間に言付けている。

それをしないということはつまり、何か目的があるに違いない。

そんな俺の考えは的中したようだ。真桜は言った。

「これからあなた達には地獄に行ってもらおうわ」

真顔で。

.....

「冗談よ」

いや、顔と声がマジだったんだけど……。

冗談でも怖いよ。ジョークにしてもブラックだよ！

ほら、見なよ！ 皆も固まっちゃってるよ！

真桜はそんな空気を気にせず続ける。

「本当の所は、あなた達に地獄を体験してもらおうわ」

[[[[[...]]]]]

「おおつ、今まさに皆の心が一つになった……！ だけど全然嬉しくないのは何故だろう？」

てか真桜さん、それも冗談だよね？ ジョークだよね？ さつきと意味変わらないもんね。

「さて、準備を始めましょう」

冗談だと言ってくれええええええええええ！

球技大会——それは体育祭を除けば唯一の運動能力戦争。

マラソン大会というのもあるが、人間と人間のぶつかり合い（物理的な意味で）が見られるのはその2つだけ。

そして球技大会にあって体育祭にない物、それが優勝商品である。これは毎年体育委員会が用意するのだが、記録に残っている限りどの年の商品も豪華だ。

たしか去年の優勝商品はポータブルDVDプレーヤー、それもクラス全員分。予算数千円でどうやって調達したのか謎だ……。

しかし今年の球技大会の為に体育委員会に渡された予算はわずか300円。これでは豪華な優勝商品は期待できない。

「だからさ……地獄の特訓なんてしてまで優勝狙わなくてもいいんじゃない？」

「甘いわね。たとえ見返りなどなくとも、勝利の為の努力を怠ってはいけないのよ」

……いい言葉なんだが、自分が実行するとなるとヤル気がなくなる。

おそらく他のクラスメイツも同意見だろう。なんたって俺達ゆとり世代！

「他のヤル気があるゆとり世代に謝れ」

「ごめんなさい」

真桜も同い年だもんね。同じゆとり世代だもんね。うん、ごめん。ソーリー。

「では……地獄の特訓を開始するわ」

“地獄の特訓”。それが真桜が言った『地獄を体験してもらう』の真意だ。

真桜は基本的に淡泊でクールだが、負けず嫌いでもある。そしてそれは時に自分のみならず、所属する団体に対しても適用される。……つまり今回は所属クラスである2年6組に適用された訳だ。

真桜曰く、女子サッカーは問題ないらしい。

……真桜は何も言わないが、それはチーム全体が強い訳じゃなくて、真桜の個人プレーで勝利できるという意味で問題がないのだろう。人類を超越している魔王陛下に対し、身体能力で互角に渡り合える女子はいない。

で、自分が出場できない男子サッカーを勝たせる為に、“地獄の特訓”を開催すると言い出したのだ。

他のヤツらは地獄は地獄でも所詮は“特訓”だと思って安心していろいろだが、俺は違う。

幼い頃から真桜に付き合わされて来た俺にとって、“地獄の特訓”という言葉は非常に重い。

ああ、小学校の頃はウサギ跳びしまくったなあ。中学の頃はコン

ダラ引きまくったなあ。高校になってからも色々やったなあ……。

そんな悲惨な過去の回想に合わせて、真桜が特訓メニューを発表する。

「とりあえずグラウンド10周」

おろろっ？ 意外と普通の特訓メニュー。てっきりグラウンド10周とか言ってくるもんだと思ってた。

「ただし5分以内に終わらせて」

あー、グラウンドは1周200メートル。つまり2キロを5分で走れ、と？ 100メートルあたり……えーと、15秒か。

つまり全力疾走を5分間継続できればノープロブレム！ ——つて常人にはキツイだろ！？

「ちなみに5分経ったら走り終わってなくても強制終了。走りきれなかった人には私のシュートを受け止めてもらおうわ」

真桜はそう言うと、近くに転がっていたサッカーボールを壁に向かって勢いよく蹴った。

——バン！

妙な音がしてボールがへろへろと宙を飛び、ぺちっという音を出して壁にぶつかる。そしてそのまま地面に落ちて動かなくなった。

「……………」

「どうやら力を入れすぎたみたいね」

結論…サッカーボールがパンクし、ボロクズになっていた。

「加減が難しいのよね。うまくやればネットを突き破る勢いで行けるけど」

「「「「……………」」」」」

グラウンド10周を死に物狂いで走る男子の姿がそこにあった。誰だって、そんなの喰らいたくないし……。

もちろん俺も全力疾走。たぶん100メートルを12秒で駆け抜けることができるだろう。人間、成せば成るのだ！

授業時間50分とは、こんなにも長いものだっただろうか……？
魔王陛下の“地獄の特訓”はグラウンド10周で終わるわけがなく、その後も常人にとっては辛く、できるようでないような特訓が続いた。詳しくは割愛する。むしろ忘れさせて！

その結果、普段から打たれ蹴られ殴られ叩かれたりしている俺はともかく、他のクラスメイトは死屍累々だ。

「神は死んだと、誰が言った……?」

「あはははははは！ あっはっはははははは！」

「いっそ殺してくれ……！ 頼む……」

「ああああ……ああああああああああ……」

「逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ」

「俺、この授業が終わったら、彼女とデートするんだ……」

「ここは俺に任せて先に行けっ！ すぐに追い付く！」

「魔王陛下と一緒に授業ができるか！ 俺は一人で練習する！」

カオスってる。カオスってるよ……！

みんな壊れちゃった。死屍累々っていうか、それ以上にもうダメだ！ 特に後ろ3人、無意味に死亡フラグ立てすぎだよ……。

「正氣に戻りなさい」

真桜の一撃でインド象を3匹殺せる殺人シュートが、さ迷う亡者たちの鳩尾に正確に叩き込まれる。
フリーダム

命中率抜群。どこまでも自由なボールコントロールだ。グ○など敵ではないのだ、○フなど！

しかしボールを受けた人間は正気に戻るといふより、瘴気に侵されたみたいだ。動いているけど目が死んでるもん。

だが、動いているだけマシとも言える。大半のヤツはピクリとも動かないからな。

「安心しなさい。地獄は次で最後よ」

ラスト宣言キタ————！！

まあ、時計を見れば残り時間5分程度だもんな。当然っちゃ当然か。

これが最後だという言葉に希望を見出したか、廃人同然の男衆の瞳に光が戻る。

「ルールは簡単。授業終了のチャイムがなるまでに私からボールを奪うだけ」

ボールを器用にリフティングしながら真桜が言う。

「メンバーは男子全員。誰か一人でもボールを奪えればそこで終了よ」

倒れていたヤツらもゾンビのように立ち上がる。……ぶっちゃけキモいな。

「それじゃ——開始！」

その号令を聞くや否や、俺は即座に真桜に特攻する。
真桜と俺達では身体能力——特にスタミナが違いすぎる。長期戦

になれば圧倒的に俺達が不利だ。

さらに、5分間とはいえ体力の消耗は既にかんりの物。狙うは短期決戦しかない！

「うりゃあああああ！」

真桜の左後方からのスライディング。俺を見てない真桜は多少なりとも隙を――

「甘い」

隙を見せてくれない。

俺の一撃をサイドステップで華麗に躲す真桜。ニュータイプばりのスゲー反応だ！

しかし甘いのはそっちだ！ その程度は『想定内です』。俺の一撃でケリがつくなど、端から思っていない！

「「ぬりゃあああああっ！」」

「ふん」

両サイドからスライディングするクラスメイトAとB。

そんな攻撃も真桜は軽やかに避けるが、俺達の攻撃はまだまだ終わらない！

「おりゃあああああっ！」

「キエエエエエエエエエ！」

「G R A A A A A———！！」

奇声を上げながらも次々に、入れ替わり立ち替わり、真桜を包囲するように続けられる連続攻撃。

この場に男子は21人いる。いつまでも逃げ切れると思うなよ！

「そう、俺達は1人じゃない！ 皆で戦ってるんだ！」

1人でやって勝てないなら、全員で挑めばいいのだ！ 村人たちが魔王を倒す！

「クサイわね」

律儀にツツコミを入れながらも、流れるような動作で攻撃を回避する真桜。

俺の記憶が確かなら、真桜がサッカーをしたことは学校の授業以外ではないはずだ。が、ぶっちゃけサッカー部並みに上手いドリブルに思える。

バット！ しかし、その健闘も終わりだ！ 俺達は確実にお前を追い詰めている……数の力を思い知れえええええっ！

「俺達の、勝ちだ——！！」

完全に真桜の動きを封じて行われるスライディングに、俺は勝利を確信してそう呟き、

「——数に頼るようではまだまだ二流よ」

スライディングが迫る最中、真桜がボールを蹴った。状況が状況ならキラーパスと呼ばれてもいいその一撃で、ボールがけっこうな

速さで転がっていく。その方向には男子もいなければ誰もいない。そもそも男子以外にグラウンドにいるのは真桜だけだ。真桜がパスを行っても受け取る人間はいない。

思わず俺はそのボールが転がっていくのを目で追い――

「……あれ？」

転がっていくボールを真桜が受け取るのを目撃した。――って、

「ま、真桜が2人!？」

双子？ 分身の術？ 質量のある残像？ 何にしてもズルい！

「……言っておくけど、双子でも分身の術でも質量のある残像でもないわよ」

うわっ、読まれてる……。

てか、改めて見回しても真桜は1人しかないし。

「双子がいなのは知っての通り。後ろの2つは使うまでもないし」

それは使えるということか？ いつの間にそんな芸当を……。

ともかく、真桜がどうしてボールを取ることできたのかは何となく分かる。

多分、“とんでもなく速く動いた”だけ。つまりボールが転がるスピードより速く移動したということだ。そうすれば自分で蹴ったボールを自分で取れる。

――ちょっと待てえい！

「勝てるかあああああああああああつ!!!」

魂の叫び。叫ぶよ！ 叫ぶしかないよ！

そんなトンデモ人間に勝てる訳ないだろうが！ プロサッカー選手でも勝てんわ！

「だったら試合で使える戦術を使いなさいよ。21人でよってたかって攻撃なんて、実際使えないわよ」

そうでもしなきゃ魔王陛下に勝てるか！

村人にすぎない俺達は集団戦法を取っても勝ち目が薄いんだ！
そうでもなきゃやってられっか！

「全く……何の為の村人から勇者になる特訓だったのよ？」

特訓の目的自体初耳だよ！ サッカーで勝つ為じゃなかったのかよ!？

——キーンコーンカーンコーン

「はい終わり。まだまだね」

「お前が人外技を使わなければ勝ててたわ！」

……いや、まあいい。地獄の特訓は終わったんだ。勝てなくても問題はない。

元々俺たちが頑張っていたのは地獄を乗り切るためだ。終わってしまった今、勝敗など関係ない。

見てみな……。他の連中も地面に倒れつつも安堵の笑みを浮かべ

俺たち村人の戦いは終わったんだ……！

「ああ、私に勝てるまで体育は毎回、地獄の特訓よ。先生にも許可をもらっているし」

村の平和は魔王陛下に破壊された。

「何やってんだティイイチャアアアアアアアアアアアアアアアア！」

俺の怨嗟の叫びはきつと体育教師まで届くはず。

他のヤツらは声を出す氣力すらなく、動かなくなった。

所詮この世は神も仏も天使もなく、勇者もいなければ戦士すらいない、魔王陛下の支配下さ……。

第10話：地獄の特訓・蹴球編（後書き）

という訳で第10話。サッカー大特訓の巻。

蹴球編と言いつつも、サッカーっぽいことはやっていないという話でした。

物語カレンダー2月上旬の行事は球技大会。第5話でも少しだけ出てきた話題ですね。2月上旬のイベントなので、代償として豆撒きイベントが消滅することになります。

本人も言っているように、義裕の運動能力は一般よりも高いです。真桜や陽介などの人外運動能力を持っている人間と一緒にいるので目立ちませんが、普通の人間に比べれば十二分に優秀でしょう。

球技大会編に入ったら、少しは主人公っぽく活躍させてやりたいものです。

第11話..養護教諭東雲紗百合

「ううう……お、俺は、もうダメだ……」

「しっかりしろ、クラスメイトA。お前はまだ五体満足だ」

こちら東雲義裕！ 地獄特訓により使い物にならなかったクラスメイトを保健室に移送中！ 応援求む！

……そんな訳で只今クラスメイトAを担いで移動中です。

俺はフラフラしてるが、比較的体が動くので運搬係。

フラフラしているとはいえ、俺はかなり無事な方。実際他の連中は露骨に死にかけている。

普段から真桜に蹴ったり殴ったりされる俺にとって、地獄の特訓はほんの少し厳しくなったシゴキにすぎない。自慢になってないけど……。

「失礼しまーす」

小声で断りながら保健室のドアを開け、

「あっ、ヒロくんだー」

「コイツお願いしまーす」

クラスメイトAを置いて、急速離脱！

「待ったー」

「ぬおおおうつ!?!」

何事!?! 突然世界が逆さまに! そうか、これは――遂に世界の終わりが始まったのか!

「また馬鹿みたいなこと、考えてるでしょー?」

間延びした声がなにやら失礼なことを言ってる気がしますが、気がするだけです。実際には何も聞こえてません。

はいはい、俺の耳には何の声も届きませんよ。母の声なんて当然のことながら聞こえません。

「お母さんを見捨てて帰ろうとするなんて……なんてイヤな息子なのー?」

「きこえないーい、きこえないー! 俺は何にも聞っこえないー!」

そう、今聞こえてるのは空耳。空耳ケ○キなんだ! 懐かしい……。

落ち着いてよく見ると、俺はロープによって片足を引っ張られ、宙吊り状態になっているようだ。何て古典的なトラップに引っかかってるんだ、俺……。

「ねーねーヒロくん。ヒマだからお話でもしないー?」

「先生! クラスメイトAをお願いします!」

「じゃあ、歌でも歌うねー」

無視された！？　てか、なんで歌？

「ペキン、ベルリン、ダブリン、ダブリだ♪　わたしの息子は留年寸前ー♪」

「歌うなああああああああああああつ！！！！」

「でも涙が出ない♪　だって諦めてるんだもん☆」

「ひどい！」

なんつーか、精神的に嫌な攻撃だよ！　ピンポイントに弱点を突いてきてるよ！？

「それじゃ、お話しでしょ？」

「イエス、マイマザー……」

毎度のことながら周囲の女性陣に対し拒否権を持てない俺、涙！

我が母、東雲^{しのめ}紗百合^{さゆり}は保健の先生である。

見た目は20代にしか見えず、さらにどこまでも優しく包容力もあるので生徒からの人気も高い。

が、俺は自慢できる母とは思っていない。その原因が母の趣味に

ある。

母の趣味……それは『トラップ製作』。

今俺が引つかかっている古典的なロープの罠から始まり、難度の低いものではバナナの皮や落とし穴、高いものでは対地雷やレーザーなど……古今東西、和洋折衷のトラップをこよなく愛しているからこそその所業の数々。

という訳で、東雲家はトラップ満載。

空き巣に入ったコソ泥が、トリモチトラップに引つかかって泣きながら助けを求めてきたこともあった。玄関先のレーザーに細切れにされなかっただけ運がいいと言える。

かく言う俺もトリモチに引つかかったことがある。その時はそのまま1日放置された……。真桜が発見してくれなかったら、十中八九ミイラになっていただろう。母さんは仕掛けはするが解除はしない。

ちなみに真桜はそんなトラップを全て力づくで突破できる。ロープは切断、トリモチは撃墜、バナナは素通り、地雷は地面ごと抉り飛ばす。レーザートラップですら発射口を破壊して回避する。……思えばアレが一番金かかっているトラップだった。

まあ、そんな訳で俺は母さんが苦手だ。

「で、話って何するの？」

クラスメイトAを保健室のベッドに寝かせてから、一応訊いておく。

余談だが1つのベッドに2、6男子が5人ほど、ひしめき合うようにギュウギュウ詰めになっている。見ていて美しくない光景だ。

「じゃー、真面目な話をしようか」

母さんが真面目な話をすることは、確率としては5%くらい。たいていの場合他愛ない話で終わる。

つまり、この前振りも意味なく終わるだろう。

「ヒロくん、ダブリそうだねー」

「それは肝に銘じているから言わなくてもいい！」

ホントに真面目な話をしてきた。最悪だ……。

「あと1回遅刻したら留年だったっけー？」

「……………」

俺はノーコメントを貫くぜ！

「ヒロくん？ 聞してるー？」

「……………」

ノーコメントを貫く！

「あ、ユーフォー」

引っかからんぞ！ 貫く！

「あ、真桜ちゃん」

なにいいいいいい！？　って引つかかるか！　貫け！

「聞いてよー、真桜ちゃん。ヒロくんったら無視するんだよー」

「とんだ親不孝者ですね」

「……………」

あれ？

首を真後ろに回すとそこに真桜がいた。ガーン……………！

「そして今まさに真桜ちゃんを無視しよう」と

「シテナイヨ」

「してたのね。声で分かるわ」

ハハハ、イヤダナー。ソナわけナイじゃないカ。

「…………用があっतんですけど、やっぱりいいです。失礼します」

「ばいばーい」

…………何しに来たんだろう。

「真桜ちゃんはやっぱり優しいねー」

どこが？

「ああ、ヒロくん。さっきの続きだけどー」

「……………」

まだ続くんかい！

「遅刻1回でダブるんだったら、授業を休んでもダブるんじゃない？」

……………。

「ほわたあああああ！」

「わー、まるで北斗の人みたい」

あたたたたたたたたたたたた！ ひでぶっ！
——
じゃない！

「マズイ！ こんな所でグズグズしているヒマはなかった！」

時計を見れば、6限目の授業開始まであと1分。

「真桜ちゃんはきつと呼びに来てくれたんだよー。いい子だねー」

そ、そうだったのか……！

くっ、こうしちゃおれん！
すぐに教室に戻らなければ！

「真桜ちゃんに謝るんだよー」

まあ、わざわざ呼びに来てくれたのに無視するようなことをしたからな。謝るのは当然。

了解だ、マイマザー。こうなったのは全面的にアンタのせいな気がしないでもないが――その依頼、たしかに受けたぜ……！

俺はフラフラの体にムチ打って、教室に向かった。

ちなみに。

「真桜おおお！　せっかく呼びに来てくれたのに無視してゴメンよおおおおっ！」

教室に授業開始前に戻り、保健室での出来事を真桜に謝ると、

「は？　別にあなたを呼びに行った訳じゃないけど」

……なんか冷たい返答が返ってきた。

「一姫が紙で指切ってね。絆創膏があれば貰おうかと思って立ち寄っただけよ」

母さん。真桜が優しいのは認めるが、俺に優しいわけじゃない。謝ったのを後悔したくなる瞬間だよ。

「……………」

ん？ 件の一姫が何やら俺のことを睨んできてる。

「えーと……………なに？」

「…………何でもありませんわ。貴方のカマドウマ並みの馬鹿さ加減に厭倦しているだけですの」

カマドウマ…………いや、俺、そこまで言われるような馬鹿なことしたっけ？ エンケンって、また難しい言葉を使ってまでして…………。

「理由が分からないから馬鹿なのですわ。まあ、貴方が馬鹿なのはいつものことですが」

ううう、ありがちなセリフだけど心が痛い。しかしいつまでも馬鹿扱いは嫌だな。

…………ここは他力本願で！ ビビビビッ、電波発信！

誰かぁ！ 電波なテレパスさんでもいい、俺に答えを教えてください！ 正解者には豪華粗品が贈呈されるぞ！ ……俺も正解は分からないから訊いてんだけど。

「……………」

…………当然のように誰も答えてくれないのね。

第11話：養護教諭東雲紗百合（後書き）

微妙に短い気がするけど、今までちよくちよく出てた東雲母、紗百合さんメインの話。

うーむ、後半微妙にシリアスってる。ホントに微妙にだけど。

義裕が馬鹿呼ばわりされてしまうのは、真桜の言葉を鵜呑みにしてしまう点にあります。

彼がそれに気付く頃には物語が終わりに向かっているでしょう。むしろ気付いたら終わりとも言える。

まあ、シリアスなのは今回くらいで、次回からはいつものようにコメディな日常が続きます。

次回は義裕に全面的に優しくしてくれる貴重な人が登場です。

第12話：女神の如き我が親友

放課後。5時限目の地獄特訓によるダメージ、いやダミツジ（ネイティブ的な発音）が色濃く残る中、真桜と共に生徒会室に向かう。保健室の出来事＋その後の教室での出来事が、俺の精神にも深いダミツジを残してる……。

だからフラフラ歩きもしようがないのだ。

「フラフラしないでしっかり歩きなさい」

隣りを歩く真桜から厳しいコメント。

でも真桜さん、6組男子は放課後になったのに大半は保健室のベツドの上だよ？ それを考慮したら俺のフラフラ歩きは勲章ものだと思う。具体的に言えば二階級特進。

「というわけで、二階級特進をお願いします」

「殉職したみたいね」

……そうか、俺はもう死んでいたのか。

「もはやこの世に未練はない。さらばだ、真桜……強く生きろ！」

「煩惱まみれの義裕に未練がない訳ない」

「シット！」

仮に俺が幽霊になっても、感動のラストシーンはなさそうだ。成仏できねえ……。

「馬鹿なこと言っでないで、行くわよ」

「へいへーい」

ズンズン進む真桜にフラフラと付いて行く。真桜は歩幅が狭いから、フラフラ歩きでも置いて行かれることはない。それを指摘したら殺されるだろうがな。

生徒会室の真ん前に異常なまでの人ごみができていた。

普段この辺は鍵の掛かった空き教室ばかりで人がおらず、非常に閑散としている。

が、何故か今は人だかりが。一般ピーポーが来ても面白味がある場所とは言えないのに。

……なんだ、この盛況具合は？

「何事かしら？」

真桜も首を傾げてる。

部活の予算申請の時はこんな感じだったけど、今日は何かの申請とかが必要な日でもないしなあ……？

「ええいつ、退け！ 退かぬか、下郎共！」

……どっかで聞いたような声。

「ん……陽介ね」

「邪魔をするな、だと！？ それは俺の台詞だ！」

「ああ、なるほど」

確かにこの声は陽介。竹槍を振り回すトンデモ風紀委員長の声だ。

「ということは、この人ごみは……」

生徒会室前の人ごみは野郎共ばかり。それを考えれば理由はおのずと知れる。

人ごみの中心にあるのは2つの人影。

「ああっ、いい加減にせんか！ ——分かった！ 我が愛槍のサビ

にしてくれるっ！」

「よ、陽介くん！ それはダメだよ！ 人殺しは犯罪なんだよ！」

「止めないでください、はるな榛那樣！ こやつらを生かしておいては、榛那様の御身に危険がつっ！」

「だ、大丈夫だよ。ねえ、皆さん？」

「「「うんうん、そうだよ。大丈夫だよ」」」

「ねっ」

「駄目ですっ！ 明らかに胡散臭いではありませんか！」

その言葉には俺も同意する。

我らが宮水沢学園にはアイドルが2人いる。

一方は歌って踊れて金儲けもできるアイドル、“十七時の歌姫”
こと久遠 九八。

そしてもう一方は――

「そんなことないよ。みんな、いい人だもん」

人ごみの中心にいるマイ親友にして癒し系生徒会長、“六ツ月の
女神”つきみやこと月宮 はるな榛那。

白いリボンを2つ結んだショートヘア。控えめな笑みが奥ゆかし

き日本女性を連想させ、儚い感じのする美少女フェイスをさらに美しく見せる。

背は俺より頭ひとつ小さく、150センチに微妙に届かないくらい。

スカートとニーソックスの間の絶対領域が目眩しい。すごいな、絶対領域！

そして優しい。俺にも（これ重要）優しいのだ！

「あ、義裕くんは真桜さん。こんにちわ」

人ごみの只中にいながらも、こっちを向いて、にっこり。
うわあああ……かあいいなあ、榛那。

真桜の名前が出た途端、人ごみが引いていくのはご愛嬌。
確かに真桜はこういう人ごみが嫌いだけど、いきなり蹴散らしたりはしないんだから、そんな慌てんでも……。

「ちっ……命拾いたわね」

前言を撤回する。

真桜に恐れをなした人ごみが消え、残るは榛那と陽介のみになる。
陽介が難しい顔で真桜を睨む。たぶん自分で人ごみを蹴散らしたかったんだろう。迷惑な……。

「ぬう、魔王陛下か。ここは礼を言っておこう」

「必要ないわ。どうしても言うなら、菓子折り持って生徒会室に来なさい」

「誰が持ってくるか！」

持ってきてくれるとみんな喜ぶんだがなあ。

「ともかく！ 榛那様を頼むぞ。妙なことをさせたら承知せんからな」

そう言って陽介は、赤く染まった竹槍を持って去っていく。……誰を殺った？

陽介は榛那の従者みたいなものなのだ。住み込み奉公人紛いをやっている。

なんでも雛森家と月宮家の100年来の約束だとか何だか。歴史がある家ってスゲーな。

「妙なことって、具体的にどういうことかしら？」

「陽介くんはわたしが何かやるとすぐに、妙なことはしないでください、って言うんだよ。自分の方が妙なことするのに……」

うーん、どっちも知ってる俺としては、どちらも同じくらい妙なことをすると思うけど。

「この前も、猫さん拾ってきたら——」

『榛那樣！ なにを拾ってきているのですか！』

『ダンボールに入ってたの。飼ってもいいよね？』

『返ってきます！ 場所は何処ですか？』

『だ、ダメだよ！ まだ子猫なんだよ！？ 死んじゃうよ！』

『大丈夫です！ 猫ですから！』

『理由になってないよ！？』

『昔、ライオンキングという映画を見まして……』

『関係ないよ！ 猫さんはライオンじゃないよ！』

『関係あります！ 猫はライオンに近い生き物です。ライオンにできて猫にできない訳がありません！』

『ええっ！？』

『それを証明して見せます。1年で、この猫が見事にシマウマを狩る場面をご覧に入れましょう！』

『無茶だよ！ 何する気なの！？』

『ふふっ……行くぞっ、今は脆弱な子猫よ！ 1年でシマウマを狩ってみせるぞ！』

『ああっ！？ 猫さん、返して！』

『お前の名は今日からライオン丸だ！ これより修行を開始する！』

『猫さーん!』

「――ってことがあって」

「……………」

マズイ。突っ込み所が多すぎて、どこからツツコミを入れるべきか分からない……!

捨て猫律儀に拾ってくんの、とか。ライオンキングってそういう話だっけ、とか。

そんなこんなで苦悩する俺を尻目に真桜が突っ込んだ。

「ライオン丸は伏字を入れなくいいの?」

「って、そこに突っ込むのかよ!?!」

いいんだよ! そんな古い作品のこと、みんな知らないんだから!

「そもそも陽介はライオン丸が何か分かっているのかしら?」

「いや……分かってるんじゃないか」

放送されてたのは70年代とはいえ知ってる人は知ってるし、現に俺も真桜も知ってる。何故知っているかはヒミツなり。

「となると、さしずめ私はゴーオンかしら」

いや、確かにアレは大魔王だけど……。てか、今さら伏字？ 遅くない？

まあ、そんな古い作品の話なんか置いといて、

「結局、その猫どうなったんだ？」

はい、こっちの方が重要だね。ホントにシマウマを狩る為に修行してるのか、ライオン丸（仮）は？

「修行の為に体作りだ、って家にいるよ。急に体を動かすとダメになるから、特に厳しいことはやってないみたい」

「……それって」

フツーに飼ってるだけじゃない？ 普通に飼ってるだけだよね。

「なんだかんだで甘いよね、陽介は」

真桜がボソリと言った言葉に俺も賛成。
もっとも、関係がある当人は？ マークを浮かべているけど。

「……？ どうしたの？」

「いや、なんでもない」

「えー？ なにかあるような顔してるよ？ 教えてよ」

むーっ、と上目遣いで顔を近づけてくる榛那。

ぬああああっ、かわいい！ 可愛すぎるっ！ あまりのかわいさに萌え死ぬう……！

「はいはい。いつまでも突っ立ってないで、中に入りましょ」

パンパンと手を叩きながら、真桜が間に入ってくる。こっ、これはまさか――

「嫉妬か！ ついに真桜もデレ期に突入なのか！」

「他の人が来る前に、ファイルの整理とかするつもりでしょ？」

うん、別にデレに入った訳じゃないのは分かってるんだ……でも何か反応をちょうだい！ じゃないと俺が恥ずいから！

「恥ずかしさで悶え死ぬがいい」

「恐っ！」

恐怖で恥ずかしさも吹き飛んだよ……。

「はいはい、仕事しよう。そうしよう！」

このままの状態はあまりにもアレなので、強引に話を榛那に振る。助けてください、我が女神！

「む。そうだね！ お仕事しないとね！」

頑張るぞー、と言いながら右手を上げる。

だから、何でキミの行動はすべて愛らしいの？ ヴェリヴェリキ
ユートだぜ！

榛那は生徒会室のドアを勢いよく開いて中に――

「みゃっ!?!」

中に入る前に蹴躓いて転んだ。

「な、なんてことだ……!」

まさか、ドジっ娘属性まで持っていたとは! 榛那、恐ろしい子……!

「どうでもいいから、早く助けるの手伝いなさいよ」

「どうでもよくない! この情報が一般の榛那ファンに漏れたら――」

「いいから早くしろ。さもなくば選べ」

「なにを!?!」

「全身を針で貫かれるか、杭に突き刺さるか、車輪で轢かれるか、煙で燻されるか、首に――」

「榛那、大丈夫か! 怪我はないか!?!」

そんな中世の処刑みたいなモノを受けたくはない。

第12話：女神の如き我が親友（後書き）

13話目完成！ うーん、ノリが悪い。

先日「山と谷がない。話が進んでない」という感想を頂きまして、自分でもあー、と思ったわけですよ。

話が進んでないというのは解決策も思いつくのですが、山と谷に關してはいまいちピンと来ないので……。

というわけで、しばらくコメディ小説を読み漁って修行してきます。次回更新は未定です。レベルアップして戻ってきたいと思っています。

レベルアップ、できてるといいなあ……。

第13話：体育委員長の逆襲！

――
本日の生徒会活動は大変なごやかに進んでおります。何故ならば

――
「はい。他に議題はありませんねー？」

神様、仏様、榛那様がおられるのだ！ 控えおろう！

いやー、前回のメンバーに榛那が加わっただけなんだが、それだけでこうも空気が違うなんて！

いかに榛那を除いた生徒会が重い空気を纏っているかが良く分かる。

「「「「……………」」」」」

榛那以外の生徒会役員から冷たい視線が向けられた。

あれ？　なんか俺、針のムシロだよ？　また心の中身がだだ漏れですか？

「え、ええっと、ありませんよね？」

「ないわよ」

不安そうに繰り返した榛那に、真桜が簡潔に答える。他のメンバーもコクコクと頷いた。

俺の心は榛那には読めないようだ。よかったよかった。

……あれ？ でも、それって以心伝心できないってことでもあるのか？ だとしたら、そこまでのいいことでもない？

「榛那っ！ 俺たちはいつまでも親友だよなっ！？」

「ほへっ！？」

「……気にしなくてもいいわよ。いつもの発作だから」

発作ってどういう意味だい、マイ幼馴染。

「議題がないなら、終わりにしましょう」

「あ、はい。それでは、本日の生徒会活動はこれで終わりです。お疲れさまでし——」

「——お前ら生徒会にモノオオオオオス！！！」

榛那が終了を告げる寸前、生徒会室に大声が響き渡る。

こっ、この声は——！？

「たっ、体育委員長！ 生きていたのか！？」

思わず叫ぶ。

いや、だってねえ……てっきり真桜に殺されたものだ。 (第5話参照)

「はっはっはっ、あの程度の攻撃でやられるほど、ヤワな筋肉をしてないぞ!」

筋肉が強さの単位なのか。宇宙筋肉とつけてんのか。

「え、えーと……?」

榛那が状況を理解できず周りの面々の顔を見る。

そういえば前に体育委員長が来たとき、榛那は休んでたね。そんなわけで、俺が簡潔に説明することにする。シンプルイズベストだ。

「あいつは体育委員長。俺たち生徒会の――敵だ!」

「敵なのっ!?!」

「違うわよ。義裕の言葉を真っ正直に信じない。3回に2回は嘘だと思いなさい」

真桜がひどい言い方で否定してくれた。人をオオカミ少年のように言うなよ……。

「ええっと、結局……?」

何か、もう俺が言っても信用がなさそうなので、真桜に任せることにする。

「彼は体育委員長。私たち生徒会の――下僕よ」

「下僕なのっ!？」

「「違う違う違う!」」

あ。俺と体育委員長の声がハモった。……やーな感じー。

「と、ともかく! お前ら生徒会にモノモース!」

やっぱり発音変だぞ、体育委員長。

というか、榛那がまだ状況を認識してないぞ、体育委員長。

「はあ……生徒会と体育委員会で野球勝負、ですか?」

体育委員長の長ったらしい説明を聞いて、榛那は開口一番そう呟いた。

あ、体育委員長の話は長い上に面白くなかったから半分寝てた。なので、ぶっちゃけ何の話だったのか、俺は全く知らん!

「威張るな」

「にぎいいいいいい！」

つ、机の下で、足を踏まれた……。しかも椅子の足で！
うろうう……。こんなことなら、真っ直ぐ前に足をのぼしておくべきだった……。

「ええーっと、どうしたの？」

俺が奇声を上げたというのに、声をかけてくれるのは榛那だけ。他のヤツらは『また何かやらかしたな……』的な視線を向けてくる。少しは心配せえ！

しかし、せっかく榛那が心配してくれているのに、俺は痛みで悶絶中。説明する余裕などない。

「義裕は持病の癩で苦しんでるだけ。いつものことだから気にしないでいいわ」

「はあ……。知り合ってから2年近く経つけど、全然知らなかったよ」

嘘だと気付け！

「で、体育委員長。具体的にはどうするつもり？」

ああ……。俺置いてけぼりで話が進んでく……。

「日時は球技大会当日！ 試合は体育委員会チームVS生徒会チームの一騎打ち！ 補欠メンバーはいなくても可！ うちが勝ったら予算を100倍に増やせ！ ワカッタか！？」

あー、なるほど。予算が足りないから野球勝負なのね。予算300円じゃ自腹切るしかないもんね。

ぶっちゃけ、予算を使い込んだ体育委員会の自業自得な気がするけど。

ところでさ……やっぱり発音変だよ、体育委員長。

ハッ！　もしかして帰国子女とか？　意外な過去を持っているのか？

「体育委員長！」

「なんだ！　文句あんのか！？」

凄い剣幕で怒鳴られた。

「なんでいきなりキレてんだよ……」

「キレてないっスよ」

ビミョーに古っ！

「それは置いといて。体育委員長って、帰国子女とかだったりする？」

「俺は生粋の日本国民だ！」

なるほど、じゃあ別に日本語が不自由という訳でも――

「――って、待て！　帰国子女は日本国民でもなれる！」

親の仕事とかで海外行って戻ってきたのが帰国子女だよ。日本人でもオールオックケーじゃん。

「ソノトーリ！ あっし、生まれも育ちも沖ノ鳥島！」

「ウソつけっ！」

日本で一番南の島は無人島だ！

「出身は北海道」

「沖ノ鳥島は！？」

「かつて全ての大陸はパンゲアと呼ばれる1つの大陸だった……」

「そんな大陸移動の話をしてる訳じゃない！」

「あれから、3億年……人類は素晴らしい筋肉を手に入れた」

「もういい！ 俺が悪かったから喋んな！」

発音変なのは単に筋肉好きの変人だからだね。妙なところで博識だし……。

なんか色々疲れたので机に突っ伏す。ひんやり気持ちいいー。

「え、えーと、皆どうする？」

俺が体育委員長との会話を切り上げたのを見計らって、榛那が生徒会メンバーにそう切り出した。

俺のことを待っててくれたんだね……。ううう、ええ子やあ……
榛那はええ子やあ。

真桜なんて『つまらないコントだったわ』って目で言ってきたるし。

コントじゃねえよっ！

「私は関与しない。現生徒会が決めるべき事案。過去同様の事例はない」

真っ先に口を開いたのは蜜柑先輩。強弱すら付けず、淡々と三言述べる。

突き放したような言い方だけど、この人は一応引退した身だから当然と言えば当然。

自分の経験からアドバイスはくれるけど、さすがにこういうことはなかったらしい。

いかに体育委員長が変わった人間であるかが分かる。こんな変な人間はそこらにいないだろうねえ。

「……………」

何故か体育委員長の何か言いたげな視線が飛んでくるが、無視しておこう。

「別に問題ないわ。どうせ勝つし」

続いて真桜が体育委員長の案に賛成意見をあげる。

勝負事持ちかけられて断るのは、負けず嫌いの真桜には無理だろう。

だとしても――

「スゲー自信だな」

負けたら3万も出さなきゃいけないのに、ホイホイ受ける神経が凄^ひい。

負けた時のことなど全く考えてないのが何だかなあ。

「事実を述べただけよ」

まあ、俺も真桜が負けるとは思っていないけどね。

……ただ、俺の記憶が確かなら、真桜って野球やったことないはず^ずだけど。

幼馴染として知る限り、だが。

「僕も特に反対はしません」

「わたしもです」

一年生コンビも異論はないようだ。

この時点で賛成票は過半数越えしてるけど、一応は全員分の意見を聞いて判断するのが榛那流。

残るは一姫だけだね。まっ、あれでお祭り好きだし、賛成だろうけど……。

「わたくしは反対しますわ」

「「ええー」」

一姫から出た予想外の反対意見に、俺と体育委員長の言葉がカブる。

あ、やばっ！ これじゃ一姫の気分しだいで、また裏切り者扱いで真桜に追い回される危険が……。

「……………ふん」

あれ？ 何も言ってこなかった……？

いつもなら『義裕は体育委員長と仲がよろしいですわね』とか言っ
てきそうなのに。

スゲー機嫌悪そうな目を向けられたけど。

「とにかく。大事な予算をゲームで決めるなど、わたくしは容認で
きませんわ」

「うーん、やっぱりそうだよね……」

普通にまともな一姫の意見に榛那が考え込む。

視界の端で体育委員長がおろおろしているのが見えた。この案が
通らなかったら来た意味ないしね。

「あっ、そうだ。義裕君の意見はどう？」

「え？ 俺？」

ぶっちゃけ生徒会副会長補佐という、生徒会会議に参加するだけで
権限も何もあったもんじゃないポストなんだが、それでも訊かれ

たからには答えるべきか。

そんな穀潰しの意見でも聞いてくれるキミは女神。イエーイ！

「俺は賛成でいいと思うぞ。面白そうだし」

一姫の意見はもつともだが、青春を謳歌する一学生としてはやはり面白い方を選ぶ。

「……よし」

俺の意見を聞いて結論を出したのか、榛那が体育委員長の方を向く。

「体育委員長さん。生徒会と体育委員会の野球勝負を承認します」

「よおおっしゃあああああああ！！！」

「ただし！」

テンション高く上がった体育委員長の雄叫びを、榛那が珍しく大きな声で遮る。大きな声といっても、そこまで大きくはないが。

「その勝負の結果で修正される予算については、これからの両者の話し合いで決定します」

つまり一姫の意見を一部含んだ形だろう。万が一負けたとしても体育委員会が予算を好き放題しないようにする為の、予防策。いくらなんでも3万はでかいしな。

「むう……わかった。ただし、その話し合いは会長さんも参加して

くれ。絶対に……！」

「は、はい。当然ですけど……？」

「絶対だからな！」

やっぱ前回の経験が痛かったんだろうな……。

真桜より榛那の方が話せると見て、今のセリフを言ったんだろう。

体育委員長はその言葉を最後に生徒会室から出て行った。

「……あ。野球って何人でやるんだっけ？」

ポツリ、と榛那が誰ともなしに呟く。

「もしかして、榛那も野球知らない？」

「うん。家じゃニュースくらいしか見ないから、詳しくは……」

それでよく野球対決を容認するな……。真桜も野球はやったことないし、意外とやばいんじゃない？

「あー、野球経験者は挙手して」

俺も草野球程度しか経験ないし、ちゃんとした経験者がいた方がいいだろう。

野球部所属の体育委員長を筆頭に、体育委員会は当然のように体育会系の生徒ばかりだ。いくら身体能力の高い真桜がいるとはいえ、野球は1人でやるものじゃない。

そんな訳での提案だったのだが……。

「……いないのか」

該当者ゼロ。女子はともかく、男子たる紳はやってくれててもいいじゃない！

というか、それ以前にメンバーが足りない。

俺、真桜、榛那、一姫、紳、風月、蜜柑先輩……これで7人。最低でも、あと2人はいなきゃ野球はできない。今来てない生徒会メンバーはOB、OGを含めて――九八、子鳩、鏡華先輩、光先輩……ダメだ、全員来そうにない。

「メンバーが足りないけど、どうする？」

「あと何人必要なの？」

「最低2人」

あくまでも“最低”だ。ホントならもっと欲しい。

「ところで義裕君。わたしは運動できないから頭数にいれちゃダメだよ？」

「訂正、最低3人」

しまった、すっかり忘れてた。きっとMIBの陰謀だ！ バチツと光って記憶が飛ぶんだ！

榛那はなにやら凄い名前（漢字が何個も並ぶ）の病気で激しい運動ができないのだ。体育の単位はレポートで取っている。

しかし、ただでさえ数が少ないのにさらに減るとは……大丈夫か？

「……鏡華を呼ぶ。あの子は野球もできるはず」

「うーん……鏡華先輩ですか」

蜜柑先輩が提案してくれるが、俺は気が進まない。

鏡華先輩は何故だかゲートボールにハマってしまった元・生徒会長のことだ。

ただ、運動はそこまで得意という感じじゃないし、むしろダメな部類に見える。……ストライクゾーンはかなり狭いけど。

「義裕、贅沢は言ってられないわ。この際人数合わせでもいいのよ」

「それを言っちゃあ、身も蓋もないだろ……」

事実だけど。

「じゃあ、鏡華先輩を入れて……残り2人、誰か当てある？」

榛那が改めて全員に向けて言うが、誰しも無言。

あー、他に生徒会関係者、生徒会関係者……。

「一姫、書記のところの後輩は使えないかしら？」

真桜が思いついたように言う。

一姫のポジションは書記長。生徒会書記のトップであり、当然のことながら下っ端が存在する。九八に対する風月みたいなものだ。

「残念ながら。子鳩は現在、休学中ですわ」

「そうだったわね……」

世の中上手いかないもんだ。

「うーん……じゃあ、残りのメンバーに関してはまた後日探すことにしようか？」

賛成。どのみち試合の日時すら決まっていな。

「それでは、本日の生徒会活動はこれで終わりです。お疲れさまでした」

「「「「お疲れさまでした」」」」

今度は別段邪魔が入るわけでもなく、いたって平穏に終わった。平穏って素晴らしいなあ、おいっ！

そんな風に幸せを噛みしめる俺に、静かに近寄ってきて真桜は言った。

「メンバーが決まったら特訓しましょうか……地獄の」

どうやら嵐の前の静けさのようだった。

第13話：体育委員長の逆襲！（後書き）

逆襲と言いつつ逆襲できてない話。

黄金週間は引きこもってネットに散らばるコメディを読みふけてきました。

いやいや、面白い作品がいっぱいです。しかし、面白いと感じた作品であればあるほど完結していないという罨。そして結局「山と谷」がわからないダメ作者。

とりあえず、次で2月に入りましょう。

真桜視点で物語を見てみましょう。

舞台裏の人にも出てきてもらいましょう。

意図などないインターロッド（前書き）

“微”が抜けました……

意図などないインターロード



いつものこと。それが一番。

今の日々こそが平穏。今の景色こそが安穏。

今の生活が楽しいと、そう思う。

今の日常が愛しいと、そう感じる。

だから、私は――

「2月じゃあああああ！」

「朝っぱらから騒がしいわよ」

「ごはあっ!？」

玄関先に出るなり大声で叫びだした義裕を、蹴り飛ばして強制的に黙らせる。

新しい月が始まってテンションが高いのは分かるけど、近所迷惑を考えるべきだと私は思う。

平日とはいえ朝。常識をもった行動を願いたいわ。

「まったく……非常識ね」

「非常識はどっちだ！ お前も十分非常識じゃない！」

「黙れ。遅刻したくないなら早く歩きなさい」

「ハッ！ 遅刻が恐くて学生やってられるか！」

事実かもしれないけど、義裕が言えるセリフではない。何故なら

「ダブるわよ？」

そう。義裕はダブる。留年する。落第する。

「無限の彼方へ、さあ行こう！」

学校行きなさいよ。

2月。旧暦に換算すればまだ去年。そう考えれば現在の気温の低さも納得できなくもない。

個人的には1月よりも気温が低いのではないかと感じる。天気予報では明日は雪が降るとのことであるし。

私の名前は倉里 真桜。

私立宮水沢学園高等部2年、生徒会副会長。一般生徒からは“魔王陛下”と呼ばれている。

“魔王陛下”——初めに私をそう呼んだのは誰だったか。

“真桜”の読み方を少々変えただけの、工夫も何もあつたものではない渾名。

ともすれば悪口陰口の類にしかない名称。

最初に“魔王陛下”と呼んだのは小学の時に殴り飛ばしたガキ大将か、中学の時に蹴り飛ばした不良共か、それとも高校に入ってから斬り伏せたクサレ剣道部か……どれであつたとしても意味はない。何であつても私が“魔王陛下”と呼ばれる現実には相違はなく、そして私はその現実を拒絶することはないから。

“魔王陛下”の名は——終わらない夢を望む、“悪”たる私に相応しいものだろう。

「2月。節分、建国記念日、バレンタインデー、バレンタインデー……」

……人の思考を邪魔するような声が漏れてくる。発生位置は真横。

「ばれんたいんでー……」

この男の名は東雲 義裕。十数年の付き合いの幼馴染。そして――変人だ。

勉学はそこそこできるのだが、とっぴな思考持っていたりブツブツ独り言を呟いたりする変人。

一姫は、単純な嘘も見抜けない馬鹿だと評していた。私にしてみれば、馬鹿は扱いやすいので歓迎する。

が、義裕は変人。変人は一番使いにくい。よってこの幼馴染は扱いにくい。

背は私より頭2つ……いや、1つと半分くらい高い。別段、身長が高いわけではない。私の背が低いから精々平均といったところだろう。

顔は……語らないことにしよう。人間、顔が全てではないとだけ言っておく。

『彼と付き合ってるの?』などと聞かれることがあるが、そんなことはない。断じてない。たとえ天地がひっくり返ろうが、ビッグランチが起きて宇宙が滅亡しようがありえない。

だいたい、私の理想の男性像というのは――いや、そんな物はどうでもいい。

ともかく義裕は幼馴染であり、幼馴染以外の何物でもない。

今、そんな義裕から物欲しそうな瞳が向けられている。正直うざったいわね。

かといって無視していれば、学園に着くまでこの視線は私に向けられ続けるのだろう。やれやれ……一応声をかけてあげるか。

「何よ？」

「べっ、別にチョコ欲しいなんて思ってないんだからね！　くれるって言うなら仕方なくもらうけど！」

その態度はキモイを通り越して、非常にイタイ。バレンタインチョコが欲しいなら、素直にそう言え。

「あげるつもりなんて微塵もないけど？」

くれてって言われれば例年のように慰みチョコのひとつでもあげただろうけど、欲しいなんて思ってないって言ったし。

「……………」

「灰になるな。女子の知り合いくらい他にもいるでしょ」

ぶっちゃけた話、生徒会メンバーは大半が女子。麦チョコひとつくらい恵んでくれる……かもしれない。断言はしない。

それに――

「榛那なら普通にくれると思うけど？」

まあ、特定の誰について訳じゃなくて、お世話になった人全員に配るんだだけ。

「そ、そうか！ ……って、バレンタインデーだよ？ 恋する女の子がトキメキながら男の子にチョコを渡す日だよ？」

ローマの聖人が殉死した日だったと思う。もしくは菓子会社の陰謀の日。

しかもその理論でいえば、去年までの私は義裕に恋する女の子になる。……考えただけで寒気がするわね。

「そんな日に榛那にチョコをもらったりしたら俺は、俺は……ああああ……！」

何やら苦悩しだした義裕。

そこで苦悩するなら、去年もらったチョコはどうなるのだろうか？

まあ、一応歩くことはできているから放っておこう。今朝はゆっくり歩いても大丈夫。義裕がおかしいのはいつものこと。遅刻して、ダブらなければ問題ない。

まだ、私の日常は終わらない。

いつものこと。それが一番。

今の日々こそが平穏。今の景色こそが安穏。

今の生活が楽しいと、そう思う。

今の日常が愛しいと、そう感じる。

だから、私は——永遠を望む。

変わらなければいい。この日々の全てが。
変わらなければいい。人間関係も何もかも。

その為ならば“悪”でもいい。

あらゆる手段によって“敵”は始末する。
“敵”は物理的なものとは限らない。それは誰かと誰かの仲違い
かも知れない。

だからこそ、あらゆる手段で。

全てを一定に保ち続ける為なら何だってしよう。たとえば、身近な
者を傷つけたとしても。

変えさせはしない。この日々は永遠であればいい。

私の名前は倉里 真桜。全ての“悪”たる“魔王陛下”。

この日常は私のモノ。セカイ誰にも渡したりはしない。

◇

「彼女の暮らす世界が夢でないなんて——誰が証明できる？」



「おっ、茶柱」

湯呑の中に立つ柱を見つけて、彼は呟いた。

一般に茶柱が立つのは縁起の良いものとされるが、彼は見つけたところで深い感慨を抱かない。特に頓着することなく、お茶を飲み干す。

宮水沢学園高等部、北棟裏。

普段からまるで人気がないその場所で、彼はベンチに座ってお茶を飲む。平和だ……。

ちなみに人気がない場所なのに何故ベンチがあるかといえば、彼

がわざわざ持ち込んだからだ。

「人間には、時に余裕が必要なのだ」

誰ともなしにポツリと呟いて、2杯目のお茶を入れる。茶柱は立たない。

目を――閉じる。

「……望むだけなら猿でもできる」

知覚する。

学園に向かって歩く少女と少年。

どこまでも“悪”な魔王と、いつまでも“普通”な一般人。

「努力だけなら人でもできる」

魔王が魔王でなかった頃、そこにいたのは病弱な少女。

そんな少女の小さな願いを、一時だけでも叶えてあげたくて。

「結果を得たなら、その時は――人以外になっている」

叶えてあげた結果がコレ。

少女の望みは歪に膨れ上がり、当初の色とはまるで違う。

虹色の夢はもはや白い悪夢。何がここまで変えたのか。

彼には分からない。知っているけど、分からない。だから、手を出さない。

彼がその力を振るえば、全てを元に戻すこともできるけど——それはしない。

彼は知っている。自分自身が何であるか。

彼は知っている。それは一個人の人生など、造作なく消去できる力。

彼は知っている。それは個人どころか世界すら手玉に取るもの。

彼は知っている。それはどこまでもデウス・エクス・マキナ都合主義の権化である魔法。

だから——彼は自分を使わない。

「ふうっ」

息を吐いて、知覚を終了。お茶を飲もうと湯呑みに手をかけて、

ジャジャジャジャーン ジャジャジャジャーン

「……………」

静寂を打ち破るように鳴り響いたのはベートーヴェンの第五交響曲ハ短調——『運命』。

それは彼の携帯電話の着信メロディだ。

静かな空気を穢された気がして一瞬だけ目を細めたが、気を取り直して携帯を取り出す。

画面には『鳳ノ宮 子鳩』の文字。

「……………」

——ピッ。

着信拒否。ただ今、電話に出ることができません……。

ずずっ、とお茶を飲む。平和だ……。

ジャジャジャジャーン ジャジャジャジャーン

再び着信。今度は真面目に出る。

「はい、もしもし」

『今何で拒否したんですか！ 何で拒否したんですか！』

電話口から聞こえてくるのは予想通りの高い声。声優さんが演技をしているのでもない限り、十代半ばの少女の声に聞こえる。

彼は少女の問いに少し考えてから答える。

「んー……気分？」

『うあああああ！ 本条くんがそこまで嫌な人だったとは、子鳩』

はほとんど知らなかったですよ!？」

「子鳩にしかやらないから安心しなさい。特別待遇だ」

『そんな特別扱いはイヤですっ!』

電話を持って息を切らせる子鳩の姿を知覚して、彼は小さく笑った。

「それで？ 何の要件？」

わざわざ電話をかけてくるのだ。それ相応の理由があるだろう。

その気になれば彼は子鳩が伝えようとすることを知覚することも可能だが、それはルール違反。

本人が話そうとしているのなら、それを聞くのが筋というものだ。

『あー、本条くん。怒らないで聞いてくださいね?』

「ん?」

果てしなく不安な出だしで話は始まる。

『ええっと、子鳩は前回の“終点”で禁呪課に戻ったじゃないですか?』

「うん」

『禁呪課って封印指定の禁書が何冊かあるじゃないですか?』

「うん」

子鳩はそこで一旦言葉を止めて、うーっと唸りだす。どう言おうか迷っているようだ。

だが覚悟を決めて端的に言う。

『……1冊そっちに落としました』

「は？」

『だからっ！ そっちの世界に落して失くしちゃったんですよ！』

それは不祥事というレベルではない。

封印指定の禁書といえば、ヘタをすれば国どころか星ひとつくらい楽々滅ぼせる代物もある。

「急いで探さない」

『もう世界に溶けちゃったから無理ですっ！ だから本条くんに連絡してるんでしょ！？』

「逆ギレしないでよ……」

彼の力を使えば確かに造作もないこと。

デウス・エクス・マキナ
ご都合主義の権化な魔法は世界の危機など即座に救える。

だが――

「自分は今、この世界に対して魔法を使わない。……子鳩も知っての通りね」

『ええ、知ってます。だけど曲げてください』

「ハッキリ言うなあ……」

要望をちゃんと言えるのは美点だが、少しは駆け引きも考えた方がいい。

「いくら溶けてしまったとはいっても、禁書次第では一気に悪化はしないよ？ 地道に子鳩が回収していけばいい」

『落としたのは“アツピンの赤い本”です。急激な悪化はないでしょうけど、影響自体は2、3日で出ますよ』

「ん。——いや」

知覚する。

「もう影響出てるよ。予想以上に早い」

場所はここ、宮水沢学園。より正確な位置は高等部東棟4階、科学技術部の部室。

『だったら！』

「手は出さない。拱手傍観——それが今の自分がしなければならな
きようしゅぼうかん
いこと」

直接的に世界に力を使えない。彼が自らに課したルール。

『……これが世界に多大な影響を与えると分かっている？』

「そうだよ」

『この影響は世界の中心人物に直接向かっていくのに？』

「うん」

世界の中心人物――あの病弱な少女は、今や世界を支える神にも等しい。

禁書より染み出す悪意は、彼女の元に群がっていくだろう。

『子鳩には分かりませんよ……。自分が願ったはずの魔法セカイを使うのを、どうしてそんなに嫌うんですか』

「この世界は彼女のモノ。【図書館】も【揚羽蝶】も【柱時計】も、この世界にとってはただの部外者。無関係」

彼女が世界を自分のモノと言うならば、彼女自身を守らなければならない。

『それは……子鳩も手を出すということですか？』

「そんなことは言わないよ。これは持論だから。【揚羽蝶】たる子鳩が手を出すというなら出せばいい」

『……………』

果たして世界をものにした少女は、より攻撃的になった“敵”から世界を守るか。

彼には分からない。そして——知らない。

未来を知覚することはできるけど、それは絶えず変化する。無限に変化する可能性の世界。

『子鳩は勝手に動きます。溶けた中からひとつずつ、断片を回収します』

「ん。頑張れ」

元々は子鳩のミスだ。その行動に何の問題もない。

『はあ……こっちは以上です。そっちは何かありますか？』

「んー、今回のこと、【柱時計】の彼女には言った？」

『一応伝えましたけど……』

子鳩の声のトーンが下がる。

「けど？」

『理解してくれたかどうかは別です……。はあ……2人とも真面目に取り組んでくださいよ』

「言っておくけど子鳩のせいでしょう？」

『ぐっ……。それはそれ、これはこれです』

都合のいい奴である。

『はあ……とにかく、そういうことです。今度は“次”が始まる時に会いましょう』

「ため息ばかりだとハゲるよ」

『ハゲませんよっ！』

そう叫んで子鳩は電話を切った。

ツーツーという音が、携帯から聞こえてくる。

彼は携帯をしまってから、湯呑みに3杯目のお茶を入れた。

「やれやれ」

茶柱が立たなかったお茶をすすりながら、彼は思考する。

本来ならば――世界の持ち主となった彼女を説得すれば悪夢は終了する。

もちろん説得するのは彼ではなく、少女を世界の持ち主たらしめる少年だ。

少年が世界の真実を認識し、それを糺せば終わりのはずだった。

だが、そんな単純な問題に、新たな問題が加わった。

「――アツピンの赤い本」、か」

強大な力を持った悪魔と、その配下の者たちの力を自在に操る魔法の本。

主の手を離れた後も真名と魂の蒐集を続けたその本は、既に自律

意思を持って行動する。

世界に溶けた今、本は世界を取り込む為に少女を狙うだろう。

だけど彼は少女を助けない。

「元よりこの身は物語には存在しない、イレギュラー」

助けることはできない。

彼ができるのは言葉を紡ぐことと、手がかりを残すことだけ。遙か昔にそう定め、その他を禁じた。

一度その禁を破ったからこそ、この悪夢の世界は存在する。

もう二度と禁を破らないと誓った。だから直接助けることはできない。

彼が少女を助けられるとすれば、それは少年に真実を語り、世界を終了させる手助けをすること。

この世界が終われば、世界に溶けた悪魔は消える。それは間接的に少女を助けたとも言える。

だが、それを行うには大きな問題が存在する。

「『問われれば、世に存在せし全ての真実を答えよう』……。ふう、
レゾンデートル存在理由を邪魔だと思うのは間違ってるかな」

問われれば答える。つまり、訊かれなければ答えられない。

「矛盾に気づいて、そして問いを投げかけて——義裕」

——この夢が悪夢だと少女に言えるのは、
“普通”である君だけ
だから。

意図などないインターロード（後書き）

意図などないと言っておきながら、作者の意図がバリバリ入っている話。

真桜視点。

魔王呼ばわりされてても中まで強靱凶悪かというと、また違うもの。結局のところ見た目と同様、子供のままなんですネ。

舞台裏の人たちの話。

“微”がとれて“ファンタジー”になった元凶の方々。悪魔な話は早々に関わってくるかも……。

まあ、いきなり話が伝奇バトル物に変わることはないのでご安心を。

にしても文章がやたらと回りくどくて分かりにくくなってしまった。今度同じような話をやるときは、もっと簡潔にしよう。

1話挟んで、次々回やつと球技大会に漕ぎ着きます。

第14話：地獄の特訓・準備編

野球。英語で言えばベースボール。

中学1年の時にスペルはバセバ11 (baseball) だと覚え
た人も多いだろう。

「そう？」

「……そうやって覚ええない？」

「少なくとも私は違うけど」

……俺だけ？ いやいやいや、そんなことは……。

と、ともかく、野球だ！ 英語で言えばベースボール！

球技大会にて行われる体育委員会とのバトルに勝たなければ、生徒会
は予算を増額させなければならない。

しかあし！ 予算とは年度始めに生徒会を中心に公平に決められるもの。
今さらポンポン増やしたら他の委員会に示しがつかない！
……まあ、俺は賞品が豪華になるなら予算が増えてもいいと思う
けど。

という訳で、我らが生徒会は試合に備え、野球部の練習場所を一時的に借りて練習をしているのである。

「ぶっちゃけた話、野球っぽいことをやったことがあるのは義裕だけよ。
指導しなさい」

「ちつつちつつ、甘いぜ真桜。よい選手がよい監督になるとは言わないだろ？」

野球経験Ⅱ指導力という訳でもないのだよ。

「そうですわね。よい選手でもない義裕が、よい監督になれる訳ないですわ」

……かと言って、そういう言い方はどうなの？ 夜帳さんちの一姫ちゃん。

まあ、それは置いておくとしても。

「人、足りなくね？」

ここで、練習に集まった我らが生徒会メンバーを紹介しよう。

「どこから拉致してきなさい」

1・今日も非常識な魔王陛下、倉里 真桜。

「人に求める前に自分は努力しましたの？」

「してねえよ！ 悪いかっ!？」

2・今日もキツイよ毒舌お嬢、夜帳 一姫。

「そこでキレるのはどうかと……」

3・今日もクールだメガネ君、宮水沢 紳。

「きっと、お昼に牛乳を飲まなかったですよ」

「飲む学生の方が少ないわっ!」

4・今日もずれてるぞ後輩、高瀬 風月。

「……私は飲んだ」

5・今日もマイペースですね先輩、間宮 蜜柑。

「ああ……もう、俺のカルシウム不足ってことでいいよ……」

6・今日も何か疲れる俺、東雲 義裕。

「え、えと、その……牛乳、買ってくる?」

「いや、別にいいよ……」

番外・今日も優しいよ女神、月宮 榛那。

本日はここ、グランドで、以上の提供でお送りします。

「——って、だからホントに人足りないって」

守備に、ピッチャー、キャッチャー、ファースト、セカンド、サード、ショート、ライト、レフト、センター……の9ポジション。対してこちらの人員は6人。普通に守りきれねえええ……。

「蜜柑先輩、鏡華先輩は呼べなかったんですか？」

前回呼んでくるって言ってたよね。でも、それらしき影はない。

「今、忙しいらしい。野球をやるって言ったら幾つか便利な道具を渡された」

……それは先輩の後ろにある、妙にレトロなテープレコーダーと黒くてデカイ棺桶ですか？

「再生」

カチッ——

『おっハロー、生徒会諸君！ みんなの鏡華ちゃん、今日はテープレコーダーで登場だっ』

スピーカーからテンション高め、幼い感じのキンキン声が響く。この声の主こそお祭り好きな前生徒会長。この人は本当にこう、無駄の多い演出が好きだな……。

『なんでも、野球勝負だって？ 風のウワサで聞いたけど、何やら面白そうなことしてるじゃない』

「風のウワサも何も、私が言った」

ネタばらしされまくりだよ、先輩。

『やー、いいなー野球！ あたしもやりたいなー！』

絶賛メンバー募集中ですよ。

『でも……あたしにはできないっ！ だって、だって、あたしには……』

「何でいきなり演技入るんだ……」

『じゃあ素で言うけど、ちょっと面白そうな技術を見つけてね。それで手が離せないの』

「……………」

これ、ホントにテープレコーダーか？ 通信機とかいうオチじゃないのか？

『まっ、てな訳で鏡華ちゃんは野球に参加してあげられません。ゴメンちょ！』

テープレコーダー叩き壊したくなるな。

『代わりといっちゃあなんだけど、バッティング練習でもするときには棺桶のヤツ使ってよ。使用方法は付属の説明書を見てね』

ピッチングマシンをなんで棺桶に入れるんだ……。まあ、そんなもん寄こしてくれたのは素直にありがたい。

『ではではあ、シーユーアゲイン！ また逢う日まで！ なお、このテープは機密保持のために核爆発するっ！』

「なんでやねええええん！！！」

『あはははは、いいツツコミあんがとー。では、ホントにサラバっ！』

「停止」

ガチッ——

「……蜜柑先輩」

「なに？」

「これはホントにテープレコーダーですか？」

俺のツツコミに思いっきり反応してくれましたが。

「私が東雲に言えることは1つだけ」

先輩が鋭い瞳をこっちに向ける。

思わず背筋を伸ばして聞いてしまう。何を言ってくれるんだ？

「——真実は、いつも1つ」

先生、意味が分からんです。

「で、ホントにどうすんだ？ 道具はあれど、人はおらず……」

守備できなきゃ負けるよ？ 普通に。

「やれやれ、義裕の頭は飾り物なのかしら？」

どういう意味だ、真桜？ この状況を打開するアイディアがどこにある！？

「ここは発想の逆転よ」

「発想の逆転？ ……そ、そうかつ！」

真桜の言葉に俺の灰色の脳細胞が閃きを生み出す。

効果音は、ズガガアアアン！ 背景には稲妻が駆け抜ける！

「そして骸骨に……」

「ならねえよっ！」

人の考えを読みつつ、妙な事を刷り込むな！ ったく、とんだ魔王だぜ……。

「似合いそうなのに」

「似合わねえよっ！」

残念そうな目を向けるなよ！ そんなレトロなギャグ、誰がするか——って、

「しまったああああああ！ アホな会話してたら何考えてたか忘れちまったああああ！」

「貴方の頭は空っぽですよ？」

「それはボケが始まってますね」

「DHAを取ればいい」

黙れ、その同輩と後輩と先輩。

「なんといっても通販化粧品ナンバー1」

「それはDHAじゃない！」

DHAはドコサヘキサエン酸の略だ。

『何処さ、ヘキサエンさん？』と覚えれば完璧。

「誰よ？」

「……きっとヨーロッパの人」

どこかにきつと、そういう名前の人もいるはず。

……なんでこんな話になったんだっけ。

「メンバーが足りなくて野球ができない。なら、発想の逆転よ」

ああ、そうだった。発想の逆転をしてたんだ。

「発想の逆転、その1――」

真桜が人差し指を立てる。

「義裕が空いているポジションを全てフォローする」

「なるほど」

「その手があったですか」

「ねえよっ!」

なんで俺だけ?　そして賛同するなよ、生徒会!

「発想の逆転、その2――」

真桜が中指も立てる。

まだ続くのか……。てか、別に逆転してないよね、発想。

「義裕がキャッチャーになる」

ふむ。それなら別に異論は――

「そして私がピッチャーになる」

「異議ありっ！！！」

「異議は認めないわ」

「待った！！！」

「待ちたくない」

横暴だ……。

「とにかく、打たれなければいいのよ。そして私なら打たせないわ」

真桜が本気で投げれば、たしかにバッターは打てないだろう。

ただし、ピッチャーも無事にはすまない。受け止めて吹き飛ばされることも考えられる。

「俺を……殺す気か、ジェフ！」

「誰よ？」

「……きつとアメリカの人」

どこかにきつと、そういう名前の人もあるはず。

……なんでこんな話になったんだっけ。

「という訳で、義裕が星になるわ。賛成の人は挙手」

バツ！

「一斉に手を挙げるなああああああっ！」

ええいっ！ チームワークがあるのは結構だが、俺を追い詰めるのに使うでない！

四面楚歌な俺。

くっ、味方は……誰か味方はいないのかっ！？

「あのー、真桜さん。義裕くんがケガをするよう案には賛成できません」

Y a h o o o o o ! 榛那、やはりキミは女神！

他のメンバーは全員真桜に付いたというのに、たった1人で異議を申し立ててくれた。

「榛那っ！ 俺は一生お前に付いてくぜ！」

「えっ？ あ、うん、ありがとう」

「望みとあらば味噌汁だって作っちゃう！」

「え、えーっと……」

困惑顔の榛那。その顔は——さては俺が味噌汁なんて作れないと思ってるな？

「侮ってもらっちゃあ困るぜい、おぜうちゃん」

「お、おぜうちゃん……?」

この東雲 義裕、普段はいろんな意味でダメ人間に見えるかもしれないが――

「こう見えてもあっしは掃除洗濯炊事に育児……何をやらせても天下一品ですぜ!」

「世界の七不思議のひとつですわね」

ちゃちゃ入れんな!

「と、とりあえず、みんながケガをしないような案に賛成したいです」

ギャース! 俺のセリフが流された!

は、榛那まで俺をスルーするの? いや、そんなことはないはず! ここはポジティブシンキングだ!

そう! 榛那は、俺がこの程度のスルーで前言撤回するような男じゃないか試しているんだな!?

まったく……こーのっ、お茶目さんっ☆

「ハッ――!」

「げばあぁっ!?!」

真桜の裏拳が俺の腹にクリティカルヒット。な、何故いきなり……。

「顔がキモイ」

「お前はそれだけで人殴るんか!？」

「殴るに決まってるじゃない」

「……………」

そうだよな。いまさらの質問だった……。

「先輩方、結局どうするんですか？」

紳が会話を軌道修正してくれる。

さすがメガネ。クールキャラが似合うぜ、あんちくしょう!

「そうね……ここは折衷案にするわ」

「折衷案？」

2つの発想を組み合わせるということか。

つまり——真桜がピッチャー、俺がキャッチャーをやって空いているポジションをフォロー……って、

「ムリムリ絶対ムリ!」

「安心しなさい。義裕の負担が増えることはないわよ」

その言葉で安心できないのが魔王陛下下クオリティだよ!？

「さしあたって、私が空いているポジション全てをフォローするわ」

「なるほど」

「その手があったですか」

「……あつたんだなあ」

まあ、真桜ならポジション次第でできるな。
俺の負担もないし、問題ナッシン、グゥ。

「ちなみにどのポジション？」

空いてるポジションは3つ。つまり、真桜は合計4つのポジションを守ることになるが……。

「ピッチャー、センター、ライト、レフト」

「どんだけ無謀な試みだよ、ソレは!？」

外野全部で、しかもピッチャーって……投げて即座に瞬間移動かよ。

「そして義裕はキャッチャー」

「なああああつ！ その案も生きてんの!？」

「はあ？」

当然でしょ、的な視線を返してくれた。うひゃーん！

——という訳で、

「義裕は大砲すら受け止められるように特訓よ」

「どんだけー！」

「冗談よ。一般人が受け止められる程度に加減はするわ。榛那に怒られるし」

榛那のお陰で命拾い。

女神様のお力をもつてしても、魔王の侵攻を止めることはできないのだ……。

てか、今の状況は第二案との違いがほとんどないのは気のせいですかね？

「とにかく義裕はひたすら受ける練習。他のメンバーはキャッチボールとバッティングでもしましょう」

いくら生徒会メンバーが高スペックとはいえ、ロクな練習もしないで試合前日。

ホントに大丈夫か、これは……。

まあ、今さらどうにもならんな。

「そいじゃ、鏡華先輩のピッチングマシンを使いますか」

真桜もバットを振ったことはないはずだ。

不良が持っていたバットを奪って逆に相手を殴り倒したことはあるが、一般的な用途で使ったことはないだろう。

どんなに強力な打撃も、当たらなければ意味はない。とりあえず全員球を打てるようにしないと。

「……にしても」

俺は鏡華先輩からの餞別に視線を向ける。

うーん……なぜ棺桶？

棺桶の全長は2メートルほど。成人男性が余裕で入れそうだ。色は上から下まで真っ黒クロスケ。タコ墨イカ墨被ったみたいに黒一色。

何故か真ん中あたりに銀のネームプレート。『RX-78』と書かれている。

「ガ○ダムかよっ！」

燃え上がれえ！ 燃え上がれえ！ 燃え上がれえ！

……なんか、この歌詞だけだと危ない人の言葉だよな。

「まさかガ○ダムまで作り出すとは……鏡華先輩、恐るべし！」

「そんな訳ないでしょ。あれは20メートル近くあるのよ？」

「……そうだな」

ツツコミ所、そこ？　と言ってやりたい。
それにしても、詳しいな、真桜。どうしてそんな無駄知識を……
って、俺のせいかな。
ん？　となると、真桜が魔王陛下なんて呼ばれるようになったのも俺のせい？　今の悲惨な状況は自らが作り出したというのか……
なんたることよ。

「とりあえず出してみたら？」

「りょーかい」

えーっと、どうやって外すんだ、この蓋？

……お、スライド式か。棺桶の蓋ってそういう仕組みだったのか？
いや、あの人の自作だろう、これも。

「まあ、いいや。よい、せつ！」

カシャ――

こ、これは……！？

「……コレ、仕舞っていい？」

むしろ、仕舞わせてほしい。嫌な予感しかない。

棺桶の中に入っていたもの、それは――

「なんですよ、これ？　人型ロボット？」

「他の何に見える？」

「コスプレした人間ですかね？」

風月は黙つとれ。

中に入っていたのは、ピッチングマシンと呼ぶには無理があるシロモノだった。

全長1・8メートルの大男。

筋骨隆々な金属質の外骨格に身を包んだ、ロ○コップとロック○ンを足して2で割ったような外觀。つまり右手にバスター、顔に何か仮面っぽいバイザー。

「便宜上、こいつのことをロボマンと呼ぼう」

「その壊滅的なネーミングセンスはどうにかなりませんか？」

悪かったな。

「ところで、説明書は？」

「……入ってた」

紳の問いかけに、蜜柑先輩が棺桶から分厚いプリントの束を取り出してみせる。

「『よくわかる説明書』」

まんまだ。

「起動方法……『鼻を押して3分で動き出します』」

「なんで鼻!?!」

「きつと昔の漫画を読んだのよ。〇ーマンとか」

真桜が正解っぽいことを言ってくれた。たしかに……あの人ならやりかねん。

だからといって本当に鼻に付けるなよ、スイッチ。間抜けにもほどがあるよ。

「じゃ、押すわよ」

「え? ホントに使うの!?!」

「使えるものは何でも使えってお兄ちゃんが言った」

時たま凄いこと言うよな、蒼兄……。

「それじゃ、スイッチオン!」

ドグオオン——!

大気と大地が震えるような重低音が響き渡った。

「な、なにを……」

「スイッチ押したただけだけど?」

違う！ 俺が言いたいのはそのうちじゃない！

「何故、拳を握って叩きつけるんだ！？」

何と言いますか真桜さん、何かの緊急用ボタンを押すかのように、拳を叩きつけてスイッチ入れました。

まあ、ただのスイッチならいざ知らず、このロボマンのスイッチは鼻です。鼻に向って拳を叩きつけました。

いや、ロボだし電源入ってないしで何も感じないかもしれないけど、見てるこっちが痛々しい。確実に鼻折れたよ、今。

「そうね……気分かしら？」

気分次第で鼻を折るって、ホント根っからの魔王だよ、お前は……。

「動き出すまで3分あるし、準備運動しましょうか」

ロボマンが復讐のために動きだしたりしないだろうな、おい。

「深呼吸〜」

「そして早いよっ！」

第14話：地獄の特訓・準備編（後書き）

特訓まで終わらせるつもりだったのに、準備だけで異様に長くなつてしまった……。

次回、『ロボマンが大活躍の巻』こうご期待（嘘

第15話：地獄の特訓・野球編

カアアン！

快音響かせ、打たれた球はぐんぐん飛距離を伸ばしていく——つて、場外！ また場外！

「……うまくいかないわね」

そんな一撃を放った打者がポツリと言った。

「お前はこれ以上何を望むんだっ!？」

初心者が、十球やって、八球場外、二球は安打！ 十分だよ！

「ピッチャー返しでピッチャーの頭に——」

「殺す気か、キサマッ！」

ピッチングマシン・ロボマンは、起動した方がいいが設定しない

といけないとのことで、紳と蜜柑先輩が説明書片手に背中に隠されたボタンをいじっている。

ちなみに、榛那は用事があるとのことで早退。うわあああん！でも去り際の『ゴメンね』がかわいかったから我慢する！

で、使えるようになるまで残りものは各自キャッチボールだったのだが、真桜がバットを振りたいと宣ったので、俺ピッチャー、真桜バッターでやってたのだが……。

「ワシが教えられることはもう、ない」

「何か教えられた覚えないけど」

そう言いたい気分だったんだよ。察せよ！

ボールになるような球は投げなかったとはいえ、全部ジャストミートされるとは思ってもみませんよ。

真桜は初心者のはずなのに。くっ、これが天才……ジーニアスというモノか……！

「ヨシ先輩。わたしも打ってみたいです」

打ちひしがれる俺に話しかけるのは一姫とキャッチボールしてたはずの風月。

「別にいいけど、一姫は？」

「先輩の横に」

横？

「鈍すぎですわね」

「ぬおおおおっ!?」

ほ、ホントに真横にいやがった!

気配がなかったよ! 怖えー、一姫怖えー!

「私もいるけど」

「ギャアアアスッ!」

逆隣りに真桜が!? バッターボックスにいたはずなのにいつの間にか?

ま、待て! 俺は何故こいつらに気づかなかった?

いくら気配を消していたとしても視界に入れば気付かない訳が…

…あ!

「そ、そうか! こいつらの背が低いから目に入らなかったんだ!」

うむ、そうと分かれば安心、安心、セキュリティ。

これからは小さな物でも見逃さない精神で行こう。

「使えない両目は潰してあげようかしら」

「それとも、両足を削ぎ落として身長を縮めます?」

「謝罪いたします」

「お前らどっちも危ないよ！」

「まあまあ先輩方、落ち着いて……」

「「背が高いのは黙ってなさい！」」

「はい！」

なだめようとした風月が一喝される。

別に風月も背が高い方じゃない。この2人の背が低すぎるだけだ。指摘したら今度こそ死ぬから言わないが……。

「それでも牛乳は毎日飲んでるのよ」

「わたくしは小魚も食べてますわ」

「ビタミンDだって摂ってる」

「食生活に問題はありませんし」

愚痴りだした。

妙なフィールドが形成されているような感じがする。何ていうか、禍々しい瘴気が出てるというか、とにかく黒い。

というか、そんなドス黒い空気を醸し出す2人に挟まれている俺は、ひじょーに息苦しい訳で。

「おっし！ 風月、打つなら向こうに行け！ バットを構えろ、そして打てえ！」

「了解です！」

ビシッと、と敬礼して、風月がバッテリーボックスに駆けていく。

「はいはい、その2人。ボール投げるから向こうに行っててねー」

「運動だって人並みにやってる」

「両親も特別背が低い訳ではありませんの」

まだやってる……。○

とりあえず、強制的に運搬して、

「さあ行くぞ、風月！
打てるもんなら打ってみやがれえええええ
ええ！」

「なんでそんなに気合い入ってるんですか」

フツ、甘いな……ベストを尽くしてこそ人は輝くのだ！

「これが俺の全力全開！
一・球・入・魂、どりゅうあああああ」

カー
ア
ン
！

「……………」

……ま、まさか風月にまで打たれるとは。生徒会役員はバケモノか！？

いや、待て！ 考えろ、考えるんだ義裕！

どんなに不思議な現象にもタネはある！

この俺の剛速球をはじき返すということは、風月は何かの秘密特訓でもしてたに違いない！

「せこいぞ、風月！」

「なんで！？」

何故？ Why? と訊きますか、この小娘は！

「秘密特訓をしてまで俺の球を打とうとは見上げた野郎だ……」

「わたし、女の子です。野郎じゃないです」

「うるさいうるさいうるさい！ 五月蠅と書いてうるさい！ 英語で言ったらノイジー！ そんな些細な間違いを指摘して論点をずらそうとしても無駄だ！」

「もう何を言いたいのかさっぱりです」

奇遇だな。俺も分からん。

「ともかく、何か特訓してたな？」

「野球やるって言われてからバッティングセンターに通ったんですけど……」

え？　それだけ？

「もっと何かないのか？　明鏡止水の心を手に入れるとか、喫茶店のマスターと特訓して必殺技を身につけるとか」

「野球やるのにそこまで必要ですか？」

「何故ベストを尽くさないのか！」

「じゃあヨシ先輩がやってください」

それは無理。



「『バックパックにボールを入れてね。なるべく目一杯』」

「目一杯って、かなりの容量ありますよ？」

「入れろと書いてあるから入れる」

「そんなアバウトでいいんですか？」

「ユーザーは説明書に従うもの」

直立不動の黒い巨人の前で、紳と蜜柑は説明書片手に試行錯誤の繰り返しだった。

人型ピッチングマシンなど当然のことながら扱ったことがない上に、説明書の内容も作者本人の口調で書かれているという不親切設定。

「『右側の赤いツマミをぐぐーっと回して』」

「全然わかりませんよ！」

「ぐぐーっと回せと書いてあるから回す」

「だからっ、そんなアバウトでいいんですか!？」

「ユーザーは説明書に従うもの。次は『その横の青いレバーをがーっと上にやって』」

「説明になってません！」

いつも冷静な紳だが、何事もキッチリやらないと気が済まない性質である。

なんともハッキリしない説明の内容にストレスは溜まる一方だった。

「ストレスが溜まると禿げる」

「そういうことは言わなくて結構です！ はあ……次は何ですか？」

「『はっはっはっ、今までご苦労だった』」

「前振りは飛ばしてください」

「『あとは行動開始ボタンを押してね。一番右上のボタンだよーん』」

右上のボタンを見る。黄色と黒の縞模様で囲われた部分に大きく『自爆注意』と書かれている。

「……自爆って書いてありますが？」

「ユーザーは説明書に従うもの」

「押すんですか!？」

ポチッ！

『――ミ、ミミミミミミミミミミ』

人型ピッチングマシンが奇妙な音を立て始める。

「何か鳴ってる」

「言われなくても分かります」

『ミミミミミミナミミミミミミナミミミミナミミナ』

否、それは音ではなく——“声”。

「何か言ってる」

「言ってる?」

『ミナミナミナミナミナミナ——』

一瞬、その“声”が途切れ、

『皆殺シダアアアアアアアアアアアア!!!』

次の瞬間、黒い巨人（ピッチングマシン）が跳んだ。

「なっ!?!」

真上に、5メートルも。

その場で大砲のような右腕を大地に向け、背中からは白い蒸気が

吹き上がる。そして――

『皆殺シダアアアアアアアアアアアア！！！』

白い剛速球を砲弾の如く撃ち放つ。

「うわあああああっ!？」

「……………」

普段のキャラをかなぐり捨てて逃げる紳と、冷静に弾道を見極め回避する蜜柑。

黒い巨人は地響きを立てて着地する。

蜜柑は距離を取ると、ポケットの中の代物を手に――

「……そういえば、今ジャージだった」

手に取ろうとしたが、そもそも持ってきていなかった。

『皆殺シダアアアアアアアアアアアア！！！』

再びの砲撃。ピッチングマシンが出すような球速ではない。

蜜柑は体を捻って射線から外れる。

目標を見失った球は速度を維持したまま壁に衝突、そのままめり込む。

「ど、どうするんですか蜜柑先輩!」

蜜柑は紳の言葉にしばし考える。

自分は説明書の通りに操作を行った。それにも拘らず機械は暴走。つまり自分に非の打ちどころはない。

となれば、悪いのは製造元。製造元に対してユーザーがやることといえば、

「リコールを請求する」

「そういう問題ですかっ!?!」

『皆殺しダアアアアアアアアアアアアアアアア!!!』

言い合う2人を目掛けて三度の砲撃。

さすがに三発目ともなると紳も慣れたか、問題なく避ける。

球はグラウンドの端にある木々に突き刺さった。

「ううううう、出費が増える……」

「裁判で勝って鏡華に払わせる。我慢」

とりあえずはこの場から逃げようとした時、

『皆殺しダアアア、ミ、ナ、ミミミ——』

唐突に、黒い巨人の動きが止まった。

「と、止まった……?」

「油断させてから来る。海外映画じゃ当たり前」

「そんな馬鹿なこ『殺シダ!』とが……?」

視線を戻す。

『殺シダ! 殺シダ! 殺シダ!』

再び動き始めるピッチング(?) マシン。

その巨体を駆り、今度は離れた所で野球練習している4人に向っていく。

「……………」

「海外映画じゃ当たり前」

嵐の過ぎ去った空間に、蜜柑の言葉が静かに響いた。



『殺シダ! 殺シダ! 殺シダ!』

「ガタガタうるさいわね」

……紳と蜜柑先輩の方が騒がしいなあ、とか思ってたら、突然地響き上げてロボマンが強襲。物騒なコト言いながらこっちに向かってきました。

「ああああああ……やっぱ真桜が惨い事をしたから復讐しに来たんだ」

鼻を殴りつけられたら誰だって怒り狂うよ……。

「はっ。その程度で相手を殺そうだなんて、間違いなくゆとり世代ね」

「同じくゆとり世代のお前が言うなよ」

それに、そういうヤツは別にゆとり世代じゃなくてもいるから。

「とにかく、殺すだ何だ言ってるのは問題児よ」

何故だろー？ いつも俺のすぐ近くに問題児がいる気がするよ？

『殺シーー』

ロボマンの右腕が持ち上がる。黒光りするロツ○バスターっぽい大砲。

ブシューという音と共に、背中から白い蒸気が吹き上がり――

『ダアアアアアアアアアアアアアア！！！』

何かが凄いスピードで駆け抜けた。

真桜はサイドステップでそれを避ける。相変わらず超反応。魔王

陛下はダテじゃない！

と、後ろで破砕音。

「……………」

振り返ってみれば、電柱にめり込む野球ボールの姿が目飛び込む。

……って、今のボールかよ！

たしかにピッチングマシーンだけど、こんな球速で練習できるかあ！

何考えてんだ、あんの元会長！ ドチビ！ 小学生！ お前のかーちゃんデベソ！

「ておうっ!？」

足元で何か跳ねた！ 何？ って考えるまでもないか、ボールに決まってるよな。

「義裕。いつまでもそこにいたら流れ球に当たるわよ」

当然と言えば当然ですね。

「おし。一姫、風月、逃げるぞ……って、すでにいないし！」

辺りを見回せば遙か向こうに2人の姿が……。俺を置いていくなよ。

「だから、突っ立てんじやないって言ってるでしょ！」

「ぐう!?!」

真桜に引っ張られて急な動きで首が変な音を立てた。

が、今回は怒りません！ 目の前を白球が通り過ぎて行ったからです！

引っ張ってもらわねばジャストミート！ そして俺の頭はただのミートに……。

「た、助かったぜ……」

「まだ助かってないわよ」

「へ？ ——うはおっ！」

再び真桜に引かれて剛速球を回避。首痛い！

それにしてもロボマン……躊躇いなくこっちに撃ってくるとは……！

もはやロボマンはピッチングマシンじゃありません。キリングマシーンです。

責任者出て来い！ 俺がメタメタにしてやんよ！

『殺シダアアアアアアアアアア！!!』

「……いい加減耳障りだわ。スクラップにしてやる」

おおっ、真桜が啖呵を切りました！
しかし真桜、そのセリフには魂が籠ってないぞ！ どれ、いつち

よアドバイスしてやるか……。

「真桜、真桜」

「なに？」

「そこはスクラップよりジャンクって言った方が燃える」

ジャンクにしてやるわ、ってどこぞの薔薇な人形みたいでいいじゃない？

「お前が燃えろ」

あれ？ ナニユエ？

「ぬわああああああああああっ！」

投げられた。

地面で擦れる摩擦イタっ摩擦燃える燃える燃える痛あああああ
あああっっ！

そのまま立ち上がる気力もなく、沈黙。

……………。

「ヨシ先輩、生きてますか？」

「……………」

「返事がない。ただの屍のようだ」

「生きてマース……」

突っ伏したまま風月の声に答える。真桜も一応、投げる方向は考えてくれたようだ。

「ううう……で、どうなってる？」

「一言でいえば、物凄いことになってますわ」

物凄いこと……？

一姫の言葉に視線を真桜の方にやる。

『殺！ 殺！ 殺ス！ コロスウウウウウウウ！』

「無駄。無駄。無駄。無駄」

砲弾と変わらないようなロボマンの剛速球を手にしたバットで打つ、打つ、打つ、打つ！

怒濤の四連発を弾き返し、発射後の隙を衝いて懐に入る。

「そもそもあなたの存在が無駄！」

かなり酷いことを言いながら、飛○御剣流と言わんばかりのアツパー的な一撃をバットで繰り出す。顎にクリーンヒット。

真桜の攻撃は止まらない。空中で体を捻り、その一撃で浮き上がった巨体の、人間であれば鳩尾である部分に突きを入れ――

「ハッ――！」

裂帛の声と共に吹き飛ばす！

『ギ、ギギギギギ、ギ———』

ロボマンは数回バウンドして転がって行き、壁にぶつかって沈黙した。

おーう。相変わらずデタラメでい……

魔王陛下VS殺人機械。勝利は魔王陛下のモノに！

まあ、分かり切ってた結末だけど。

「腹立たしいほど弱かったわ」

不機嫌そうに真桜がこっちにやってきた。

つか、弱かったって……あれは十分に強いと思うが。

そもそもピッチングマシーンに強いも弱いもないはずなんだが……。

「重量とか考えても、人間と比べれば強いんじゃないですか？」

風月が素直に疑問を口にしてくれた。

「まず攻撃が単調。次に動きが鈍重……というか、撃ってる間移動できないみたいね。さらに軽い」

「軽い！？」

「私の一撃で浮かび上がるくらいだから、軽いでしょ？」

……判断しにくいな、それは。

「バットで倒せる、その程度の相手ってことよ。陽介なら一撃で沈めるわね」

そりゃバットと竹槍なら竹槍の方が強いに決まってる。

「それにしても、せっかくの新技を試さなかったのは失敗だったわね」

……内容は気になるが、藪を突いてヤマタノオロチが出てきたら困るので放っておく。

「真桜先輩！ 新技って何ですか？」

空気読めよ、風月！

「それはね——」

ああっ、言わないで！ それはきっと新たな争いの火種になるのよ！

だからその先を『ブ』……ブ？

『ブ、ブブブブブブブ——』

「……まだ動いたのね」

ロボマン！？ もう止めるんだ！ キミじゃ真桜に勝てるわけが

ない！

そんな俺の心の声は当たり前前だけど届かない。ロボマンが高く跳躍する。

ハッ！ 逆光！？

太陽を背に黒い巨体が空を舞う！

『ブツツツツツコロー』

右腕のバスターを下に向ける。狙いは当然のように真桜。

「策を練ろうが所詮は同技。マンネリにも程がある」

そんな相手の行動を魔王は静かに嘲笑する。ぶっちゃけ嫌なヤツだ。

「見せてあげるわ。これが新技。対体育委員会戦の切り札」

『スウウウウウウウウウウウウウウ！！！！』

真桜から見て斜め上から放たれる剛速球。避けようが弾こうが真桜の自由。

が、できるなら弾かないで欲しい。弾かれたら俺たちに当たるかも知れないから。痛いじゃ済まんから！

「倉里式必殺打法——“葬乱”^{ほうむらん}！」

カッキイイイイイイン——！！！！

快音、というか怪音を響かせて剛速球が打ち返される。

その速度はロボマンが撃ち放っていた時と同等、いやそれ以上。ということは破壊力もそれ以上で……。

『ガ——ガヴオア——』

球はロボマンの首から上を吹き飛ばして、空の彼方へと消えていった。

むごい……むごすぎる。ロボマンが不憫でならねえ……。

首なし死体となったロボマンが地面に墜落。轟音とともに大爆発した。

黒い煙がもくもくと空へ——。

「最期には爆発する……中々いい趣味してるわね」

「どこが!？」

「悪の美学よ」

確かに悪の組織の改造人間とか宇宙からやってきた大怪獣は爆発するけど、残された方としては堪ったもんじゃないんだが……。
当事者になった今は特にそう思う。

だって。

「後片付け、どうするよ？」

爆発で散らばったロボマンの破片。焦げたグラウンド。ヒビ入った地面。他にも壁や電柱にめり込んだボールとか。

「やるに決まってるでしょ。球技大会、明日よ？」

「いや無理だろ、これは……」

被害状況が凄すぎるよ。直すにも限度があるんだから。

「問題ないわよ。無理でもやる——それが東雲クオリティ」

「東雲クオリティって、俺にやれと？」

ここの修復を、単独で？　ムリムリムリ！

「安心しなさい。あなたの出る幕は、ない！」

事実だけど、そう力強く否定されるとムカつく。
てか、それじゃ何で東雲クオリティ？　ハッ——！？

「ま、まさか……それは！　それだけはっ！」

「ふふふっ。明日が楽しみね」

真桜が心底楽しそうに笑った。俺は笑えそうもない。
明日の球技大会は、どうなってしまうのだろうか？

俺の心の雲行きは、ロボマンが吹き上げる黒い煙のように曇って
いくのであった……。

第15話：地獄の特訓・野球編（後書き）

結局まともな野球練習をしてない話。いつものことですが。

さよならロボマン。

彼の暴走の原因は球技大会が終わった後に書くつもり。

そしてついに次回、球技大会開始。

東雲クオリティの力で、まともな球技になるかは不明です。

序盤のイベントのはずなのに、ここまで来るのが異様に長かったなあ……。

第16話..超絶技巧球技大会1

球。

“球”という字は“王”が“求”めると書く。

これは昔の王侯貴族がこぞって球状の物を高価なものとして求めたことが由来であり、古代王朝においてはボールひとつでも大変な価値を持っていたそう。

「義裕」

「……なに？」

「本当のようで嘘な話をして現実逃避しないでくれない？」

「……………」

皆さん、ごめんなさい。今のはウソです……。

本日は球技大会。空はビーカン。絶好の運動日和。

だけど俺の心は曇天。曇りに曇って生物が死に絶えてしまう……。

「ふふふー。今年は保健室が大繁盛かな？」

「やはり何か仕掛けましたか」

体育館にて開会式が進められる中、俺を挟んで真桜が会話する。

「大丈夫だよー。地雷もレーザーもおろか、トラバサミすら使っていないんだから」

我が母、東雲 紗百合と。

「つまり他の物は使ったということか……」

「ヒロくんのご想像にお任せするよー」

ロボマン大暴れで荒れ果てたグラウンドを一夜にして再生したのはこの母である。

息子の俺ですら理解できない超常的な技術を駆使して、瞬く間に元通り……にはならない。見た目は同じでも機能が同じとは限らないからな。

我が母の悪癖は『トラップ作成・設置』。当然修復したグラウンドにもトラップが……。考えただけでも気分が暗くなる。

「問題ないわね。紗百合さんのことだから即死トラップはないだろうし」

いや、その言い方だと重傷トラップはあるんだが。

「そのとおり。即死はないよ」

だから重傷は？

「義裕」

「なに？」

真桜がこっちに顔を向けていた。目が、真剣だった。

俺、何かしたっけ？

「Who are you？」

「へ？」

『Who are you？』——あなたは誰ですか、っていきなり何を言い出す？

「分かりやすく言おうかしら——あなたは本当に東雲 義裕？」

「本当も何も、俺は東雲 義裕だけど」

質問の意図が本当に分からない。

「そう？」

「俺の偽者なんざ、いないだろ……」

「私は今の義裕は偽者じゃないかと思ってる」

なんで？

「私の知ってる義裕は馬鹿で単純で考えなしで、猪突猛進で妄想家で無駄にテンションが高くて」

おい。

「学習能力が低くてヘタレで、無駄にテンション高くてどっかネジが外れているような――」

無駄にテンション高いって2回言ったよ！ そんなに高いかよ、俺のテンション！

「そんなどうしようもない変人なのよ！」

「そんなに俺を貶めて何がしたいんじゃゴラアアッ！」

喧嘩売ってんのか！？ それなら買うぞ、定価の4割引きでな！

ファイティングポーズを取って真桜に拳を向ける。

この東雲 義弘！ 魔王陛下如きメツタメタにしてやんよー！

「そう。それでいいのよ」

「ほほう、そうか。そんなに俺にメツタメタにされたいのか。いいだろう……喰らえ、我が秘拳をぐほっ！？」

す、水月……！（人体急所）

「勝てないと知っているのに理解はしない駄目さ加減。唐突に意味不明なことを言い出す変人度。それでこそ義裕」

俺ってそんな風に見られてんだ……。

「ぶっちゃけて言えば、さっきまでの義裕は見るに堪えなかったのよ。テンション低すぎでウダウダで暗くて」

どっちにしろ酷い言われようだな、俺……。

「あなたがあのままなら、私はこの世界を滅ぼそうかと思ったわ」

「スケールでかいよ!？」

「いいえ、小さいわ。壊すだけなら大したことじゃないでしょう?」

「十分大したことだよ!」

爪楊枝でダイヤモンド割れって言ってるようなモンだよ、それは!

「やれやれ、器が知れるわよ?」

「誰が350ミリペットボトルだ!」

「誰もそんなこと言ってないわよ」

ふう、と息を吐いて背を伸ばす真桜。

確かにテンションは低かったかも知れん。いや、事実低かったな。いかん……いつでも楽しくがモットーの俺が、たかが母親がトラップを仕掛けただけで意気消沈してしまうとは……!

ここは是が非でもテンションを引き上げなくては! そう、いつもの100倍くらい!

「——テンション100倍、ヨシヒロマンっ!……!」

「弱そうね」

「しゃらくさい！ いいんだよ、これで！ 今日のサッカーは大活躍してやるもんね！」

「そう。期待して待ってるわ」

おっ？ 珍しく期待してくれた？

「ただし期待を裏切れば死」

「宝くじが当たらないからって番号決める人を殴るのは間違ってるぞ」

過剰な期待は身を滅ぼすぜ。ギャンブルはほどほどにな！

「そうだよー、真桜ちゃん」

おや、母君も助け舟を――

「お葬式は結構手間がかかるから死なせちゃダメ」

「そこなのか、マイマザー！」

「そうですね。肝に銘じておきます」

真桜！ そこは肝に銘じないで！

「少しは悲しんでくれよ……」

「ああ、うん、わかった」

「なんか生返事だよ!？」

色々悔しいぞ、くそっ!

「ヒロくんも元気になったことだし、先生は保健室に帰ってるねー」

元気でなかった原因はあんたなんだが、母よ。

「1年男子は籠球! 1年女子は排球! 2年は男女とも蹴球! 3年は庭球、卓球、羽球、避球、門球のどれかに自由参加だっ! 自分が参加してないときは友達や先輩後輩の応援に行くんだぞ!」

いままでロクに聞いていなかった体育委員長の説明が聞こえてくる。

今さらだけど、開会式の真っ最中だったんだよね。

それはともかく、体育委員長がまた妙なことを言い出してるな。

「今は戦時中だったかしら？」

「いや平成だったはずだけど……」

真桜が思わず戦時中と錯覚するくらい『球』ばっかだ。

「順にバスケ、バレー、サッカー、テニス、ピンポン、バトミントン、ドッチ、ゲートボールのことだな」

全問正解者には豪華粗品が当たるのだ！ ふっふっふっ、湯けむり温泉旅行券は俺がいただいた！

「そんな景品はないから」

「もちろん知ってる！」

ただ言ってみただけだ。その方が面白い。

「ついでに卓球はピンポンじゃなくてテーブルテニスよ」

……………。

「……卓球は卓球って言うじゃんか。だから問題に入っていないんだ」

「間違えたのね。素で」

「ソナナワケナイヨ」

「……もう何も言わないわ」

そうしてくれると嬉しい。

「説明は以上だっ！ 皆、豪華賞品が欲しいかあああああっ！？」

「欲しいぞおおおおおっ！」

体育委員長の説明の2割も聞いていないが、自己主張は激しく！
なんてったって俺は湯けむり温泉旅行に行きたい！ 行きたい！
行きたいっ！

「だからそんな景品ないから」

「夢はでっかく地球一周！」

「……温泉は？」

もちろん地球一周に含まれているに決まってる。

「どっちにしろ優勝しないと商品はないわ」

「じゃあ優勝する！」

「その後の野球で生徒会が勝たないと自腹と変わらないわよ？」

「じゃあ勝つ！」

「どれだけ単純思考なの？」

真桜の知る俺は単純だって言ってたじゃん。

「ハッハッハッ！ 今日の俺は一味も二味も違う、言わばスーパー
ヨシヒロ！ 大統領でもブン殴ってみせらあ！」

「へえ、それじゃあ——」

「ただし真桜だけは勘弁な！」

「……チツ」

殴っても効かない上に、報復行動は即死攻撃だもん。誰だってやらんわ、そんなこと。

「それじゃあ球技大会、開始だああああああああつ！」

「「「「オオオオオオオッ！！！」」」」」

体育委員長の絶叫と一般生徒の雄叫びが、体育館を震わせる。

これから生徒たちはそれぞれの戦場に向かうのだ。

生徒会しか知らないことだが、中でもグラウンドは第三者の仕掛けたトラップが跋扈する死地。

特に1回戦目を戦う戦士たちは生贄にも等しいだろう……はたして、彼らの運命や如何につ！

「1回戦目は義裕のチームよ？」

「俺のところが生贄かよ！？」

第16話：超絶技巧球技大会1（後書き）

という訳で球技大会……始まってません。あれー？

それにしても短い話になってしまったような……。

どうも気分次第で書くものが増えたり減ったりしてしまうので文章量が安定しません。

こここのところ話が長くなっているから短く感じるだけで、本来はこのくらいの文量がちょうどいいんですけど。

次回以降はサッカー↓他の人たちの応援↓野球という流れになる予定です。

もつとも、予定通りに書けないのが私がダメ作者たる所以なのですが。（威張るな）

第17話：超絶技巧球技大会2

宮水沢学園球技大会。

体育委員会の主導で行われるこの大会は妙なところで無駄に豪華である。

たとえば――

『さあ開幕しました、第うん十何回目の球技大会！ サッカーの実況はあたし、皆のアイドル久遠 九八なのさ』

1つの競技に必ず1人は実況がいたり、

「カメラが1台。カメラが2台……」

「クラスメイトA、そういうのは気にすんな」

どこのTVクルーですか？ とか聞きたくなるようなカメラマン（実態は放送委員）が試合をつぶさに撮影してくれたり、

「ギャラリー無駄に多いわなあ」

「クラスメイトQ、そういうのも気にすんな」

どこの競技場ですか？ とか聞きたくなるような観戦席（北京ス

タジアムもビックリ）が建設されてたり、

……無駄に豪華だよな、うん。

だがしかあぁあし！ そんなことは今さらなのだ！ 気にしない、気にしない。

さて現在、お着替えも済ませてセンターに集合。

我らが6組精鋭と戦うのは2組！ 悪いがこの勝負……勝たせてもらうっ！

「もうぞっ！」

「へっ？ な、何？」

俺の上げた声で2組のヒョロ眼鏡なキャプテンが怖気づく。

フッ、この程度の言葉で動揺しおって……勝負の行方はもう見えたな。

『解説は毒舌評論でお馴染みの夜帳さんの姫っち。ゲストは今年も恐怖政治をお送りする魔王陛下、倉里さんの真桜っち。それじゃ2人ともヨロシクなのさ』

『姫っち』はやめてくれませんか？ どうしてもそう呼ぶというなら、今日から貴女のあだ名は“ギトギトした黒いの”になりますわよ』

『真桜っち』に別に異議はないけど、こんな所に私を呼び出して

何をしろと?』

「……………」

うわー……。

「おい東雲、顔色悪いぞ?」

「気にするでない、クラスメイト無印。問題ない……英語で言ったらモーマンタイ!」

「やっぱダメだろ、お前。てか無印言うな」

無印は無印なんだから仕方ない。

そんなことより何? あの2人が解説+ゲストなの? とってもやりにくいのは気のせいですかね?

『さてさて、初戦は2組VS6組! 無駄に地味な2組と、無駄にテンション高い6組。お2人とも、どっちが勝つと思うかな?』

『……わたくしの見立てでは五分五分ですわね。たしかに6組は浅井、倉須、東雲といった強力な攻撃陣を有していますが、2組のキーパーは弱小サッカー部を全国大会にまで導いた救世主、山本馬熊ですわ。攻撃、防御のどちらかに偏っているとはいえ、実力伯仲。白熱した戦いが見られるでしょう』

うわっ！？ 一姫がまともなこと言ってる！

こ、これは天変地異の前触れかもしれない……！

『うわっ！？ 姫っちがまともなこと言ってるのさ！ こ、これは

富士山噴火の前兆なのさ……！』

『それはどういう意味ですの…… “ギトギトした黒いの”？』

『……謝るからその呼び名はやめてほしいのさ』

まあ、“ギトギトした黒いの” って言葉からは明らかに嫌なものしか想像できんもんな……。

あの九八を黙らせるとは……さすが一姫。俺には真似できん。

『もう何人か同じようなことを考えた方がいらっしやるようですわね。……今度会ったら覚悟なさい、特にY・S』

Y・S ㍯ ヨシヒロ・シノノメ？ 俺の思考を読んだのか……一姫、恐るべし。

『え、と真桜っちはどうかな?』

『戦力分析は一姫がやったから今さら、ね。私から言えるのは1つだけよ』

『おおっと、何なのさ?』

『真剣勝負において負けは死を意味するわ』

『ええっと、つまり?』

『死にたくなければ勝て、6組』

『……以上! 放送席から魔王陛下の応援メッセージなのさっ!』

……わー、魔王陛下のありがたいお言葉だぞー。

って、ウワー! もう負けらんねえよ、てやんでい! ああ負け

られねえ、べらんめえっ!

やりにくいとか言ってる場合じゃねえ!

「6組男子諸君——! 我々は存亡の危機に直面している!」

そう、この試合……否! この戦争は負けられないのだ!

この戦場に居並ぶ戦友たちの顔を1人ずつ見ていく。居並ぶ顔ぶれを見ていって思うのは……

「ブツサイクだなあ、お前ら」

「「「「ケンカ売ってんのか、テメエツ！！！！」」」」」

ハッ、ついつい本音が。いかんいかん。

「ゴホン——精悍な顔付きだな、お前たち」

「「「「……………」」」」」

めちゃくちゃ冷たい視線が突き刺さってくるけど無視無視。

「俺たちは自分たちだけじゃない、試合に参加しない他の6組男子の命をも背負ってんだ……それを、その重みを、忘れるんじゃないぞ！」

「何キロ？」

「え？ えーっと……」

お、重さは何キロかなんて聞かれるとは思っても見なかったな。
他の6組男子の命の重みは……

「よ、42. 195キロ」

「軽いよ！」 「細かいよ！」 「マラソンかよ！」 「キロメートルかよ！」

あああああ。ツツコミマシンガンの連射を受けた。でもそんなの
カンケーねえ！

「とにかく！俺たちは勝たねばならない！それこそが――使命なのだ！」

そう、使命。命を使うと書いて使命。

俺たちは生き残るために優勝しなければならないのだ。そのために命を使わねばならないとは、なんとも本末転倒ではありませんかね？

だが、今さらそんなこと気にしても仕方ない。仕方ないんですよ、奥さん。

「それじゃあ、サイレンがなったら試合開始ですから」

人数確認が終わった審判さんが、最終確認のように告げてくる。
ふむ……サイレンが鳴ったら、

「山奥の閉鎖的な村から脱出するんですね、わかります」

「はいそうです。視界ジャックをうまく使ってくださいね――って違います」

はっはっはっ。ノリツツコミありがとうよ、審判さん。

さて、視線を巡らせて巨大なデジタル時計を確認する。残り数十秒で試合開始。

ボールはこっちが取った。が、逆光で相手側を見るのが困難。視界最悪。

敵は2組。個人の運動能力はこちらが上。ただし2組キーパー、山本 馬熊だけは別格、要注意。

さて、そんな2組相手にするためのマーベラスでブリリアントな

作戦は――

ビイイイイイイイイイイイイイイイイイ！

「さあ突貫だぜッ！ 逝くぞA、無印！ ヒヤッフウウウウウウ
ウウウ！」

作戦など、ないっ！ 所詮俺の頭じゃ、ナポレオンが如き軍略を
生み出したりはできないんだよ！

高笑い（？）をして2組の軍勢にプレッシャーを掛けつつ、ドリ
ブル！ ドリブル！

「りょーかいっ！」

「分かった。てか無印言うな」

クラスメイトA、および無印が俺に次いで前に出る。

左右を走る両者を尻目に、俺は華麗に中央をドリブルで走破する。
散らばっていた2組ディフェンス陣が走る俺目掛けてワラワラと
集まってくるが、

「その程度の腕前でえっ！」

右から来たヤツは相手にせず素通り！

左から来たヤツはスピードをちよい上げて楽々突破！

正面のヤツにはフェイントかまして、バイバイさよならまた明日！

「俺を捉えられるとでも思ったか、ハッハー！」

遅い、遅い、遅すぎるわっ！ 真桜に比べりゃお前らなんぞミジンコ並じゃ！

サッカー不得意なんだか、やる気ないんだか知らんが、そんな鈍足で俺からボールを奪おうなどとは夢また夢……61式戦車でサイコガンダムを倒そうとするようなものだぞ。

そんなこんなでディフェンス陣を突破。

しかし、ここまでは俺のポンコツ思考回路でも十分にシュミレートできた展開だ。問題はこ・こ・か・ら♪

ゴールの前に仁王立ちする大柄な男——山本 馬熊。

サッカー部の救世主とも言うべきこの男を攻略しなければ、俺たちには明日はない……！

「まずは小手調べっ——受けてみれえっ！」

左足で宙に浮かせたボールを右足でシュート！

回転をかけた一撃は空中でカーブを描き、ポストすれすれでゴールに入るという俺の必殺球だ。

真桜なら簡単に防ぐんだろうが……普通の人間が防御するのは難しい、はずだ。

はたして、そんな必殺球は——

「フンッ！」

バシイイイ!

「んじゃとおおおおおっ!？」

——片手であっさり捕まえられた。

いや、待て! 片手って何だ?

いくらカーブだからって球速そのものはかなりある、ってか回転かかっている分弾かれやすいはずなんだが?

それを掴むって……サッカー部の救世主、恐るべし!

「受け取れいっ、長坂!」

山本が野太い声を上げ、手にしたボールをディフェンスの一人に投げ渡す。

ハッ、ぼーっとしてる場合ではない!

必殺球を止められたとはいえ、あれは小手調べ。小手調べなんだ。だから大丈夫。勝てる。うん、勝てる。

……ほ、ホントに小手調べだったんだからね!

「と、とにかくA! 任せた!」

「合点承知ノ介! 任せときな!」

まあ、頼もしいお言葉。

明らかに運動不足そうなヒョロ眼鏡（長坂くん）に放たれたボールを確保すべくダダッ、ダーッシュ!

クラスメイトAは運動能力が（常識の範囲内で）高い方だから、ヒョロ眼鏡（長坂くん）からボールを取り戻すことくらい、赤子の

手を捻るようなものだろう。

今思ったけど、赤子の手を捻るって苛めだよ。児童虐待だよ。

『児童相談所ですが……』『違う、俺は虐待なんてしてない！』

あれは舐だっただんだ！』『言い訳は見苦しいですよ』『俺は、俺は』

悪くないいっ！』

……おお、なんと言うことだ。日本という国はどうなってしまっ
んだ！？

——そんなことを考えていたのがいけなかったんだろうか。

「お、わああああああああああ——……！」

そんな叫び声だけを残して、

「え、A!？」

クラスメイトAの姿がグラウンド上からかき消えた。ザ・神隠し！

『おおっ！？ 6組選手、浅井 英太郎の姿が消えたのさ！ 姫

っち、これはいったいどういうことかな？』

『よくご覧なさい。地面に穴が空いてますわ。浅井はそこに落ちた
のでしょ』

『地面の穴に？ 彼はN I N J Aだったのさ？ 土遁の術！ ジャ
パンの神秘！』

『貴女はこの国の生まれですの？ 叫び声から考えて彼にも想定外の事のようにすし……落とし穴、と考えるのが定石ですわ』

『なんとビックリ、落とし穴！ いざ、麻酔玉投げ込んで浅井くんを捕獲するのさ。激運、捕獲名人装備で報酬もウハウハなのさ！』

『……何の話ですの？』

『真桜っち、説明したげて』

『たしか今話題のゲーム……モンスターペアレントハンター、だったかしら』

『最近のテレビゲームは珍妙な物を作りますわね……』

いや違うから。そんなゲームないから。混ざりすぎだから、真桜よ。

にしても、そうか……母さんのトラップか！ 思いつ切り忘れてたな。

マズイな。唯でさえ2組の守りは固いつてのに、トラップまであるとは……おまけにAは消えちゃうし。

しかし、今はチャンスだ。眼の前に迫ってきたAが消えるのを目の当たりにして、ヒョロ眼鏡（長坂くん）の動きが止まってる。

いや、というか選手全員の動きが止まっている。ボールを奪い返す絶好の機会！

「——という訳で、ボールは貰ったあつ！」

「あつ！」

抜き足差し足N I N J A☆D a s hで近づき、気配を悟られる前にダッシュで奪取！

ダッシュで奪取……ホーホッホ、こりや座布団一枚。

「A亡き今、山本を倒せるのは俺たちしかない！ 逝くぞ無印！」

「だから無印言うな！」

もうっ、いけずなんだからっ♪

再びドリブル！ ヒョロ眼鏡（長坂くん）の元までボールを取りに行ったせいで、センター付近まで戻るハメになっていた。面倒くさいが再び行くでっ！

「はい突破〜！」

相変わらずぬるい2組ディフェンスを突き崩し、目指す相手はキーパー山本。

さっきは俺の必殺球を見事に防いでくれたが……次はない！ 無印と俺の絶妙にして精緻なるコンビネーションを見るがいい！

「いっく——」

ぞー！ と続けようとしたとき、足元でカチッという音。

明らかに不自然で、かつ普段から聞きなれた音が俺の耳に飛び込んだ刹那、俺は即座にダイビング。ボールも放り出してハリウッド

ダীবブ！

次の瞬間、ビュンツという風切り音とともに白い塊が俺の頭上を高速で通過。寸前まで俺がいた所に着弾した。

「くっ、今度はトリモチか！」

当たっていたら確実に動きが取れなくなっているだろう。それ以前に、あの勢いの物体に当たれば吹き飛ばされてたな……。

「て、ボールボール！」

トラップ回避の為に放り出したボールはコロコロ転がってヒョロ眼鏡がゲットした。長坂ああああああ！

「待ちやが——」

カチッ。

「とりゃあああああ！」

前転回避ッ！

今度は上からタライが降ってきた。

地面に落ちてガランガランと虚しい音を立てる。

ええいつ、どういう仕組みだ！？　ここは屋外だぞ！

絶妙のタイミングで邪魔してくるのを体験すると、母さんがトラップを操作してんじゃないかと疑いたくなるぜ、まったく。

その後もトラップが入り乱れ、混乱の中続いていく試合は次第に泥沼化していくのであった……。母さん少しは自重しろ！

『初戦から白熱してるのさ、男子サッカー！ 残り時間も5分を切り、0対0で両者一步も引かず！ まさに一進一退、互角の攻防なのさ！』

『最初の予想とほぼ同じですわね。もっとも浅井は途中退場ですが……』

『M I A ってヤツね』

真桜よ……M I A（戦闘中行方不明）なんて言わないでやってくれ。

ただ落とし穴にはまって出てこれないだけだから……行方は分かるんだよ。

ともかく、0対0。どちらも決め手がないまま残り時間は5分を切った。

ちなみに球技大会では同点の場合、即座にP K戦となる。そうなたらこっちの勝ち目は薄い。

「という訳で無印。何とかしなけりゃ負けるので、何とかしてくれ」

「丸投げかよ。てか無印言うな」

「フッ——何を言おうがお前の名前はクラスメイト無印。それが俺のジャスティス」

「意味わかんねえよ」

わからなくて結構。俺だってわからん！

ボールをトラップしながら無印と会話するが、良案は見つからない。

2組ディフェンス陣はへろへろと表現するのが相応しいヘタレっぷりだが、いかんせんキーパーの山本 馬熊に隙がなさすぎる。

おまけにマイマザー☆さゆりんが仕掛けた罠の数々のおかげで身動きが取りづらい。

時間もないし、次の攻撃が最後になるだろう。

「無印よ、これが最後の攻撃……いわばラストシューティング、だ」

「むしろラストじゃなかったら負け確定なんだけどな。てか無印言うな」

フッ——その程度、百も承知！

PK戦になれば各自もう1回攻撃することになるが、まず勝てないだろうからな。

デジタル時計をチラ見する。残り時間4分弱。お湯を沸かすことから始めれば、ヌードルすら作れない。

良案は特にないが、山本の動きは見切った。そして考えるまでもなく、俺たち6組がとれる戦法なぞ1つしかない。

6組ディフェンス陣、およびキーパーにも目配せする。頼むぞ、みんな！

「行くぞっ——」フォーメーション・デルタ”ッ！！！！」

大声で叫んでドリブル開始。同時に無印も俺の横を走る。ディフェンス陣をゴボウ抜き、一気にゴール前まで駆け抜ける！

『6組、ここで勝負に出るようなのさ！ 何やら妙な作戦があったのかっ！』

『多分ノリで言ってるだけだと思うけど』

『作戦を立てるなど一番不得意分野に見えますものね』

『見えるじゃなくて、実際義裕はそういうの全然ダメよ。単純だもの』

うるさい。そうだよ、ノリだよ、悪いかよ！

言ってみたかったただだよ！ 作戦なんて立てられないよ！ 人間だもの。

作戦がないから——地獄の特訓で編み出した戦法をそのまま使う

しかないのだ！

サッカー部の救世主よ、これから始まる怒濤の連続攻撃……6組男子の血と汗と努力と涙と根性とその他諸々が不気味に入り混じった技術の結晶、その輝きを――防げるものなら防いでみろっ！

「いっけええええつ、マグ○ム！」

『マグ○ムトルネードだっ！』と続けたところだが、それはさすがに我慢して普通にシュート！

初回と同じ俺の必殺球。カーブボールがゴール目掛けて疾く駆ける！

しかし、そこはサッカー部の救世主、俺のシュートに機敏に反応、即座に捕球姿勢を取る。

やはり山本は判断力と瞬発力がとんでもない。単発シュートでは絶対仕留められない。

だがその行動、俺にとっては当然の如く『想定内です』。

実はこの必殺シュート……必殺と言っておきながら必殺ではないのだ。

放たれたシュートは急カーブをし、山本の手から横に数センチずれてポストに衝突。

強烈な回転がかかったボールはあらぬ方向に跳ねる。が、それすらも『想定内です』。

「無印い！」

「無印言うなっの！」

そんな事を言いながらもクラスメイト無印がボールをトラップ、近づいてきたヒョロ眼鏡（長坂くん）を軽くあしらってゴールへ向かう。

「よっ、と！」

無印の放った鋭いシュートが俺のシュートとは逆側に向けて突き進む。

山本は即座に反応してボールを防ごうとする。が、無印のシュートもポストに命中。弾かれたボールが宙を飛ぶ。

「ほいさっ！」

そのボールを受け止めるのは俺ではない。無印でも山本でも、ましてやヒョロ眼鏡（長坂くん）でもない。

『おおっとお！？ 6組ディフェンス陣が上がってきた……っついていか、もうフォワードと変わらんのさ！』

『キーパーまでやって来てますわね。守りを無視して攻めていますか』

そうボールを取ったのは我がクラスのディフェンス陣が1人——クラスメイトC！

「パスっ！」

Cが鋭いパスを放ち、ボールは逆サイドにいるクラスメイトQに渡される。

ディフェンス陣によるパス回しを見て、若干の余裕をもって体勢を立て直そうとする山本を確認すると、

「無印、ガンバや！」

「東雲！ お前のせいで無印呼ばわりが広まってるじゃねえか！」

そんなのはあらぬ疑いですよ、おまわりさん。

Qのショートパスが無印の前に転がり、間髪入れずに無印がシュート！

またもやポストに向かっていくボールだが、山本は律儀にそれを追う。

横目で時計を確認。残り1分。

「ヌオオオッ！」

山本が気迫の籠った雄叫びと共にボールを掴もうとするが、やはり届かない。

ポストに当たってボールが跳ねる。

山本は判断力と瞬発力がとんでもないが、強迫観念でもあるかのように無理にでもボールを取ろうとする。

単発シュートなら絶対負けなし。二連撃で来られても持ち前の身体能力で何とかするのだろうが、執拗な超連続攻撃が続けば……ど

うだ!?

これが俺たち6組の戦い方——『数の暴力』だ!

「……倉須くんが無印呼ばわりされるのは、愉快的氏名のせいじゃない?」

本来ならキーパーをやってるはずのクラスメイトBが、こぼれたボールを拾った2組ディフェンスにスライディング。ボールはコロコロ転がっていき——

「その通り! つまり無印が無印なのは生まれた時からの運命だったのだよ! ジャジャジャジャアアアアン!」

——俺の目の前にたどり着く。

愛と勇気と正義とほんの少しの悪意を込めてえっ——今度こそ喰らえや、マイオールウェイキリングシュートツ!

カーブがかかったボールがゴールに向かって吸い込まれるように飛んでいく。

「やらせるかああああああああああっ!!!」

山本が、跳ぶ。大柄の体からは考えられない大ジャンプ。

だが、それは悪足掻き。今さら跳んでも俺の必殺球は、必殺球は……あれ?

「マ、マズイ!」

山本の跳躍力を甘く見ていた！ ヤツの手は明らかにボールを掴む射程内にある。

俺は思わず一步前に足を踏み出し息を飲――

カチッ。

「ハッ！」

しゃがみ回避ッ！

聞きなれたトラップ発動音と同時に、真後ろから飛んできた丸太が俺の頭上スレスレを通過する。

丸太のワナって……どこの不思議のダンジョンだ。

にしてもこれは『予想外デース』。この土壇場でトラップを発動させてしまうとは……グラウンドに仕掛けられた罠はほとんど引っかけたと思ってたのに。

俺に避けられた丸太は重力、空気抵抗もなんのその、そのまま等速直線運動で直進だ。

……ん？ 直進？

「ゴフアアアッ!？」

跳躍中の山本にクリティカルヒット！

ボールに集中していた山本は受け身すらとれず吹っ飛ばされる。

遮る者のいなくなったボールは当然のようにゴールに入った。

『おおっとお、ゴール！　ゴールなのさ！　試合終了30秒前！
2組の鉄壁が6組に崩されたのさ！』

『実力的には負けてましたわよ？』

『愚問よ一姫、勝てばいいのよ。学生の球技大会でスポーツマンシップに則る人間なんて、まずいないんだから』

真桜さん、それは色々問題発言です。

試合、終了！

「いよっしやあああ！　勝ったどー！」

それにしても母さんのトラップが役に立つとは……世の中何が起
こるか分からんもんだね。

「何はともあれ勝ったな」

「努力！　友情！　勝利！」

「勝てて良かたな」

「よかった、よかった」

みんなも勝利の美酒に酔っている。
はっはっはっ、お酒は二十歳からだぞー？

しかし、この試合ってまだ第一試合なんだよね。初戦から全力全開だったけど……この先大丈夫かな。

優勝への最大の壁はさわか3組だ。何と言っても最強戦力である陽介がいる。

あのクサレ風紀委員長は竹槍を使わずとも普通に強い。運動能力が桁違いだ。

3組と比べてしまえば我らが6組など『戦闘能力たったの5……ゴミめ！』状態だ。

……ま、考えてても仕方ないか。先のことは後で考えればいいし。

「という訳で、皆の衆！ 次の試合まで時間がある！ その間存分に英気を養ってくれ！」

「「「「「おおっ！」「」「」」」」

ウム、いい返事だ。

さてさて、俺は次の試合が始まるまで何してましようかね？



グラウンドの真ん中で、

「なあ……誰か、誰か引き上げてくれよっ！」

クラスメイトどころか審判からも忘れ去られ、落とし穴に放置されたままのクラスメイトAがいたという。

第17話：超絶技巧球技大会2（後書き）

テストとレポートの波状攻撃を受け、執筆時間がまるでとれない作者です。

第十七話「第一試合なのに全力出しすぎじゃね？」をお送りします。

はい。義裕が珍しく活躍できる話ですね。

前にも書いた気がしますが、義裕は運動はかなりできるほうです。周りのメンバーが超人過ぎて本人の自覚はほとんどないのですが……。

ちなみに今回、6組クラスメイト（ABCQ無印）が登場しましたが、ただでさえキャラ多いんで名前は省略ですw

設定上本名は存在しますが、公開されることは恐らくないという不憫な奴らです（Aだけフルネーム出ましたけど）。

試験期間が始まったばかりなので、次回更新は未定です。楽しみにしてくれている人（いるか？）には申し訳ない……。

九月には元の更新ペースに戻したいところです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0082e/>

幼馴染は魔王陛下

2010年10月10日11時56分発行